

最下層

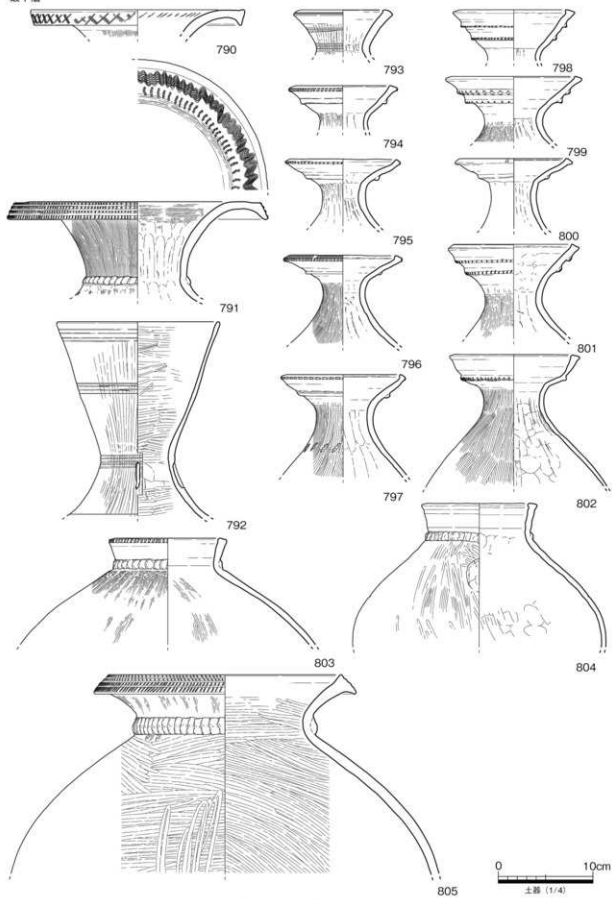


図 133 1 区 SR01(6)

最下層

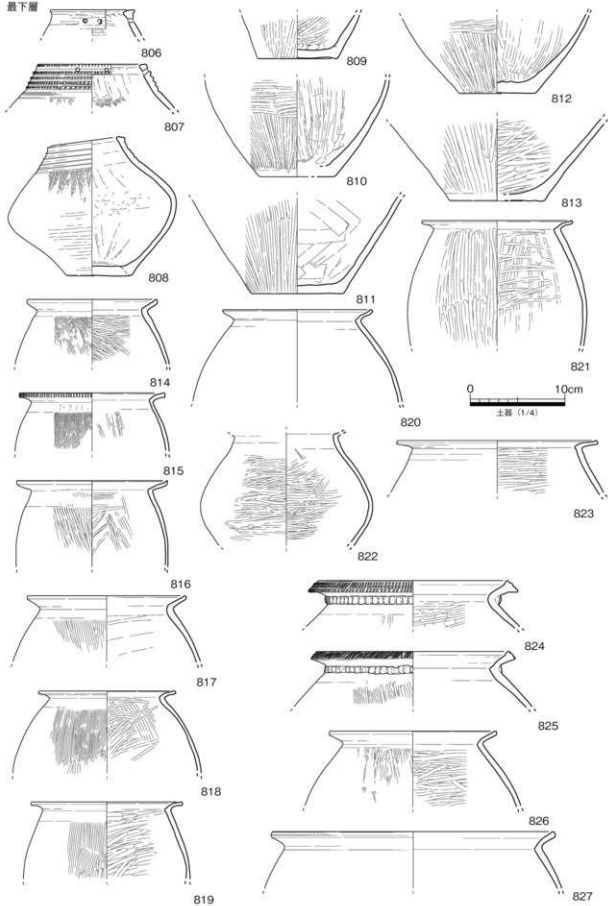


图 134 1区 SR01(7)

最下層

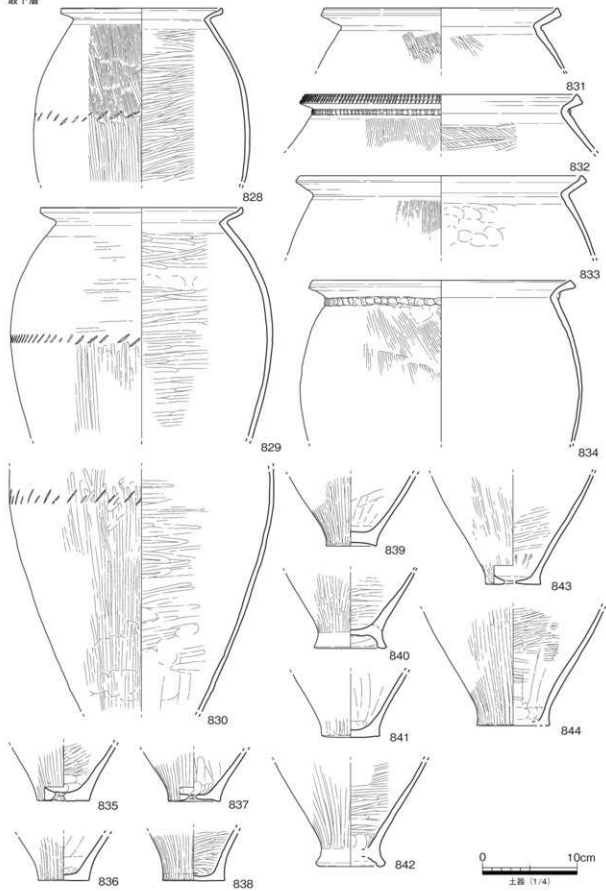


图 135 1区SR01(8)

最下層

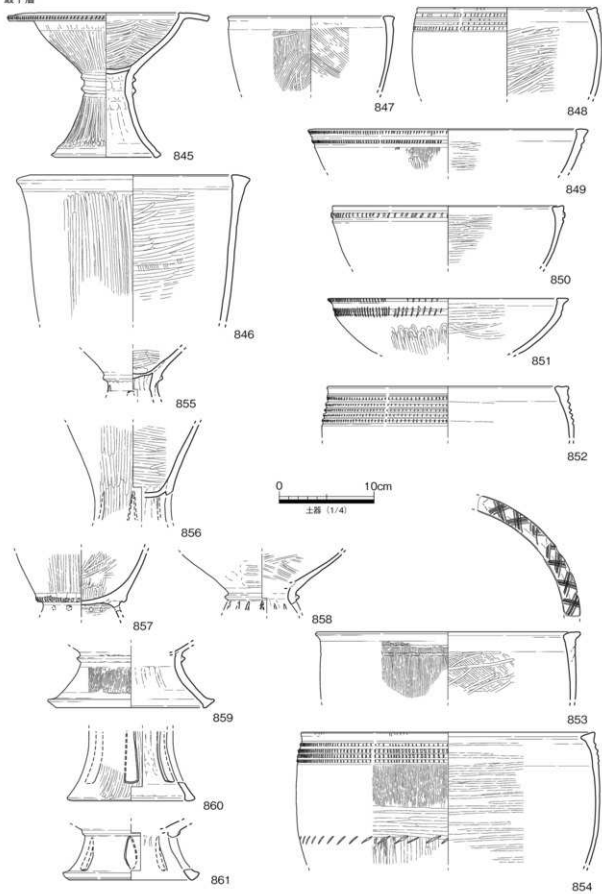


图 136 1区 SR01(9)

最下層

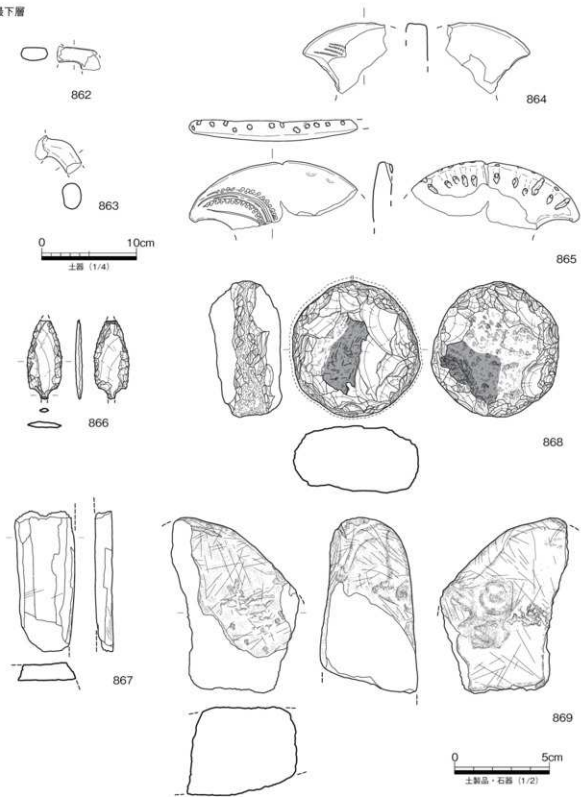
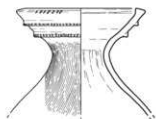


図 137 1区 SR01(10)

下層上位からは、壺 (図 138-873 ~ 878)、甕 (同図 -879 ~ 883)、台付鉢 (同図 -884 ~ 888)、鉢 (同図 -889)、蓋 (同図 -890)、ミニチュア土器 (同図 -892)、土製紡錘車 (同図 -891)、サヌカイト製石鏝 (同図 -893.894)、石庖丁 (同図 -895) 等が出土した。広口壺 873 ~ 875 の口縁部内面は、斜格子文や櫛状

中層



870



871



872

0 5cm

土製品・石器 (1/2)

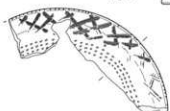
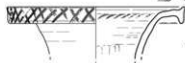
下層上位



873



874



875



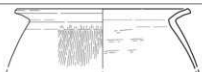
876



877



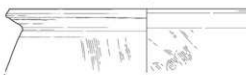
878



879



880



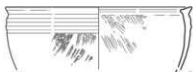
881



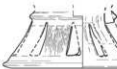
882



883



884



885



886



887



888



889



890



891



892

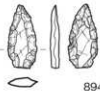


0 10cm

土器 (1/4)



893



894



895

図 138 2区 SR01(1)

下層下位

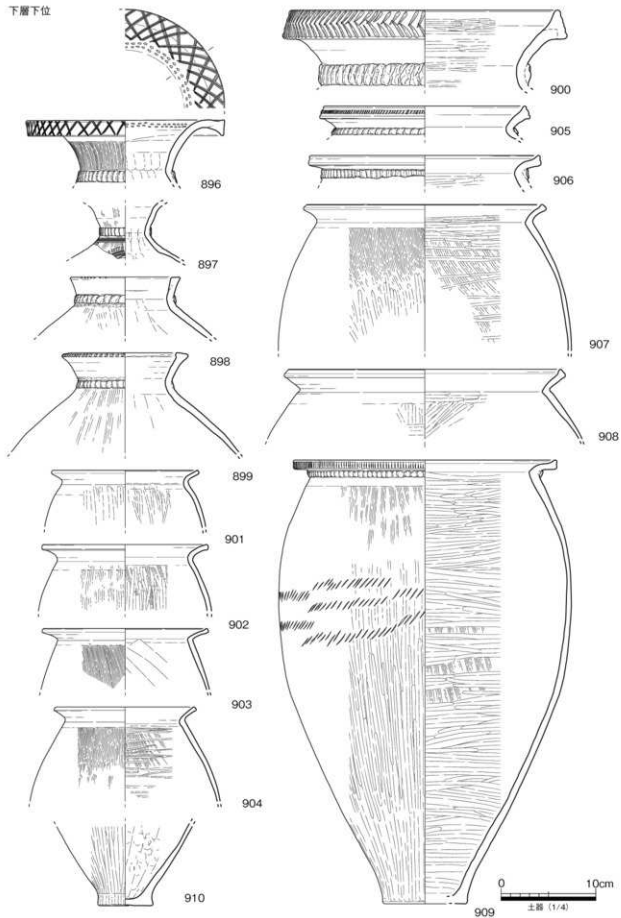


図 139 2 区 SR01(2)

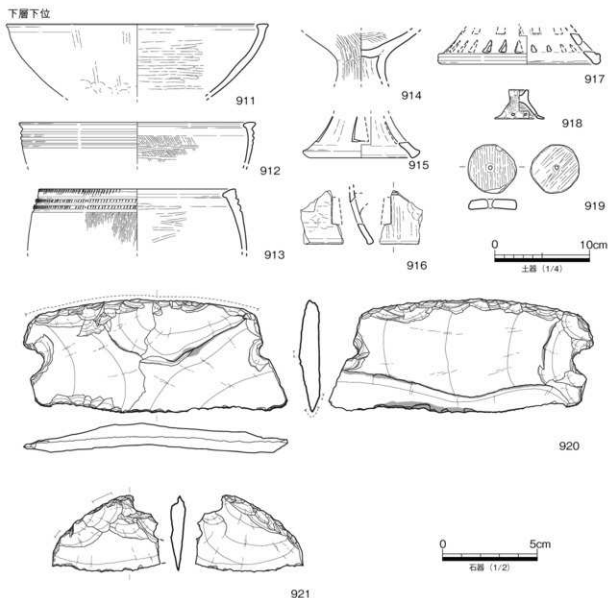


図 140 2区 SR01(3)

工具原体による刺突文などで加飾される。台付鉢脚部は二等辺三角形の透かしが多数穿たれる。一方加飾の乏しい 886 は中期前半新段階に遡る。口縁部が下方へ折り曲げられた蓋 890 は、天井部に 2 孔一対の小円孔が穿たれ、大きさから無頸壺等の蓋と考えられる。土製紡錘車図 919 は、壺もしくは甕の体部片を転用したものである。889 は外面を指頭圧やナデにより整形した浅い皿状の鉢で、終末期後半に下る本来上層に帰属する資料であり、本層に混入したものと考える。出土遺物より、中期前半新段階から中期後半中段階までの時期幅を認める。

下層下位の遺物の器種組成は、下層上位のそれと大きな差は認めない。しかし、時的には中期後半新段階までに収まるものとする。(蔵本)

2. 弥生時代後期

竪穴建物

SH03 (図 141・142)

3区の西部の第2面(IV層上面)で検出された竪穴建物である。SH03の西部は古代の溝SD09・SD11と重複し、削平されるため、全体は不明であるが、残存部分からSH03の平面形は隅丸方形と考えられる。SH03は当初1辺5.3mの竪穴建物と考えて掘り下げた。掘り下げ途中で、壁の内側0.4m付近で底面がもう一段下がるのが確認され、その内側には壁溝と考えられる幅0.15mの溝の断面が観察された。壁溝は土層観察用に残した畦設置のため掘り残した部分で検出してきたにすぎないが、隅丸方形に巡ると考えられる。SH03は当初1辺4.5m前後であったが、途中で外側に拡張し、最終的には1辺5.3mの竪穴建物になったと推定される。主柱穴は4個で構成され、柱穴は径0.3～0.4m、深さ0.4～0.5mである。主柱穴を結ぶラインの内側は一段下がり、壁と主柱穴沿いにはベッド状遺構がみられる。建物の中央部の床面には炉と考えられるいびつな楕円形の土坑SK11がある。土坑の周囲は床面が僅かに盛り上がる。埋土には炭化物が多量に含まれる。遺物は弥生土器片が整理箱1箱程度出土した。922・923はSH03の埋土から出土した弥生土器壺の口縁部である。924は埋土上層から出土した鉄製品である。断面形は上部ではいびつな円形または楕円形、下部では長方形である。下部の先端は欠損しており、刃部は不明であるが、ヤリガンナと考えられる。925～927はSK11から出土した。925は弥生土器壺、926は弥生土器鉢、927は流紋岩製の砥石である。928・929はSP364から出土した。928は弥生土器壺の口縁部、929は弥生土器壺の口縁部である。細片が多いが、いずれも弥生時代終末期に属することから、SH03は弥生時代終末期のものと考えられる。

柱穴・小穴・土坑

SP317 (図143)

3区北東部の第2面(IV層上面)で検出された小穴である。平面形はややいびつな円形で、径0.5m、深さ0.1mである。弥生土器片が少量出土した。931は弥生土器鉢で弥生時代中期後半、930は弥生土器壺で弥生時代後期に属することから、SP317は弥生時代後期のものと考えられる。

SP500 (図144)

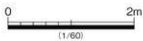
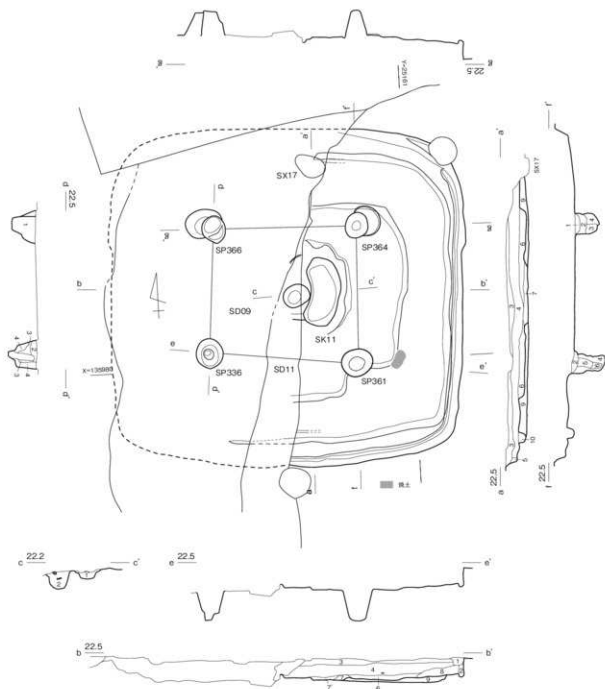
3区北東部の第2面(IV層上面)で検出された土坑である。北部は調査区周囲に設定した調査用の側溝の掘削で削平される。平面形はややいびつな楕円形で、長軸1.0m以上、短軸0.8mである。断面形はいびつな半円形で、深さ0.25mである。弥生土器小片が多量に出土した。932は弥生土器鉢、933は弥生土器壺底部、935は弥生土器高杯である。これらの遺物からSP500は弥生時代後期中葉のものと考えられる。

SP510 (図145)

4区北部の第2面(IV層上面)で検出された土坑である。北西部は弥生時代後期の土坑SK13と重複し、削平される。SP510の平面形はほぼ円形で、径1.2mである。断面形は箱形、底面は平坦で、深さは0.5mである。弥生土器片が少量出土した。936は弥生土器壺または器台口縁部、937は弥生土器壺、938は弥生土器器台である。これらの遺物からSP510は弥生時代後期中葉のものと考えられる。

SP570 (図146)

4区北部の第2面(IV層上面)で検出された土坑である。古代の溝SD34と重複し、上部を削平される。SP570の平面形はややいびつな円形で、径1.2mである。断面形は箱形、底面は平坦である。底面までの深さは0.3mである。弥生土器片が少量出土した。939は弥生土器壺の小片で、弥生時代後期前半に属する。SP570はSP510とほぼ同形態であることから、SP510とほぼ同時期の弥生時代後期中葉のものと考えられる。



a-a'

- 1 10YR2/2 黄褐色粘土
- 2 10YR2/1 黄赤粘土 (發見)
- 3 ベースブロック並じり 10YR3/1 黄褐色粘土
- 4 ベースブロック並じり 10YR4/1 褐色粘土 (ブロック多量)
- 5 ベースブロック並じり 10YR3/1 黄褐色粘土
- 6 7.5YR3/1 黄褐色粘土 (ベースブロックを少量含む)
- 7 灰並じり 10YR2/1 黄赤粘土 (灰を多量に含む。砂)
- ア アニシ。少し傾斜。
- 8 ベースブロック並じり 10YR4/1 褐色粘土 (6層に比べ傾斜が緩)
- 9 ベースブロック並じり 10YR4/1 褐色粘土 (8層に比べわずかに傾斜)。粘土層
- 10 ベースブロック並じり 2.5Y6/1 黄褐色粘粒土

c-c'

- 1 灰層 (黄赤泥化物質) 10YR3/1 黄褐色シルト
- 2 ベースブロック並じり 10YR4/1 褐色シルト (泥化層を含む)

b-b'

- 1 ベース-灰色砂 褐色シルト層の混合層
- 2 ベースブロック並じり褐色シルト
- 3 1層厚。わずかに傾斜。
- 4 ベースブロックを多量に含む褐色シルト (全体的には 10YR6/4 に近い黄褐色に近い黄褐色シルト)

d-d'

- 1 10YR6/1 褐色シルト
- 2 ベースブロック並じり 10YR6/1 褐色シルト
- 3 10YR3/1 黄褐色シルト
- 4 3に類似。3より傾。
- 5 10Y7/7 灰褐色シルト
- 6 ベースブロック並じり褐色シルト

図 141 SH03 (1)

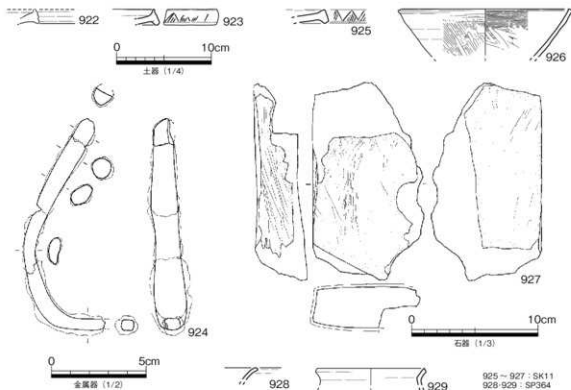


図 142 SH03 (2)

SK02 (図 147)

4区南西部の第2面(IV層上面)で検出された土坑である。平面形はややいびつな円形で、径0.9～1.0m、深さ0.4mである。弥生土器小片が整理箱1/3程度出土した。埋土中位からは弥生土器支脚(940・941)が出土した。これらは弥生時代後期後半に属することから、SK02は同時期のものと考えられる。

SK03 (図 148)

4区南西部の第2面(IV層上面)で検出された土坑である。平面形はいびつな楕円形で、長軸2.7m、短軸0.8mである。底面は少し凸凹しており、最深部の深さは0.1mである。弥生土器片などが整理箱1/3程度出土した。942・943は弥生土器壺の口縁部である。944は砂岩製の砥石である。出土遺物からSK03は弥生時代後期後半のものと考えられる。

SK04 (図 149)

4区ほぼ中央部の第2面(IV層上面)で検出された土坑である。北部は古代の溝SD64・SD34と重複し、削平される。平面形はややいびつな隅丸方形で、長軸1.4m以上、短軸0.9m、深さ0.05mである。土器細片やサササイト片が数点出土した。遺物の詳細な時期は不明であるが、周辺の土坑がいずれも弥生時代後期のものであることから、SK04も同時期のものと考えられる。

SK05 (図 150)

4区南西部の第2面(IV層上面)で検出された土坑である。南部は撒乱を受け、西部は中世の溝SD22と重複し、削平されるため全体は不明である。残存部分から平面形はややいびつな隅丸長方形で、長軸1.4m以上、短軸0.8m以上と考えられる。東部の一部・北部にはテラス状となり、二段掘りになる。底面は平坦である。北部のテラス状の部分からは弥生土器鉢(945)、一段下がった底面から弥生土器高杯の脚部(946)が出土した。945は弥生時代終末期に属することから、SK05は同時期のものと考えら

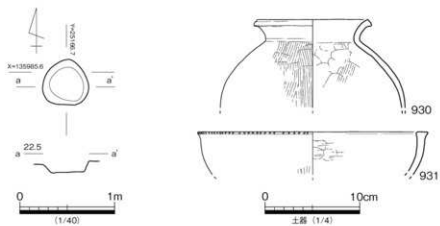


図 143 SP317

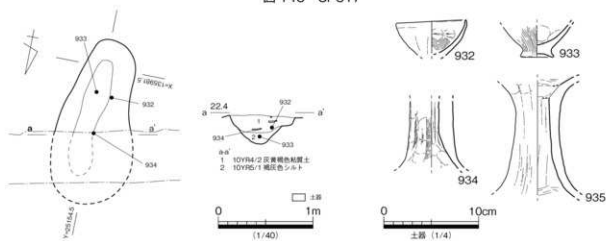


図 144 SP500

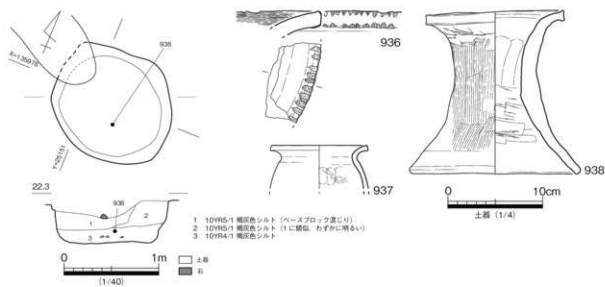


図 145 SP510

れる。

SK10 (図 151)

4区北部の第2面(Ⅳ層上面)で検出された土坑である。平面形は円形で径0.45m、残存する深さ

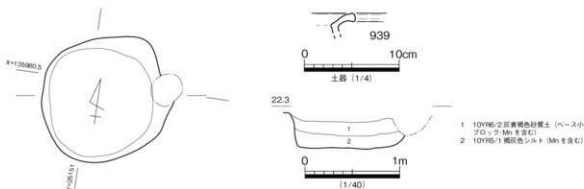


図 146 SP570

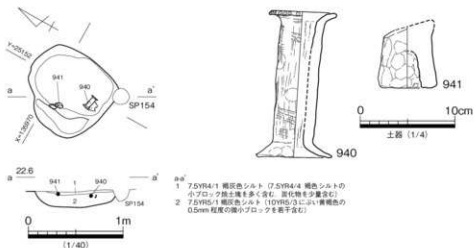


図 147 SK02

0.4 m である。土坑の内部には弥生土器壺 (947) が口縁部を斜め上に向けた状態で出土した。体部上部から口縁部付近は破損のため土坑内に散乱していたが、復元すると 947 の高さは 39.8cm、最大径は 32.2cm である。土坑は 947 の最大径よりも 0.1 m 程度大きい。SK10 の中からは 947 のほか弥生土器小片が出土した。SK10 は土器棺墓と考えられるが、土器の内部からは人骨・歯などは出土しなかった。947 は弥生時代後期中葉に属することから、SK10 は同時期のものと考えられる。

SK13 (図 152)

4 区北部の第 2 面 (IV 層上面) で検出された土坑である。平面形は長楕円形で、長軸 1.5m、短軸 0.55 m、短軸の断面形はややいびつな半円形で、深さ 0.2 m である。中央やや北西部の底面付近からは弥生土器高杯脚部 (950)、埋土上部からは弥生土器壺 (948)、弥生土器甕 (949) が出土した。これらは弥生時代後期後半に属することから、SK13 は同時期のものと考えられる。

SK14 (図 153)

1 区北半部で検出した土坑である。南半部の大半を現代土坑により攪乱を蒙るため、全形は不明。切り合い関係より SD51 より先行し、SX24 より後出する。東西 1.0 m 以上、南北 0.6 m 以上、残存深 0.33 m、平面隅丸方形ないし楕円形を呈するとみられ、断面形は残存部で碗底状を呈する。

埋土は、黒褐色シルトが堆積し、ブロック土の多寡により 2 層に細分した。土器片や炭化物粒などをやや多量に含むことから、生活残滓とともに人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器広口壺 (図 153-951)、甕 (同図-952,953)、器台 (同図-954) 等が出土している。

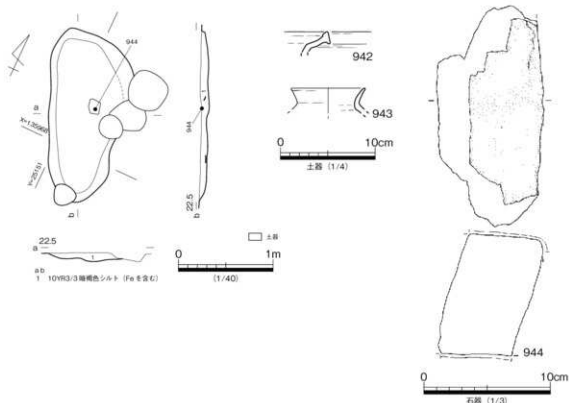


図 148 SK03

小片のため詳細な時期を特定することは困難だが、広口壺 (951) より終末期後半を中心とした時期と考えられる。(蔵本)

SK15 (図 154)

2区南東部、SR01 中層上面で検出された土坑である。平面形はややいびつな楕円形で、長軸長 0.8 m、短軸長 0.6 m、深さ 0.1 m である。弥生土器片が 10 片程度出土した。形態のわかる土器は少ない。956 は弥生土器壺の口縁部である。弥生時代後期に属することから、SK15 は弥生時代後期のものと考えられる。

SK17 (図 155)

4区北西部の第 2 面 (IV 層上面) で検出された柱穴である。平面形はややいびつな楕円形で、長軸 1.2 m、短軸 0.9 m である。底面は平坦で深さ 0.6 m である。底面の中央には厚さ 8 cm の平石が置かれ、その周囲には長さ 0.2 m 程度の自然石が積まれていた。

平石の上には自然石は積まれておらず、石がない部分は径 0.2 m 前後である。この部分に柱を設置していた可能性が高い。遺物は弥生土器小片が少量出土した。957・958 は弥生土器壺の口縁部である。いずれも弥生時代後期前半に属することから、SK17 は同時期のものと考えられる。

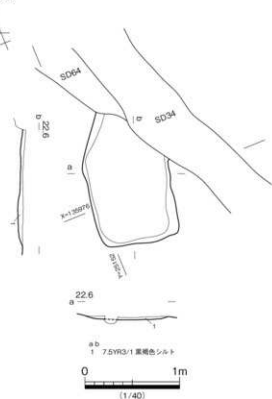


図 149 SK04

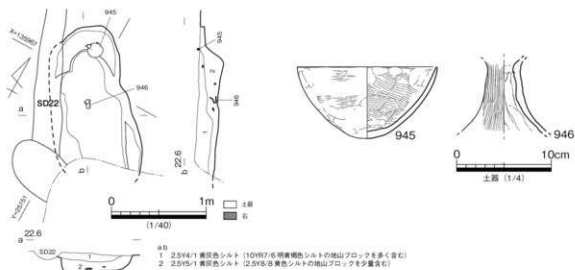


図 150 SK05

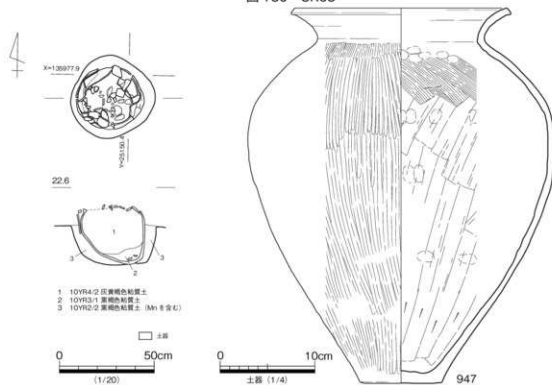


図 151 SK10

SK19B (図 156)

2区西部の第2面 (IV層上面) で検出された土坑である。中世の溝 SD60 から南東に分岐する溝 SD67 と重複し、削平される。SK19A・SK19B は 1 遺構として調査を行ったが、報告書作成時に遺構の形状や出土遺物の時期を検討した結果、2 遺構と考えた。SK19B は現存長 1.8 m、最大幅 1.0 m、最少幅 0.3 m、最深 0.5 m である。遺物は少量出土した。小破片ばかりであるが、959 は弥生時代後期中頃に属することから、SK19B は弥生時代後期中葉のものと考えられる。

SX44 (図 157)

2区北部の第2面 (IV層上面) で検出された土坑である。平面形はいびつな雪だるまのような形状で、長軸 1.1 m、短軸 0.5 ~ 0.8 m、深さ 0.1 m である。浅い土坑であるが、弥生土器が整理箱 1/4 程度出土

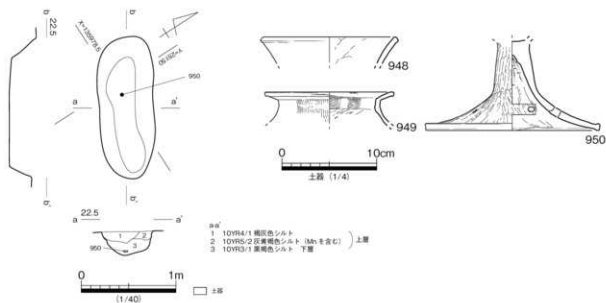


図 152 SK13

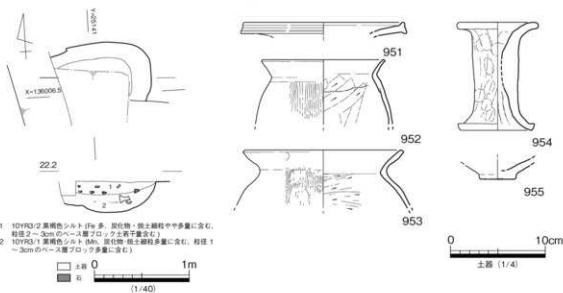


図 153 SK14

した。細片が多い。964は弥生土器器台、965は弥生土器壺の口縁部、966・967は弥生土器支脚、968は弥生土器甕である。968は弥生時代終末期に属することからSX44は同時期のものと考えられる。

溝

SD41 (図 158)

4区南東部の第2面 (IV層上面) で検出された東西方向の溝である。東部は「旧練兵場遺跡 I」で報告されたY区に連続するが、古墳時代の溝などによって削平されてお

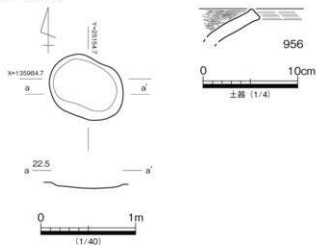


図 154 SK15

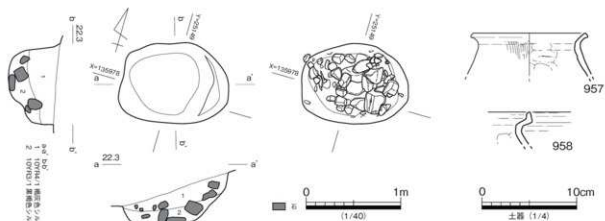


図 155 SK17

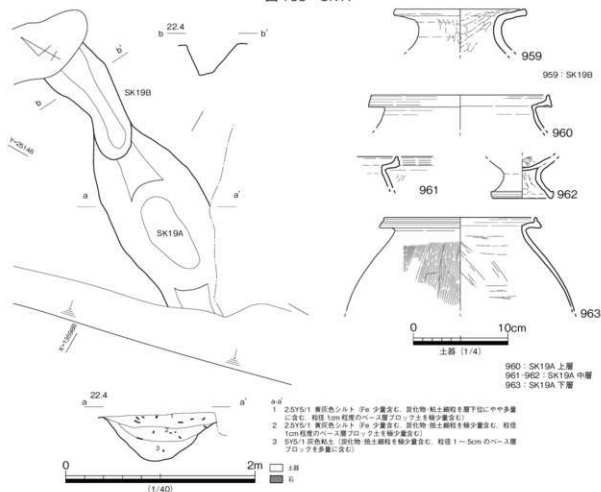


図 156 SK19A・SK19B

り、SD41の続きは不明である。西部は古代の溝SD11・SD07と重複し、削平される。南部は古代の溝SD35や攪乱によって削平されるため、検出長は1.8mと短い、残存部分ではSD41は幅0.8m、深さ0.1mである。弥生土器小片数点とサヌカイト製の石器が出土した。969は石鏃、970・971は石包丁である。970・971は側縁に抉りがある。土器はいずれも小片で形態のわかるものがないため、詳細な時期は不明である。埋土の色調から弥生時代中期の可能性もあるが、周辺には弥生時代後期の遺構が多いことから、弥生時代の後期のものと考え、ここに報告する。

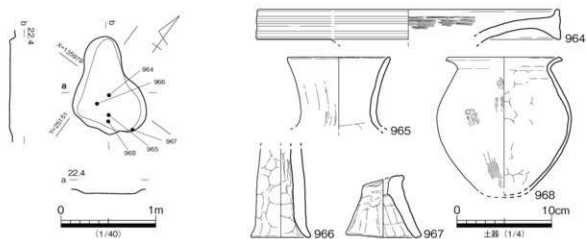


図 157 SX44

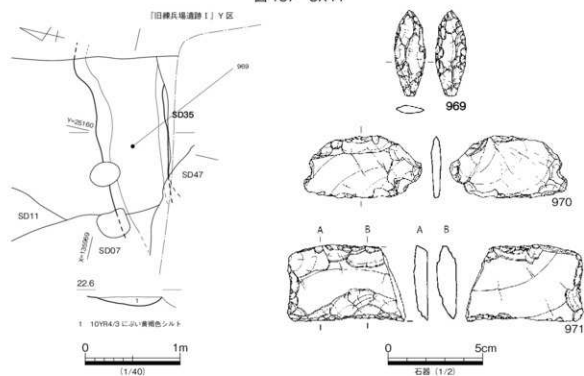


図 158 SD41

SD50 (図 159)

1区北端部、後述するSR01中層上面で検出した東西溝で、東西両端は攪乱により削奪され、延長4.51mを検出したに留まる。調査区内ではほぼ直線状に配され、流路方向N 83.46° E、検出面幅0.4～0.75m、残存深0.12～0.17m、断面形は概ね碗底状を呈する。埋土は黒褐色シルトの単層で、明瞭な流水堆積は認められない。残念ながらSR01中層を掘り下げ途中で本遺構を確認したため、本溝埋土上半部は誤って掘り下げてしまい、本来は2層以上の埋土が堆積していた可能性もある。なお、SR01上層を本溝埋土の一部と考えることも可能だが、上層最深部と本溝の位置とが一致しないこと、上層の堆積が皿状の断面を呈することより、上層を低地部(SR01)埋土の一部と判断した。検出位置や埋土等より、19次調査SR02上層溝の西延長部の可能性が考えられる。

遺物は、溝底よりやや浮いた状態で、完形に復元可能な個体を含む弥生土器壺(図159-972～978)、甕(同図-979～985)、鉢(同図-992)、台付鉢(同図-986～988)、高杯(同図-989～991)等、多量

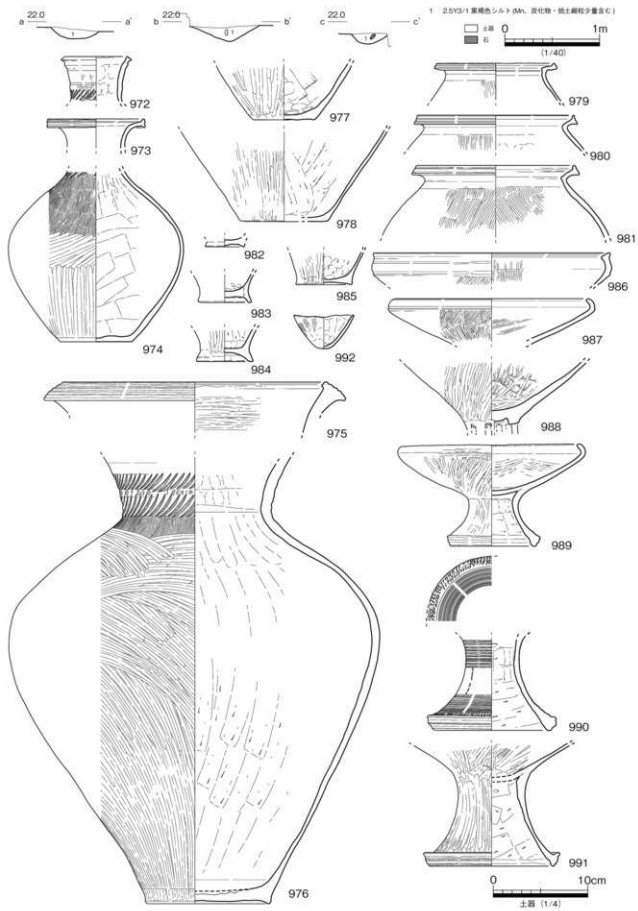


図 159 SD50

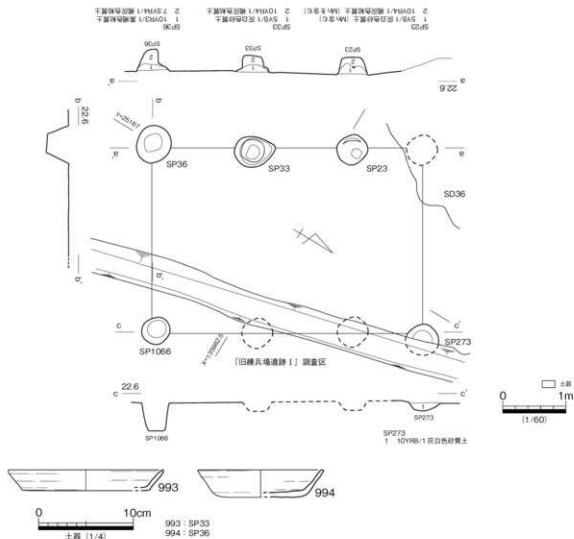


図 160 SB09

の遺物が出土した。大半の資料は中期後半新段階を前後する時期のものであるが、丸底の小形鉢（992）に示されるように、弥生時代終末期後半から古墳時代前期前葉に下る遺物も少量ながら出土している。これら出土遺物に示される年代幅を、本溝の継続時期とするには、溝の規模や埋土の堆積状況、本溝のベースとなる旧河道SR01中層の堆積下限に前者の遺物が含まれることから、やや無理があろう。よって、本溝は弥生時代終末期後半から古墳時代前期前葉に機能・埋没したと考える。（蔵本）

3. 古代

掘立柱建物

SB09（図160）

3区東端から「旧練兵場遺跡1」で報告された調査区で検出された掘立柱建物である。一部の柱穴は検出されていないが、桁行3間（4.3m）、梁間1間（2.8m）、桁行の方向はN25°Wである。柱穴の平面形は円形で、径0.4～0.5m、深さ0.25～0.4mである。各柱穴からは土器片・須恵器片などが少量出土した。993はSP33から出土した須恵器皿、994はSP36から出土した土師器杯である。993は9世紀、994は9世紀後半から10世紀に属することから、SB09は同時期のものと考えられる。

SB14 (図 161・162)

〔旧練兵場遺跡V〕で報告された7-14区北部から第29次調査5区にかけて検出された掘立柱建物である。SB15と重複する。SB14のほうが新しい。桁行4間(8.4m)、梁間2間(4.2m)の総柱の建物である。建物の方向はN18°Wである。柱穴の平面形は円形を呈し、径0.2～0.4m、深さ0.2～0.4mである。各柱穴からは須恵器・土師器片が少量出土した。SP92から995～997、SP94から998・1003、SP96から999、SP114から1000～1002、SP171から1004・1005、SP178から1006～1009、7-14区SP383から1010、7-14区SP385から1011が出土した。995は土師器杯で赤彩が施される。7-11区SK01とはほぼ同時期の8世紀末頃のものと考えられる。996は土師器甕で10世紀前半に属する。997～999は須恵器杯である。1000は土師器椀で10世紀前半、1001は須恵器杯で9世紀前半から中葉、1002は須恵器椀で10世紀前半、1003は須恵器椀で10世紀前半、1004は土師器杯で10世紀前半、1007・1008・1011は須恵器杯で9世紀前半から中葉である。1005は須恵器杯の底部で外面に墨書「〇甘」(〇は不明)がある。9世紀前半から中葉に属する。これらの遺物からSB14は10世紀前半のものと考えられる。

SB15 (図 163)

第28次調査7-14区から第29次調査5区の南部にかけて検出された掘立柱建物である。SB14と重複しており、一部の柱穴が削平される。SB15のほうが古い。桁行4間(8.1m)、梁間2間(4.8m)、桁行の方向はN20°Wである。柱穴の平面形は円形で、径0.4～1.0m、深さ0.1～0.5mである。各柱穴からは弥生土器片・土師器片・須恵器片が少量出土した。1012・1013は第29次調査5区SP150から、1014・1015は第28次調査7-14区SP377から、1016・1017は第28次調査7-14区SP486から出土した。1012は黒色土器椀、1013・1015・1016は須恵器杯、1014は土師器甕、1017は須恵器甕である。1012は内面が黒色で、9世紀から10世紀前半、1013は10世紀前半、1014は9世紀から10世紀前半に属する。出土遺物の年代からSB15は10世紀前半のものと考えられる。

柱穴

SP161 (図 164)

5区西部で検出された柱穴である。平面形は円形で径0.5m、深さ0.4mである。遺物は土器・須恵器が少量出土した。1018は須恵器杯、1019は須恵器皿、1020は須恵器甕である。1020は埋土上部から出土した。1018・1019は9世紀前半から中葉に属することから、SP161は同時期のものと考えられる。SP252 (図 164)

5区西部で検出された柱穴である。中世の溝SD18の底面で検出された。SD18に上部を削平される。SP252の平面形は隅丸方形で、1辺0.3m、残存する深さは0.15mである。底面からは1021が出土した。1021は須恵器皿で、9世紀中葉に属することから、SP252は同時期のものと考えられる。

土坑

SK01 (図 165)

5区東部で検出された土坑である。北部は攪乱によって削平され、不明である。古代の溝SD10・SD07と重複するが、SK01のほうが新しい。残存部分から平面形はややいびつな楕円形で、長軸1.15m、短軸0.7m以上と推定される。底面はほぼ平坦で、深さ0.25mである。遺物は土器・須恵器小片と砥石(1022)が出土した。1022は流紋岩製で、両端部は敲打のため、剥離する。土器・須恵器は詳細な時期がわかるものはなく、詳細な時期は不明であるが、古代の溝SD07よりも新しいことからSK01は古代

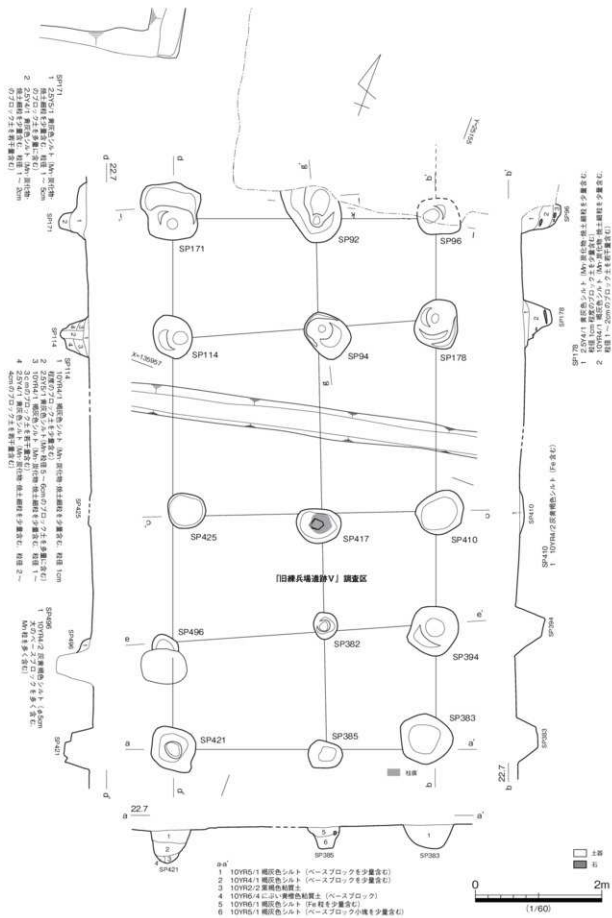


図 161 SB14 (1)

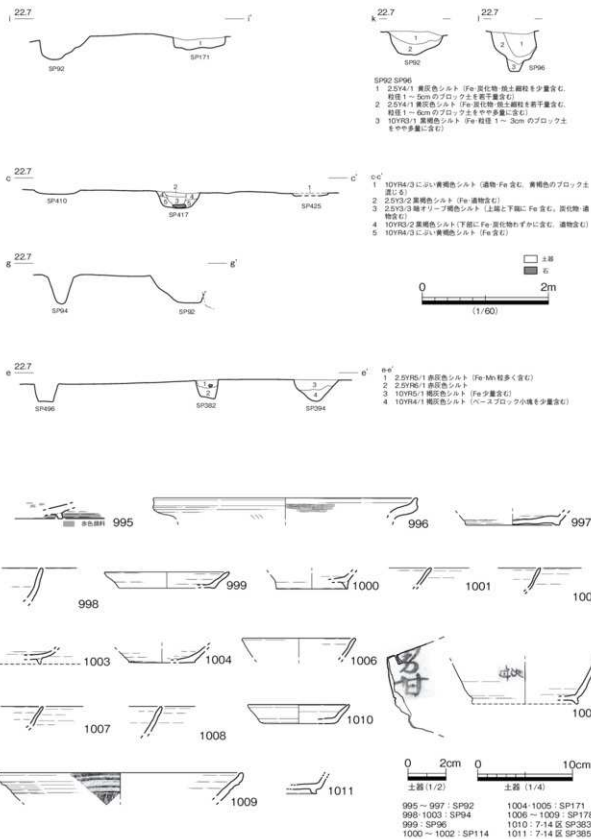


図 162 SB14 (2)

のものと考えられる。

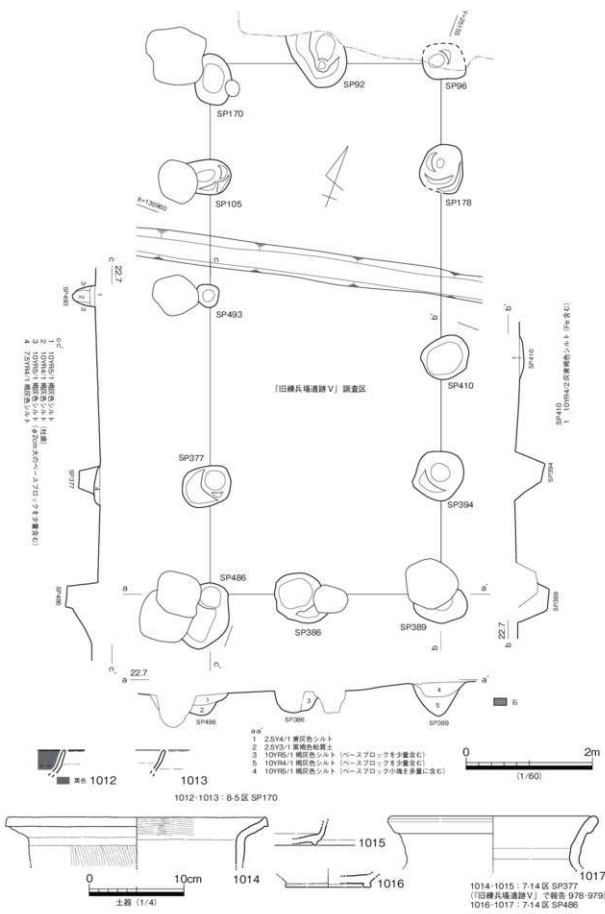


図 163 SB15

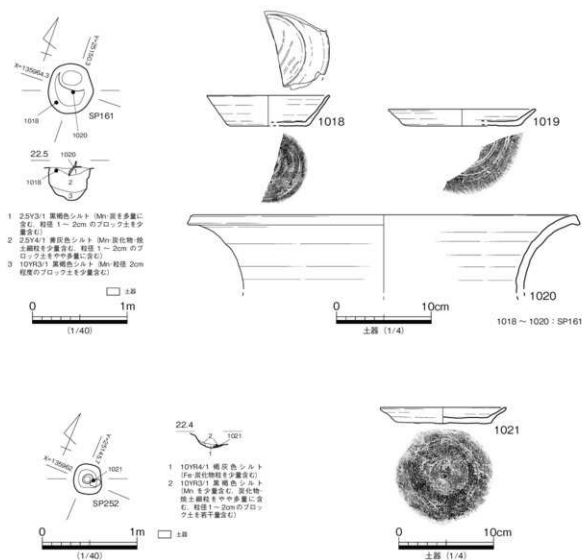


図 164 SP161・SP252

溝

SP466 等 (図 166)

1 区中央部で検出した東西溝で、上面を大きく削平され、底面の跡痕が小ピットの連続として検出されたのみである。西端は調査区内で途切れ、東端は 19・23 次調査で延長部が確認されず、全形は不明。切り合い関係より、SX24 より後出する。流路方向 N 89.5°W と、ほぼ正方位を指向する。検出面幅 0.3～0.5 m、残存深 0.03～0.13 m、断面形は皿状ないし逆台形状を呈し、底面に細かな起伏が認められるものが多く、流下方向については特定できない。なお、北側にほぼ併走する溝 SD51 があり、両溝間は芯々間で約 3.66 m であった。本溝と SD51 を両側々溝とする道路遺構の可能性も考えられるが、検出延長は短く、想定される路床部分は削平によりベース層が露出していたため、調査において断定するまでには至らなかった。

埋土は、黒～黒褐色シルトが堆積し、明確な流水堆積は確認できなかった。また、埋土からは断定できなかったが、安定しない断面形状からは、改修等の可能性も考えられる。

遺物は、器種不詳の弥生土器、土師器、須恵器の小片が少量出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。流路方向がほぼ正方位となることを重視すれば、本遺跡で条里型

地割が展開する8世紀末葉から9世紀や、北より約10°西偏する方位をもつ建物や溝等の遺構が成立する8世紀中葉から後葉以前、7世紀後葉から8世紀前葉を中心とした時期と考えておきたい。

(蔵本)

SD51 (図167)

1区北半部で検出した東西溝で、23次調査SDx17の東延長部にあたる。西端は調査区外へ延長する。切り合い関係より、SD43より先行し、SK14、SX24・25より後出する。検出面幅0.56～0.68m、残存深0.17～0.22m、断面概ね逆台形状を呈する。流路方向N88.2°Wとほぼ正方位を指向する。底面の標高は、21.93～21.98mで概ね一定し、流下方向を特定することはできなかった。

埋土は2層に細分され黒～黒褐色シルトが堆積し、流水下堆積は認められず、穏やかな環境下で徐々に埋没が進んだことが想像される。

遺物は、下層を中心にコンテナ1箱程度出土した。図167-1025は、弥生土器甕とみられる体部小片で、外表面に鳥足状の線刻が認められるが、小片のため詳細は不明。出土した遺物の大半は、図示したように混入の可能性が考えられる弥生土器片やサヌカイト剥片などであり、本遺構に直接帰属する可能性の高い古代以降の遺物は、器種不詳の土師器と須恵器の小片が極少量出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であるが、流路方向がSP466等と同様に正方位を指向することから、7世紀後葉から8世紀前葉を中心とした時期と考えておきたい。(蔵本)

SD42 (図168)

1区中央部で検出した南北溝で、北端は調査区外へ延長し、南端は調査区内で途切れる。延長約13.3mを検出した。流路主軸は小刻みに蛇行しながら、概ね北西方向に配される。切り合い関係より、SD43・55・58や、波板状遺構SD59よりも先行する。検出面幅0.48～1.03m、残存深0.14～0.31m、

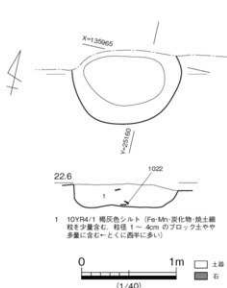


図165 SK01

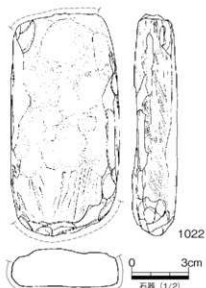
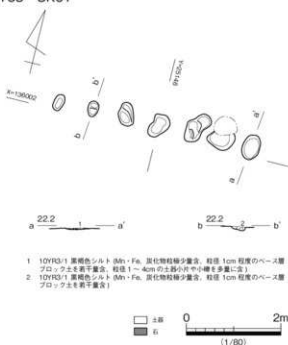
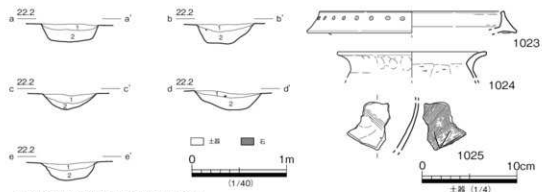


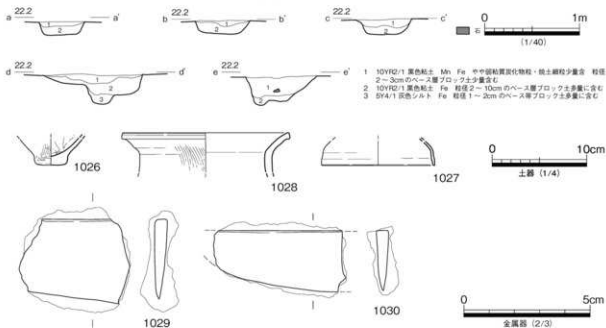
図166 SP466等





- 1 10YR3/1 黄褐色シルト (Mh, 炭化物・粘土細粒少量含む)
2 2.5Y2/1 黒色シルト (Mh, 粒径 5mm 程度の小ブロック土を隔り方型断面に若干量含む)

図 167 SD51



- 1 10YR2/1 黄褐色粘土 Mh Fe や中粒粘質炭化物粒・粘土細粒少量含む 粒径 2~3cm のベース層ブロック土少量含む
2 10YR2/1 黄褐色粘土 Fe 粒径 2~10cm のベース層ブロック土多量を含む
3 5Y4/1 淡色シルト Fe 粒径 1~2cm のベース層ブロック土多量を含む

図 168 SD42

断面形は基本的に逆台形を呈するが、南端部付近では底面にU字状の掘り込みが認められ、改修により断面形状が変更された可能性が考えられる。底面の標高は、南端部で 21.85 m、北端部で 22.04 m を測り、わずかに南へ傾斜する。

埋土は、2~3層に細分された。下位2層(図168-2・3層)には多量のベース層ブロック土が含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高い。溝断面が整った形状を呈し、流水痕跡も乏しいことから、改修後は短期間で埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器の小片などが、コンテナ5~6箱した。出土遺物の大半は混入と考えられる弥生土器片であり、遺構の時期を特定する資料に恵まれていない。図167-1026・1027は、弥生後期後半古相の土器で、混入資料である。本溝は、同図-1028より7世紀中葉を中心とする時期に機能していたと考えられる。同図-1029は、図下縁に直線状の刃部を有する鉄器片で、背部は刃部と平行とならないことから、鉄鎌の可能性が考えられる。同図-1030は、刀子もしくは短刀の切先の小片と考えられる。(蔵本)

SD55 (図 169)

1 区南半部で検出した東西溝で、23 次調査 SDx10 (旧練兵場遺跡 I 所収)、19 次調査 SD128 (旧練兵場遺跡 II 所収) の西延長部にあたる。西端は調査区外へ延長し、西半部北岸で小溝 SD56 がほぼ直交して合流する。切り合い関係より、SD43 より先行し、SD42、SX24 より後出する。検出面幅 1.76 ~ 1.89 m、残存深 0.45 ~ 0.56 m、断面形は概ね碗底状を呈し、溝底が幅 0.3 ~ 0.4 m 程度の小溝状に掘り込まれる。流路底面の標高は、19 次調査区を含め 21.6 ~ 21.7 m で一定し、その高低差から流下方向を特定することはできなかった。19 次調査区で SD17 より分岐するように配され、23 次調査や本調査区で条里型地割に合致して東西に配されていることから、SD17

(SD60) の前身溝であり、条里型地割の坪界溝と考える。

埋土は、3 層に分層された。上層 (図 169-1 層) は、ベース層ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻されたと考えられる。溝の埋没が一定程度進捗した状況下で埋め戻されていることから、周辺地の平準化を意図したものであったろう。中層 (同図 2 層) は、溝機能停止後の自然堆積層と考えられ、既述した断面形状から、下層溝改修後の堆積層と考えられる。下層 (同図 3 層) は溝機能時の堆積層であり、溝底の小溝部分を充填し、溝開削時の遺物を含む可能性がある。同様の断面形状や埋土は、19 次調査でも確認され、改修行為が相当規模のものであったと考えられる。

遺物は、弥生土器、土師器杯 (図 169-1031)、須恵器杯蓋 (同図-1032.1033)、壺 (同図-1034)、甕 (同図-1035) のほか、ササカイトや紅簾片岩の剥片、銅鏝 (同図-1036) が、上・中層を中心にコンテナ 1 箱程度出土した。1036 は、長三角形の鏝身をもつ、現存長 2.5cm ほどの小型の銅鏝で、表面の錆化が著しい。弥生時代終末期前後に遡る混入資料である。出土した遺物の大半は、混入の可能性が考えられる弥生土器片であり、本遺構に直接帰属する可能性の高い古代以降の遺物量は極めて乏しい。限られた出土遺物を重視すれば、8 世紀後葉以降に機能した可能性が考えられ、本報告では当該期に位置付けておくが、明確に時期を特定できたわけではなく、中世前葉に下る可能性も考えられる。この点については、さらに流路延長部分の調査成果を待つ必要があり、今後の課題としておきたい。(蔵本)

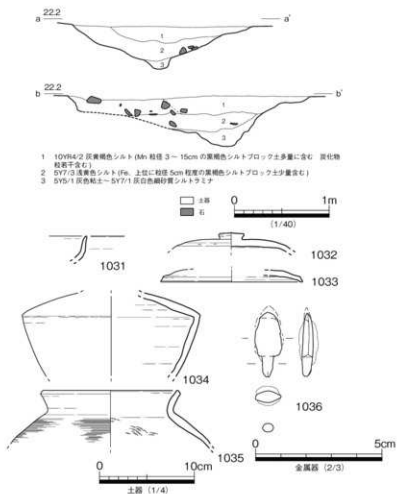


図 169 SD55

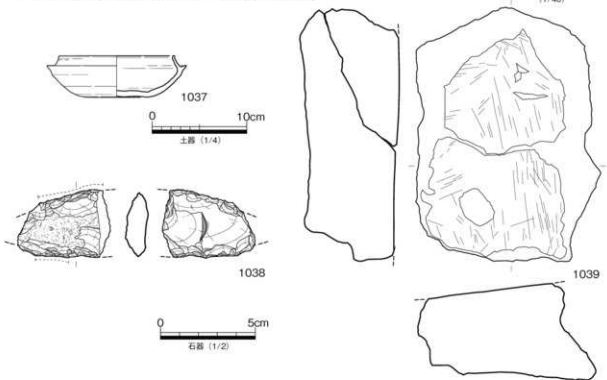
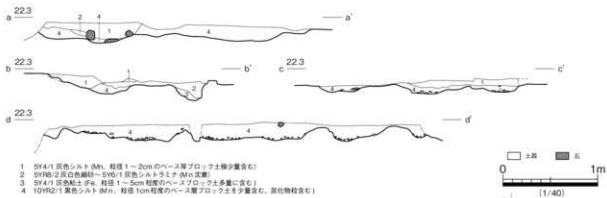
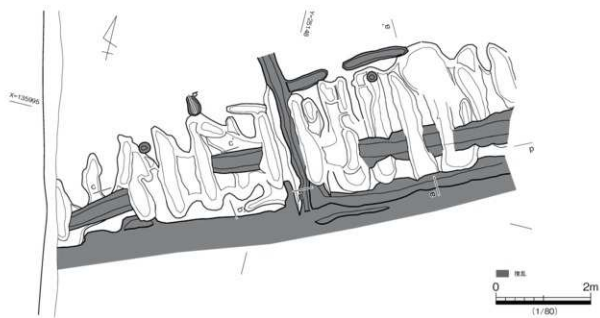


図 170 SD59

SD59 (図170)

1区南端部で検出した、東西に走行する波板状凹凸面を伴う道路跡である。西端は調査区外へ延長し、東端は19・23次調査で延長部が確認されておらず、延長10.3mを確認したにとどまる。SD42・43・57・58・59a・60と重複し、切り合い関係よりSD42より後出し、その他の遺構より先行する。調査段階で、SD57・58が撤痕となる可能性も考えたが、南北溝SD43と同質の埋土を有していることから、時期的に後出する遺構として報告する。検出した遺構は、波板状凹凸面とそれを埋める路面基盤層であり、路面自体は削平により遺存せず、また本道路跡に伴う側溝についても、両側のSD55・60は後述する幅員に比して規模の点で難があり、確実なものは検出されていないというのが調査担当としての所見である。おそらくはSD55・60の開削により削奪されたか、側溝を伴わなかった可能性も考えられる。

波板状凹凸面は、幅0.5～0.6m、長さ2.0～2.5mの南北に長い不整な溝状の落ち込みを13条東西に連ねており、底面の標高は22.03～22.15mを測り、やや西に下っている。基盤層は、皿層黄褐色シルトであり、とくに軟弱地盤というわけではない。埋土は、黒色シルトの単層であり、版築のような突き固められた痕跡は認められなかった。底面には、径2～3cm程度の小礫や土器碎片を敷き詰めており、小礫などを取り除くとその圧痕が底面に明瞭に残る程度に、堅固に突き固められていた。同様の遺構は、埼玉県所沢市東の上遺跡などで確認されている。上述した遺構内容から、仮に両側溝を伴う道路跡とした場合、推定で側溝心々間約6mの規模に復元される。

遺物は、波板状凹凸面上面の路面基盤層より出土したものと、底面に敷き詰められた土器碎片がある。いずれも小片化しており、弥生土器のほか、器種不詳の土師器や須恵器片という程度の情報しか得られない。(蔵本)

SD07・SD08・SD21・SD34・SD64 (図171・172)

いずれも2区・4区・5区で検出された溝である。SD08以外の溝は南東から北西(N25°W)に向かい、これらの溝の北部は近現代の田畑造成によって削平される。SD08はSD07から分岐して北東から南西(W25°S)に向かう。

SD07の南部は『旧練兵場遺跡V』に掲載した第28次調査7-14区と本書第3章で報告する第28次調査7-12区である。これらの調査区ではSD07の続きをSD1438という遺構名で報告した。7-12区からの検出長は48mである。2区・4区ではSD07に平行して0.5～0.7m西側にSD34がある。SD07は幅0.6～1.0m、深さ0.25m、SD34は幅0.5～0.8m、深さ0.3mである。SD34とSD07の間も浅く凹み、両溝の上部には同一堆積層があることから、両溝は同時に機能したと考えられる。SD34の南部は浅く先細りして終わるが、両溝の間は道で、両溝は側溝の可能性が高い。

SD07の1.0m東側にはSD21がある。SD21の南部は『旧練兵場遺跡I』で報告されたY区で、SDy08に連続する。SD21は幅1.0m、深さ0.2mである。また、SD21の南東部では西側に隣接する溝SD07につながる2条の溝がある。

また、2区・4区ではこれらの溝の最も西側にSD64がある。SD64はSD34と重複して平行に走る。SD64のほうがSD34よりもSD64のほうが古い。SD64は幅0.5m以上、深さ0.15mである。

これらの溝からは土器・須恵器などが出土した。SD07から出土した1040・1041は土師器杯、1042・1043は須恵器杯、1044・1047は須恵器皿、1045・1046は須恵器蓋、1048は須恵器甕、1049は砂岩製の砥石、1050は鉄製の刀子である。1040は12世紀に属する可能性が高い。1041は9世紀末から10世紀初頭に属する。1042は外面にはヘラミガキがみられないことから古代のもので、8世紀末から9世紀初

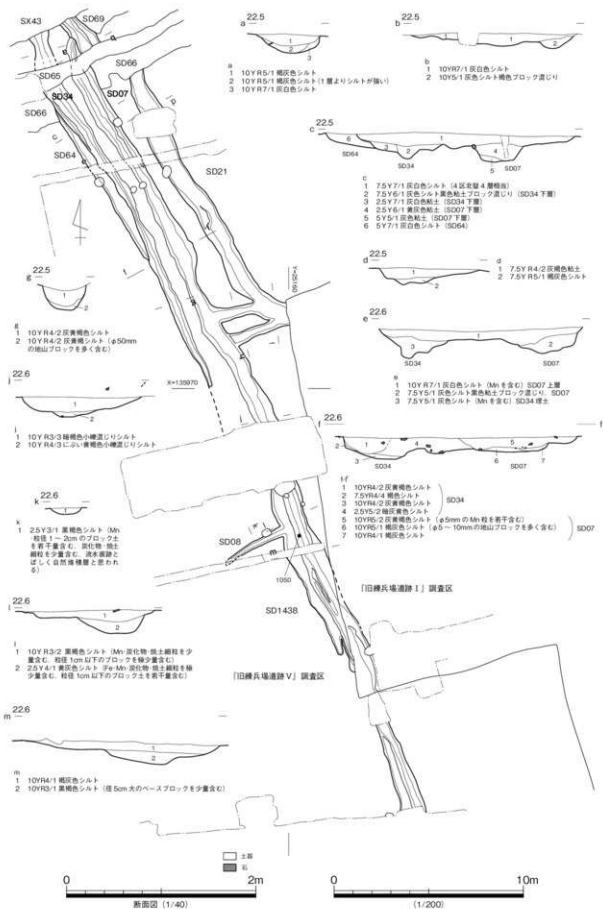


図 171 SD07・SD08・SD21・SD34・SD64 (1)

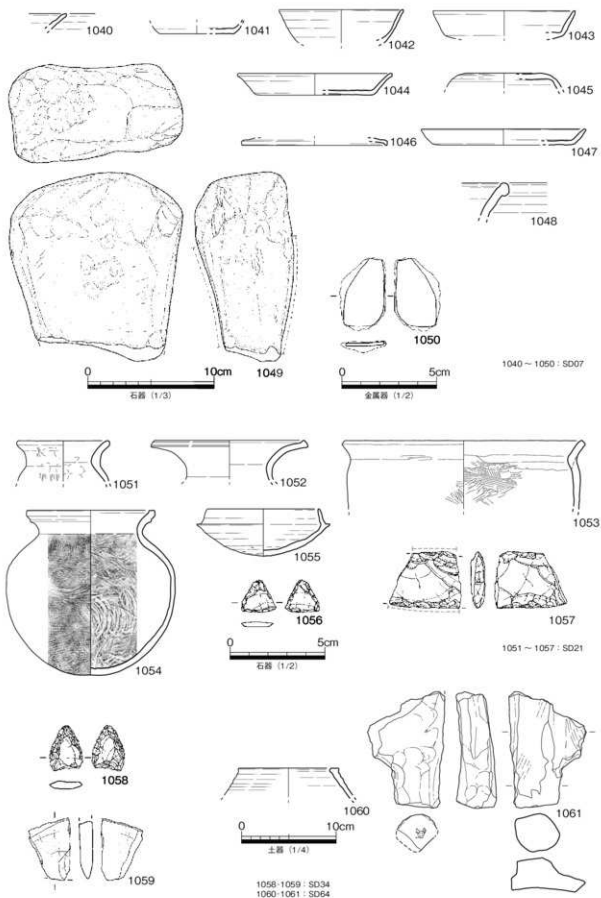


図 172 SD07・SD08・SD21・SD34・SD64 (2)

頭、1044・1047は9世紀に属する。SD21から出土した1051・1052は弥生土器壺、1053は弥生土器鉢、1054は須恵器甕、1055は須恵器杯、1056はサヌカイト製石鏃、1057は楔状石核である。SD34から出土した1058はサヌカイト製石鏃、1059は結晶片岩製磨製石包丁である。SD64から出土した1060は弥生土器無頸壺、1061は土師器甕である。1040は12世紀に属するが、小片であることから混入品の可能性が高い。出土遺物からこれらの溝は10世紀頃のものと考えられる。

SD09 (図173～181)

SD09は第29次調査3～5区の第2面(Ⅳ層上面)で検出された溝である。SD09は第29次調査区では南から北に向かう。西部はSD19と重複し、削平される。最終埋没はSD19のほうが新しい。また、東部はSD11と重複する。SD09のほうが新しい。SD09は幅1.5～3.0m、深さ0.3～0.35mである。南部は「旧練兵場遺跡Ⅴ」で報告された7-14区の溝SD34に連続し、北部は「旧練兵場遺跡Ⅰ」で報告されたX区の溝SDx14に連続する。図174で図示しているとおり、SD09の底面には凹みが多数ある。凹みは平面形凹みまたは楕円形で、長軸0.3～0.9m、深さ0.1m前後である。この凹みは北部に続き、X区のSDx14でも底面に同じような凹みがある(図175)が、SD09の南部のSD1434ではこの凹みはみられなかった。凹みの底面には硬くしまった砂質土が堆積する。また、底面には礫が多数敷かれているところもみられる。このようにSD09は溝状の凹みであるが、多数の凹みや礫敷きがみられる。これらは道路遺構の基盤によくみられることからSD09は道路の可能性が高い。埋土からは土師器・須恵器片が多量に出土した。細片が多い。最下層から出土した1062は弥生土器支脚、1063は土師器の把手、1064は須恵器杯である。下層から出土した1065は須恵器杯、1066は須恵器ハソウ、1067は須恵器甕の口縁部である。1065は10世紀、1066・1067は6世紀から7世紀に属する。1069は凹み石、1070は叩き石である。いずれも石材は砂岩である。中層から出土した1071は土師器支脚、1072～1074は須恵器高杯の脚部、1075は須恵器壺の口縁部、1076は須恵器甕の口縁部で、いずれも7世紀に属する。1077は大型蛤刃石斧である。石材は不明であるが、香川県で一般的にみられる大型蛤刃石斧と同じ石材である。上層から出土した1080は土師器杯、1081・1082は土師器把手、1083は支脚、1084・1085は土師器甕、1086～1088は須恵器杯、1089・1090は須恵器口縁部、1091は須恵器平瓶、1092～1098は須恵器甕、1099・1100は須恵器壺で、いずれも6世紀から7世紀に属する。1102は碧玉製の玉である。破損しており、一部分しか残っていない。勾玉の一部であろうか。1103は砂岩製の砥石である。1104～1107はSD09から出土したものであるが、層位は不明である。1104は弥生土器壺、1105は弥生土器ミニチュア壺、1106は須恵器杯、1107は須恵器蓋である。1108・1109は底面の凹みから出土したもので、1108は須恵器蓋、1109は支脚である。これらの土器は弥生土器も含むが、大半が7世紀のものである。1065は10世紀と新しいが、小片であるので混入品の可能性が高い。これらの遺物からSD09は7世紀頃機能したと考えられるが、最終埋没は8世紀の溝SD11よりも新しいことから、SD09の最終埋没は8世紀頃と考えられる。

SD11 (図173～181)

3～5区の第2面(Ⅳ層上面)SD09の東側で検出された溝である。南から北に向かう。SD11の西部は一部SD09と重複する。図176の土層断面図aのとおり、最終埋没はSD09のほうが新しい。SD11の北部はSD09と重複し、「旧練兵場遺跡Ⅰ」で報告されたX区に連続する。SD09に連続するSDx14によって削平されるため途切れるが、SD11はSDx18に続くと推定される。南部は「旧練兵場遺跡Ⅴ」と本書第3章で報告されたSD1410に連続する。SD11は幅0.8～1.0m、深さ0.3～0.5mである。出

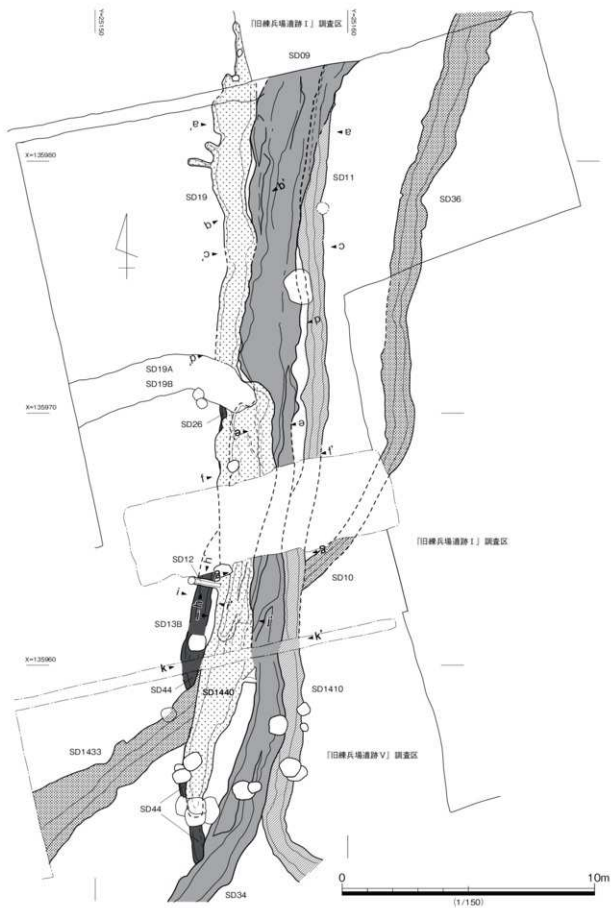


図 173 SD09・SD10・SD11・SD12・SD13B・SD19

土遺物は土器細片の須恵器細片が整理箱1箱程度出土したが、形態のわかるものは僅かであった。1110は弥生土器壺、1111はサヌカイト製石鏃である。これらの遺物は弥生時代に属するが、第28次調査の成果からSD11の埋没は8世紀と考えられる。

SD19 (図173～181)

3～5区の第2面(IV層上面)、SD09の西側で検出された溝である。南から北に向かう。SD09と重複するが、SD19のほうが新しい。また4区南部ではSD19A・SD19Bと重複し、削平される。SD19A・SD19Bのほうが新しい。SD19の南部は「旧練兵場遺跡V」で報告されたSD1440に連続する。SD19の北部は「旧練兵場遺跡I」で報告されたSDx01に連続する。SD19は幅1.0～1.7m、深さ0.2～0.3mである。SD19の南部では底面には1辺0.1～0.2m程度の礫がみられた。また、南部に連続するSD1440もSD19と同じように底面には多数の礫がみられた。これらは道路の基盤のために敷かれた可能性が高い。土器・須恵器細片が多量に出土した。SD19埋土下層から出土した1112は弥生土器支脚、1113は須恵器杯、1114は須恵器蓋、1115は須恵器高杯脚部、1116は須恵器甕口縁部、1117は須恵器頸部、1118は須恵器壺である。1119～1121は砥石で、1119は安山岩、1120・1121は砂岩である。上層から出土した1123は土師器杯、1124は土師質土器羽釜、1125～1127は須恵器杯、1128は須恵器壺、1129～1132は須恵器甕である。1133・1135は砥石で、1133の石材は安山岩、1135は砂岩である。1136は叩き石で、石材は砂岩である。1137～1139はSD19から出土したものであるが、層位は不明である。1137は須恵器杯、1139はガラス製の青色の小玉である。これらの遺物の中には弥生土器も含むが、大半が7世紀に属する。なお、上層から出土した1124は10世紀、1125～1127は8世紀後半に属する。1124と同時期のものは1点だけであるので、混入品の可能性が高い。これらのことから、SD19の最終埋没は8世紀後半と考えられる。

SD10・SD36 (図173～182)

SD10は5区、SD36は3区の第2面(IV層上面)で検出された溝である。両溝は「旧練兵場遺跡I」で報告された溝SDy15に連続する溝である。SD10の南部は7世紀から8世紀の溝SD11・SD09・SD19と重複し、削平されて途切れるが、「旧練兵場遺跡V」で報告された溝SD1433に連続すると推定される。SD10・SD36は幅0.7～1.5m、深さ0.3mである。これらの溝の底面の一部には礫が敷かれていた。土器・須恵器が整理箱1/2程度出土した。いずれも細片が多い。SD10・SD36からは土器・須恵器が少量出土した。SD10から出土した1140はサヌカイト製の石包丁である。SD36から出土した1142は須恵器杯、1141・1143・1144は須恵器蓋である。これらは7世紀に属することから、SD10・SD36は7世紀のものと考えられる。

SD13B・SD26 (図183)

SD13Bは5区の第2面(IV層上面)、SD19の西側で検出された溝である。南から北に向かう。SD13Bの南部は「旧練兵場遺跡V」で報告されたSD44に連続する。SD44はSD1440(第29次調査区のSD19に連続)・SD1433(第29次調査区のSD10に連続)と重複しているが、これらの溝よりも古い。SD13Bの北部は攪乱によって削平されるため不明であるが、SD26に連続すると推定される。SD13B・SD26は幅0.8～0.9m、深さ0.2mである。遺物は土器・須恵器片が整理箱1/4程度出土した。いずれも小片である。時期を特定できる土器はみられないが、SD13B・SD26も周辺の溝と同じく7世紀のものと考えられる。

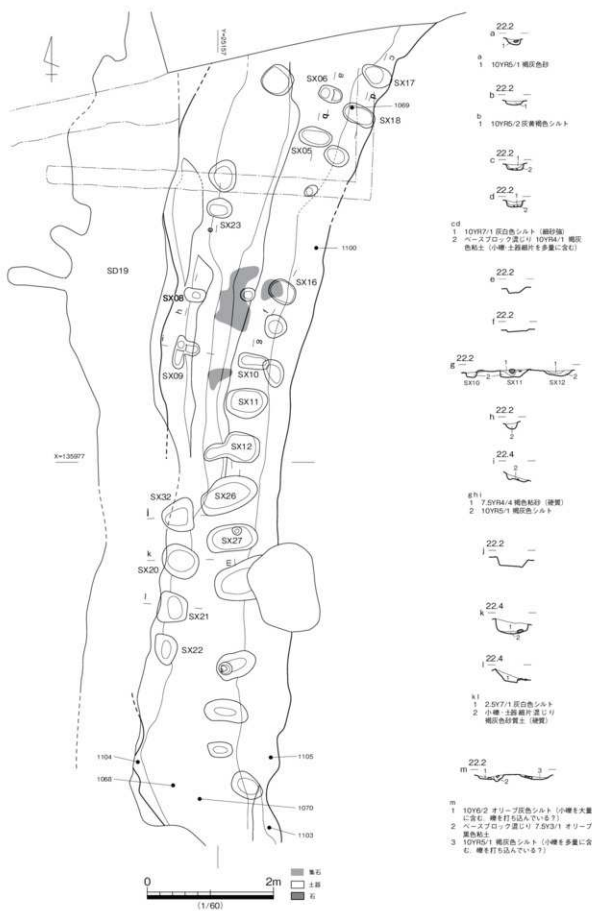


図 174 SD09



图 175 SD09 · SD19 · SD1433 · SD1440

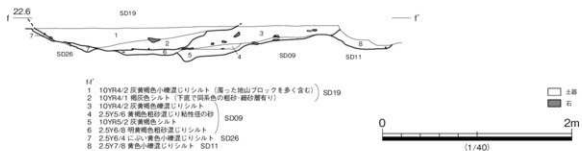
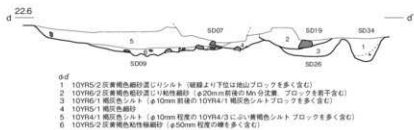
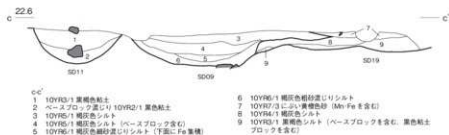
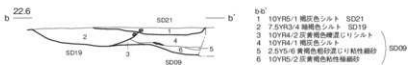
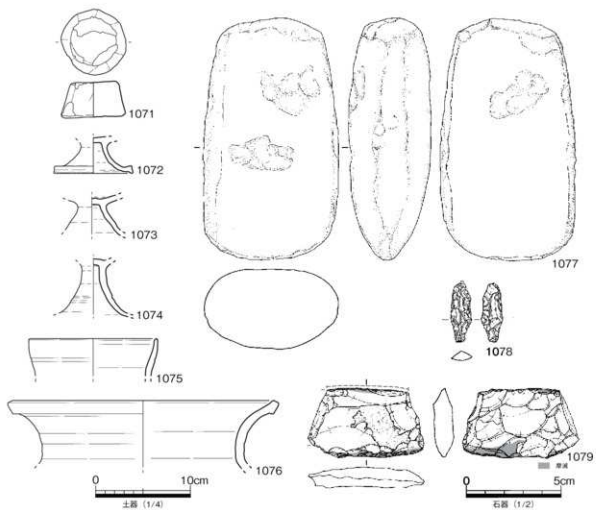


図 176 SD09・SD11・SD19



1071 ~ 1079 : SD09中層

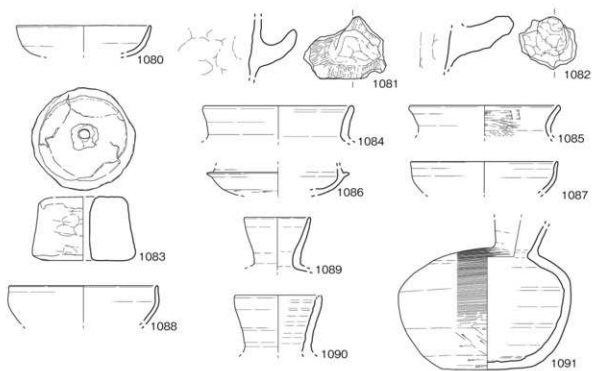


図 178 SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19 (3)

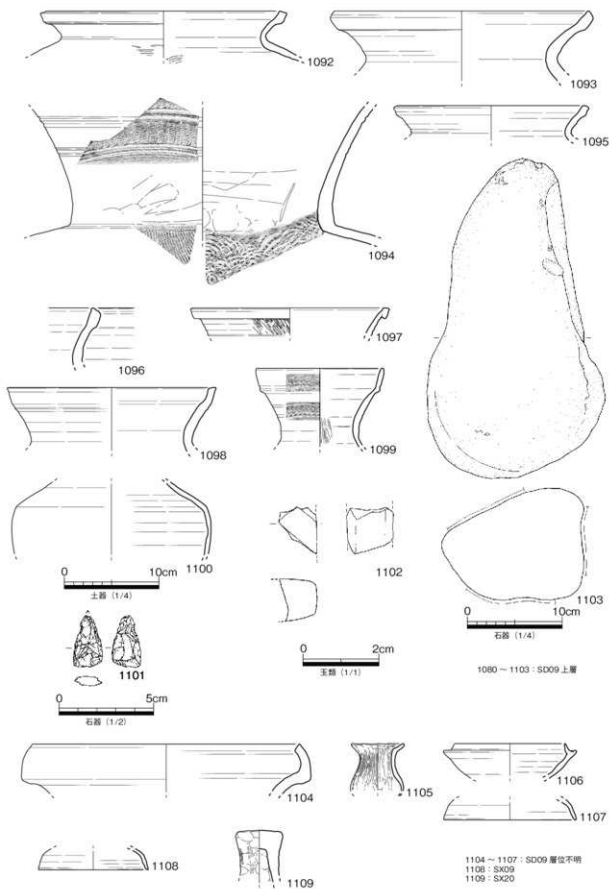


圖 179 SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19 (4)

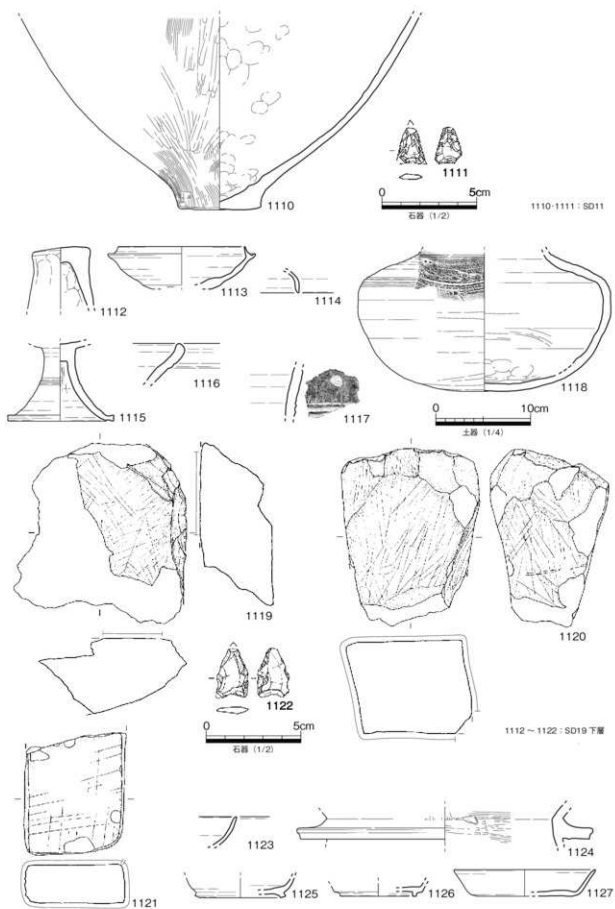


図 180 SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19 (5)

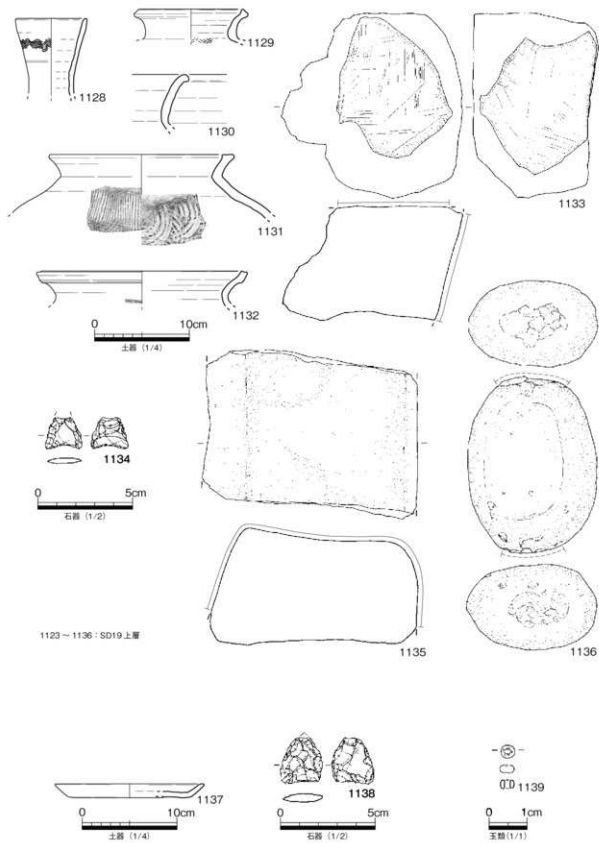


図 181 SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19 (6)

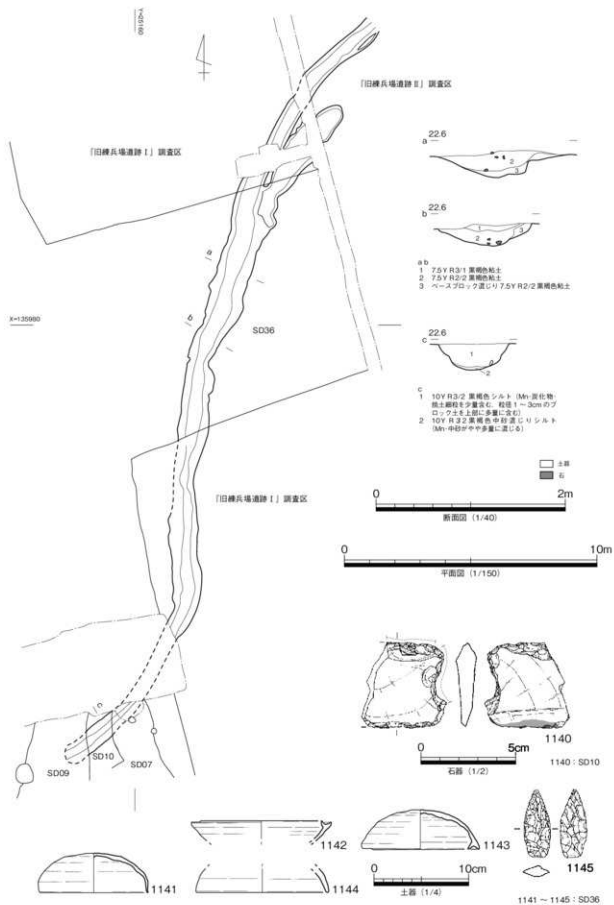


図 182 SD10・SD36

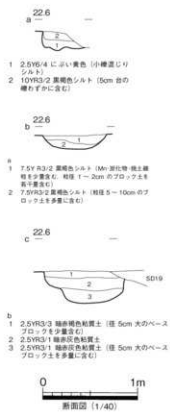
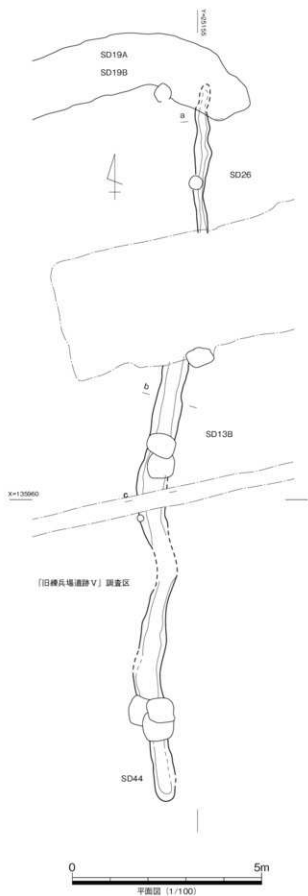
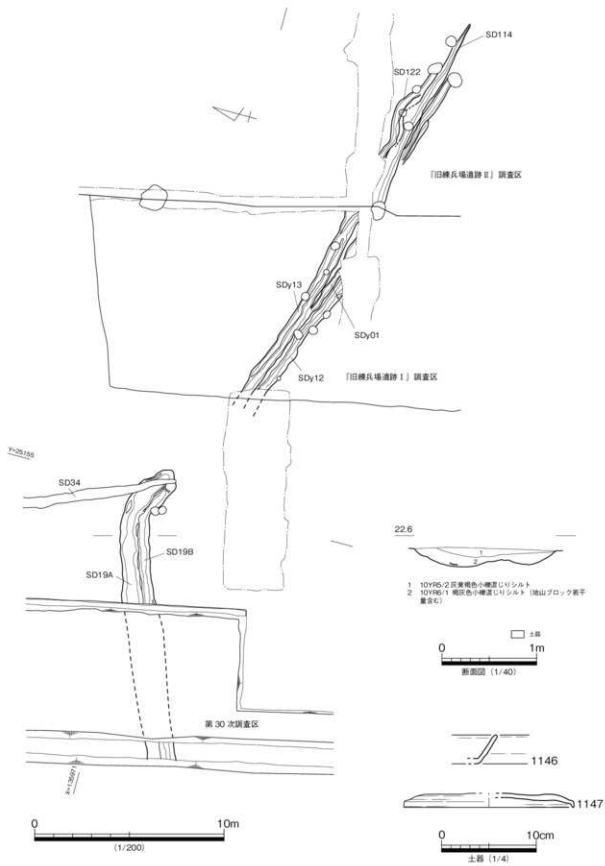
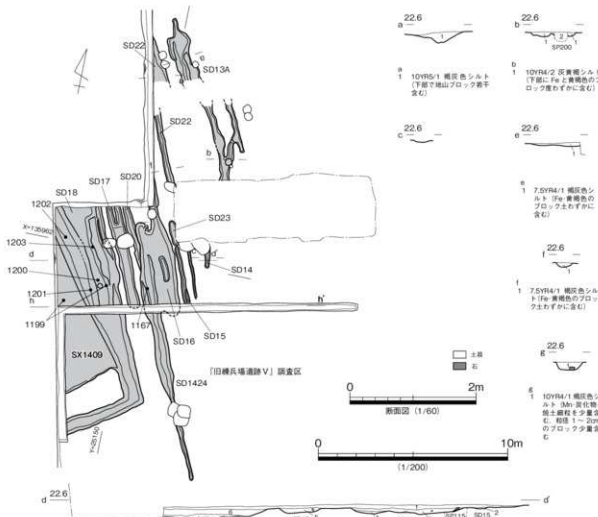


図 183 SD26・SD13B



1146-1147: SD19A

図 184 SD19A・19B



- 1 2.5V4/1 黄褐色シルト (Mn) 炭化物・粘土凝結を少量含む。粒径1~2cmのブロックを少量含む。
- 2 10VR3/2 黄褐色シルト (Mn) 炭化物・粘土凝結を少量含む。粒径1~2cmのブロックを少量含む。流水痕跡は認めない。自然傾斜あり。
- 3 10VR5/1 褐色シルト (Mn) Fe 炭化物・粘土凝結を少量含む。粒径2~3cmのブロックを少量含む。SD18 上層。
- 4 10VR4/1 褐色シルト (Mn) 炭化物・粘土凝結を少量含む。粒径1cm程度のブロックを少量含む。SD16 下層。上層・2層に層分したが大層でない。いずれも流水痕跡は認めない。自然傾斜あり。
- 5 2.5V3/1 黄褐色シルト (Mn) 炭化物・粘土凝結を少量含む。粒径1~2cmのブロックを若干含む。ブロックを多く選入し人為的に破壊された可能性あり。流水痕跡は認めない。自然傾斜あり。
- 6 2.5V3/2 黄褐色シルト (Mn) 炭化物・粘土凝結を少量含む。粒径2~3cmのブロックを少量含む。SD18 上層。
- 7 2.5V3/1 黄褐色シルト (Mn) 炭化物・粘土凝結を少量含む。粒径3~4cmのブロックを多く含む。SD18 下層。下層部下層はブロックの選入が多く人為的に破壊された可能性が高い。

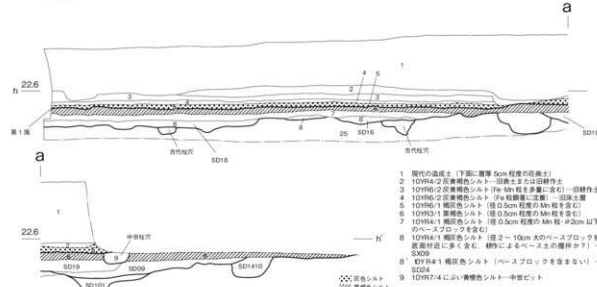


図 185 SD13A・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18・SD20・SD22・SD23 (1)

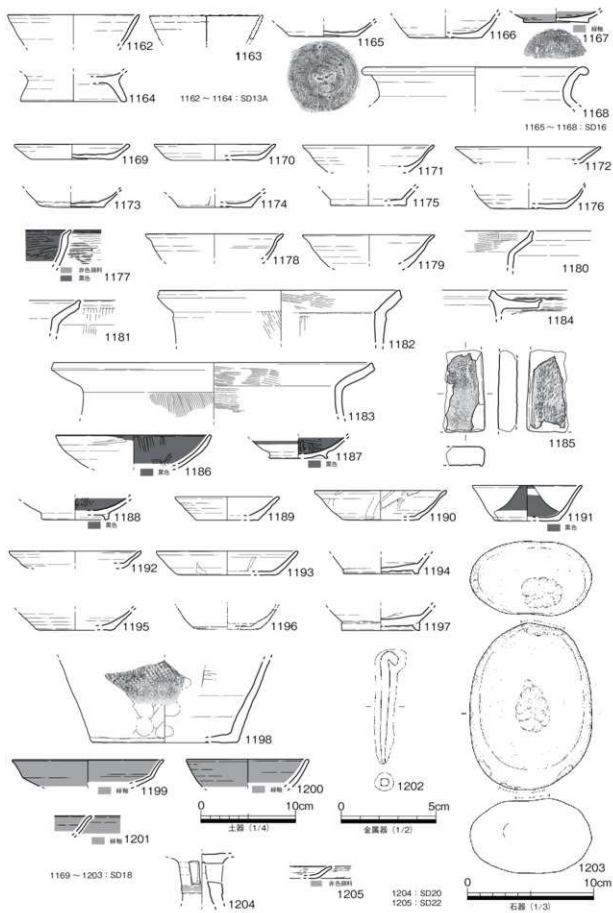


図 186 SD13A・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18・SD20・SD22・SD23 (2)

SD19A・SD19B (図184)

SD19A・SD19Bは4区南で検出された南東から北西に向かい、西に向かう2条の溝である。SD19・SD26と重複する。SD19A・SD19Bはこれらの溝よりも新しい。SD19A・SD19Bの東部は途切れるが、攪乱を挟んで、「旧練兵場遺跡Ⅰ」で報告されたY区のSDy13・SDy01・SDy01に連続し、さらに東側の「旧練兵場遺跡Ⅱ」で報告された調査区のSD122・SD114に連続すると推定される。SD19AとSD19Bは接するように平行して走り、両溝の幅は1.5m、深さ0.2mである。これらの溝からは土器・須恵器片が出土した。1146は須恵器杯、1147は須恵器蓋である。1146・1147は8世紀後半に属することから、SD19A・SD19Bは8世紀後半のものと考えられる。

SD13A・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18・SD20・SD22・SD23 (図185・186)

5区第2面(IV層上面)で検出された溝群である。いずれの溝も南東から北西(N25°W)である。断面図で示しているとおおりこれらの溝は深さ0.1～0.2mと浅く、耕作に伴う溝と考えられる。SD18をはじめこれらの溝の上部に堆積した図185の6層はSR01上層に連続する土層である。SR01上層にはイネの植物珪酸体が含まれており、6層も耕作土層の可能性が高い。5区の西部ではIV層(地山土)が一段下がり、IV層上面には褐色シルト層(図185 7・8層)が堆積する。この層も耕作土と考えられる。この層の下面の筋状の凹みがこれらの溝に当たる。なお、これらの溝の底面からは古代の掘立柱建物SB1008(第30次調査)の柱穴SP251・SP244が検出された。

SD18をはじめこれらの溝からは多量の土器・須恵器が出土した。これらの溝の底面からは古代の柱穴などが検出されている。これらの遺物は元々下部に存在する古代の遺構埋土に含まれていたが、耕作による攪乱のためSD18をはじめとする溝の埋土に含まれたと考えられる。1162～1164はSD13Aから、1165～1168はSD16から、1169～1203はSD18から、1204はSD20から、1205はSD22から出土した。SD13Aから出土した1162は土師器杯、1163・1164は須恵器杯である。SD16から出土した1165は土師器杯、1166は須恵器杯、1167は緑軸陶器碗、1168は須恵器甕である。1165・1166は底部外面に回転ヘラ切り痕があり、9世紀後半に属する。SD18から出土した1169～1176・1195は土師器杯である。1169・1170は9世紀後半から10世紀初頭、1171～1176は10世紀中葉、1195は10世紀後半に属する。1177は黒色土器鉢の口縁部片である。口縁部端は外方に屈曲する。同形態の黒色土器は京都付近で多数出土しており、これらは9世紀後半に属する。1178・1179は土師器碗で10世紀中葉に属する。1180～1183は土師器土鍋で、1182・1183は10世紀中葉、1184は土師器羽釜でこれも10世紀中葉に属する。1185は平瓦で、凸面に縄目タタキ痕が残る。1186～1188は黒色土器碗である。いずれも10世紀中葉に属する。1189～1194・1196・1197は須恵器杯である。1189・1192～1194・1197は9世紀中葉、1190は10世紀前半に属する。1198は須恵器壺で、10世紀中葉に属する。1199は緑軸陶器皿、1200・1201は緑軸陶器碗である。1199は愛知県泉投産で9世紀末から10世紀初頭、1200は京都産で9世紀後半、1201は京都洛北産で9世紀中葉のものである。1202は鉄釘で、1203は砂岩製の叩き石である。SD22から出土した1205は土師器皿で、赤彩が施される。このように、SD18をはじめとする溝から出土した遺物は9世紀から10世紀に属するものが大部分である。なお、これらの溝の上部に堆積する7層から出土した遺物は図212の1363～1375で、大半は10世紀に属するものである。なお、12世紀に属するものも数点みられるが、混入の可能性が高く、これらの溝は10世紀頃のものと考えられる。

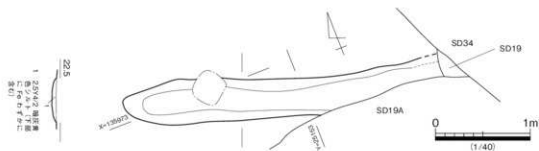


図 187 SD25

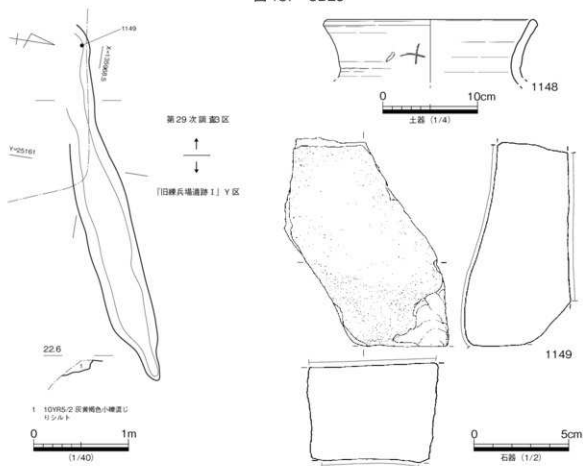


図 188 SD35

SD25 (図 187)

4区は中央の第2面(IV層上面)で検出された溝である。南東から北西に向かう。南東部は7世紀から8世紀の溝SD19・SD19Aと重複し、削平される。検出長34m、幅0.5m、深さ0.1mである。須恵器片・土器片が少量出土した。詳細な時期を示す遺物は見当たらないが、周辺の溝と同様7世紀頃のものと考えられる。

SD35 (図 188)

4区南東端から「旧練兵場遺跡I」で報告したY区にかけて検出された溝である。南西から北東に向かう。南西部は攪乱によって削平される。幅0.5m、深さ0.2mである。土器片・須恵器片が少量出土した。1148は須恵器甕、1149は安山岩製の砥石である。出土遺物からSD35は7世紀頃のものと考えられる。

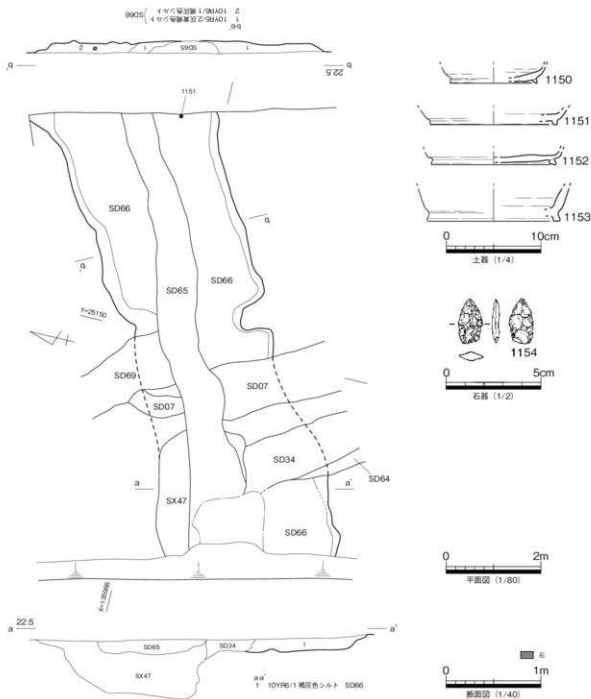
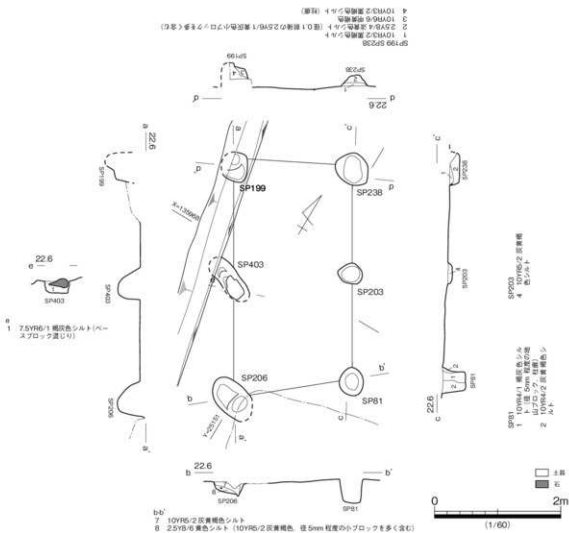


図 189 SD66

SD66 (図 189)

2区の北部の第2面(Ⅳ層上面)で検出された溝である。東から西(N70°E)に向かう。東部は「旧練兵場遺跡Ⅰ」で報告されたSDx10に連続する。SD66は中世の溝SD65、古代の溝SD69・SD07・SD34、中世の土坑SX47と重複し、削平される。これらはいずれもSD66よりも新しい。SD66は幅3.2m、深さ0.15mで、埋土は褐色シルトである。遺物は少量の土器片・須恵器片が出土した。1150～1152は須恵器の底部である。これらは8世紀から9世紀に属することから、SD66は同時期のものと考えられる。



4. 中世

掘立柱建物

SB05 (図 190)

4区南西部で検出された掘立柱建物である。桁行2間(3.8m)、梁間1間(1.9m)で、桁行の方向はN25°Wである。柱穴の平面形はややいびつな円形で、径0.3~0.5m、深さ0.1~0.4mである。各柱穴からは土器片・須恵器片が少量出土した。いずれも小片のため時期を特定し難いが、埋土の色調・土質からSB05は中世のものと考えられる。

溝

SK07 (図 191)

3区のはほぼ中央部で検出された遺構である。古墳時代の溝SD36の埋土上面で検出された。SK07は平面形楕円形で、長軸1.15m、短軸0.5m、深さ0.05mである。須恵器片・土器片などが少量出土した。1151は結晶片岩製の有孔円盤である。SK08の長軸方向はN27°Wで、周辺の中世の耕作に伴う溝とはほぼ同じ方向であることから、SK07は土坑ではなく、中世の耕作に伴う溝の一部の可能性が高い。

SK08 (図 192)

3区のはほぼ中央部で検出された遺構である。古墳時代の溝SD36の埋土上面で検出された。SK08の

北部はSK07と重複し、削平される。また、SK08の平面形はややいびつな楕円形で、長軸1.1m程度、短軸0.5～0.65m、深さ0.1mである。土器小片が数片と結晶片岩製の柱状片刃石斧(1156)が出土した。SK07同様遺構の長軸方向はN27°Wで、付近の中世の耕作に伴う溝とほぼ同じ方向であることから、SK08もその一部の可能性が高い。

土坑

SX47 (図193)

2区の西端で検出された土坑である。SX47の西部は攪乱によって削平され、調査区外に連続する。また、中央部は中世の溝SD65と重複し、削平されるため、全体は不明である。SX47の平面形はややいびつな隅丸長方形で、長軸2.7m以上、短軸1.8m、深さ0.65mである。土器片・須恵器片が少量出土した。

1157は蛸壺で、土師質である。

中世の土師質土器杯の破片が含まれていたことから、SX47は中世のものと考えられる。

溝

SD01 (図194)

5区の第1面(Ⅲ層上面)で検出された溝である。南西から北東(N10°E)に向かう。南部は『旧練兵場遺跡V』で報告された7-14区であるが、SD01の続きは検出されていない。北部は攪乱によって削平される。検出長は3.2m、深さ0.1mである。土器・須恵器片が少量出土した。1158は黒色土器碗である。このほか中世の土師質土器碗の小片がみられることから、SD01は中世のものと考えられる。

SD05 (図195)

4区西端の第1面(Ⅲ層上面)で検出された溝である。南東から北西(N30°W)に向かう。北西部は調査区外に連続するため不明である。幅0.6～1.2m、深さ0.1mで、土器・須恵器片が少量出土した。1159は須恵器壺の口縁部片である。1159は古代に属するが、埋土の色調・土質からSD05は中世のものと考えられる。

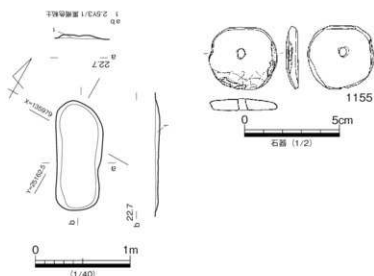


図191 SK07

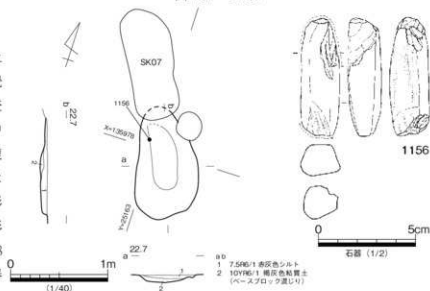


図192 SK08

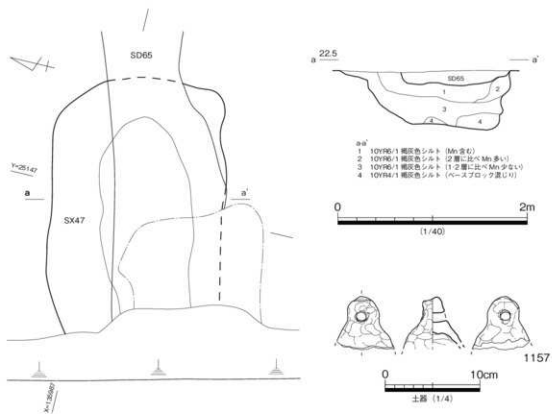


図 193 SX47

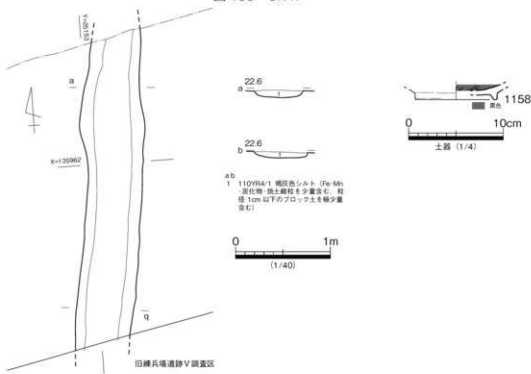


図 194 SD01

SD03・SD27・SD28・SD29・SD30・SX04 (図 196)

いずれも 3 区で検出された溝で、南北方向 (N25 ~ 30° W) に走る。幅 0.4 ~ 0.8 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m である。埋土はいずれも灰白色砂質土で、少量の土器片・須恵器片などが出土した。これらの溝は付

近の条里地割に平行して直線状であり、幅は狭く、浅いことから、田畑の耕作に関連する溝と考えられる。埋土の色調・土質からこれらの溝は中世のものと考えられる。

SD43 (図197)

1区西半部で検出した南北溝で、北端は攪乱により削平を蒙り、南端はSD60に直交して合流する。流路方向N29.3°Wに配される直線溝である。SD44・46・53・42・55・波板状遺構SD59と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも後出する。SD60との合流部北側で、SD57・58が概ね直交して合流する。検出

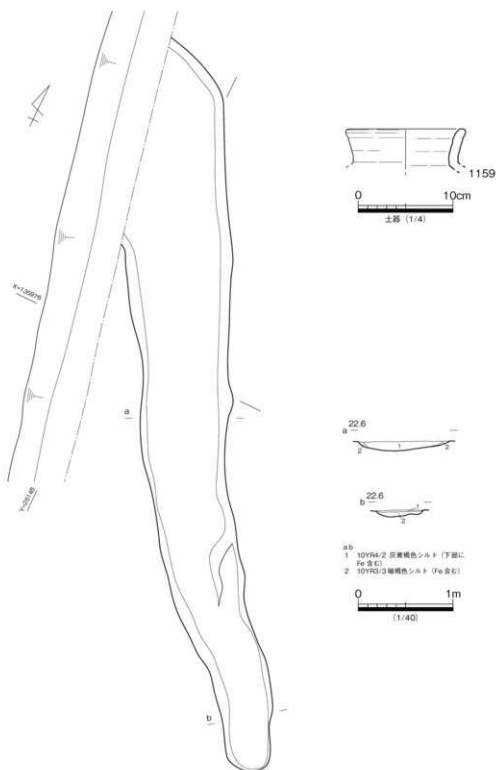


図195 SD05

面幅0.17～0.75m、残存深0.03～0.17m、断面浅い皿状ないし逆台形状を呈する。底面標高は、北端部で22.02m、南半部で22.14mを測り、高低差よりSD60より分水し、北へ流下させた可能性が考えられる。この場合、SD60に井環等の構造物を設ける必要があるが、調査では確認できなかった。

埋土は単層で、北端部付近で多量のベース層ブロック土の混入が確認された。溝廃絶後、何らかの意図により局部的に埋め戻された可能性がある。

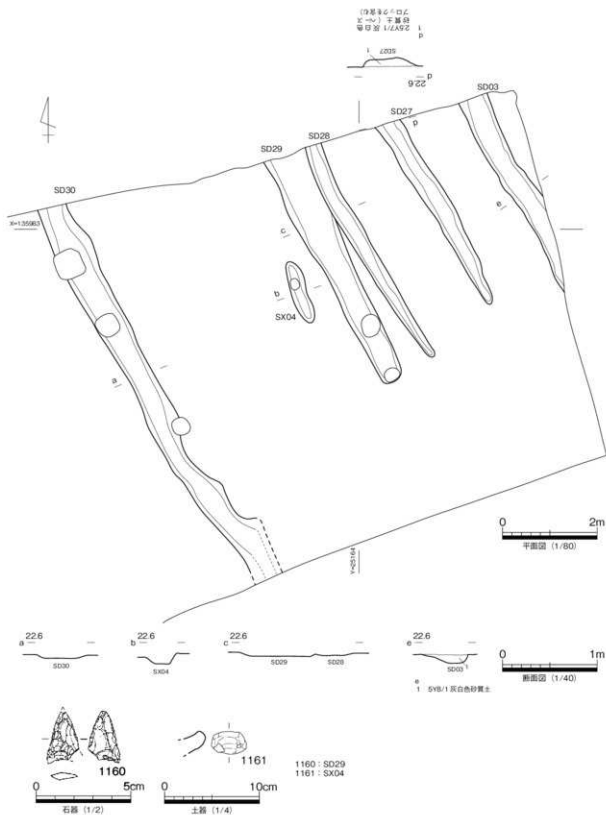


図 196 SD03・SD27・SD28・SD29・SD30・SX04

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器の小片のほか、サヌカイト剥片、鉄滓などが、上層を中心にコンテナ1箱程度出土した。出土した遺物の大半は混入の可能性が考えられ、本遺構に帰属する遺物は乏しい。5点を図示したが、土師器・須恵器はいずれも9世紀代に遡る。図197-1210は「く」字状を呈す

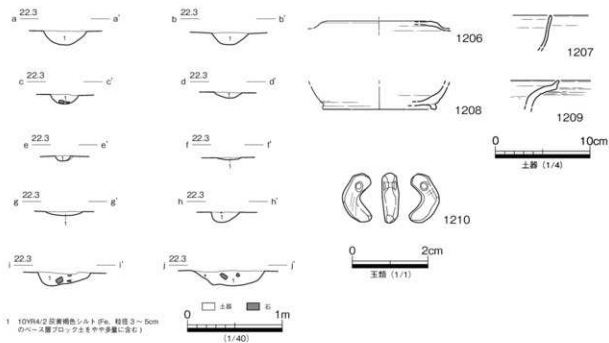


図 197 SD43

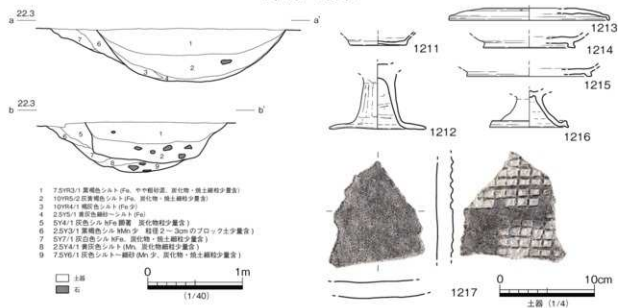


図 198 SD46・SD53

る小型で不整形な含クロム白雲母岩製の勾玉であり、弥生時代後期後半から終末期に遡る混入資料である。出土遺物より本遺構の時期を特定することは困難であり、後述するSD60と同時併存していたことより、12世紀末~13世紀前半代に機能していた枝水路と考える。(蔵本)

SD46 (図 198・199)

1区北半部で検出した東西溝で、23次調査SDx07の一部(「旧練兵場遺跡Ⅰ」所収第326図6 1・7層溝)、19次調査SD33(「旧練兵場遺跡Ⅱ」所収)の西延長部にあたる。切り合い関係より、SP289・290、SD43より先行し、SD53・SX24、SR01よりも後出する。19・23次調査分を含め、後述するSD53とは延長50m以上にわたりほぼ同位置に重複して開削され、同規模の溝状遺構として踏襲されていることから、SD53の改修溝と考えてよいだろう。検出面幅1.5~2.0m、残存深0.45~0.57

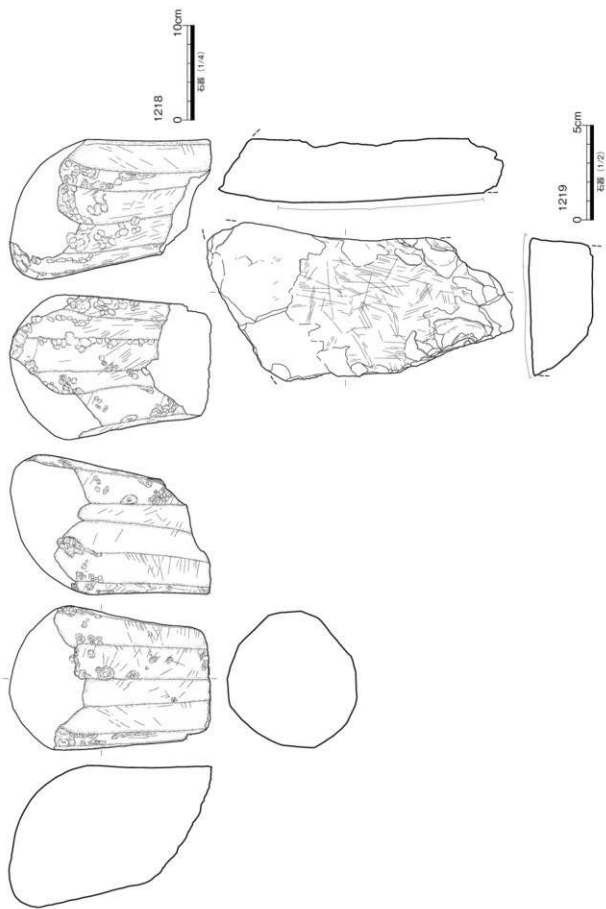


図 199 SD46・SD53 遺物(石)

m、断面U字状ないし逆台形状を呈する。底面の標高は、19次調査区を含め21.7m前後で一定しており、溝底の高低差より流下方向を特定するまでには至らなかった。

埋土は、2～4層に細分され、3層

に大別し、遺物の取り上げをおこなった。上・中層（図198-1・2層）は、溝機能停止後の堆積層で、穏やかな環境下で自然堆積したものと考えられる。中層の北岸肩部には、壁面の崩落に起因するベース層ブロック土が斜面堆積し、一定期間オープンな状況下で放置されていた可能性が考えられる。また、ベース層に由来するとみられる拳大～幼児頭大の自然礫が多量に出土し、溝周辺の土木工事等によって生じた礫を投棄した可能性がある。下層（同図3・4層）は、溝機能時の堆積層であろう。溝底面に薄く堆積が確認されたのみで、浸漬等により削奪されたことも考えられる。

遺物は、上層を中心にコンテナ2箱程度出土した。出土した遺物の大半は混入の可能性が考えられる弥生土器片やサヌカイト剥片、土師器高杯（図198-1212）、須恵器杯蓋（同図-1213）、杯身（同図-1214-1215）、高杯（同図-1216）、布目平瓦（同図-1217）片など、9世紀前半代以前に遡る資料である。上層出土の土師器杯（1211）は、12世紀中葉に下る可能性があり、この頃までには溝の機能は停止し、一定程度埋没が進んでいたと考えられる。なお、帰属時期は不詳だが、1218は砂岩製の砥石で、長軸方向に幅1.5～4.8cmの13面に面取りされ、各面で使用痕を顕著に認める。1219は、板状の自然礫を使用した砥石で、現状では上面1面のみに使用痕を認める。（蔵本）

SD53（図198）

1区北半部で検出した東西溝で、23次調査SDx07の一部（旧練兵場遺跡I所収第326図6 2～6・8・9層溝）、19次調査SD31（旧練兵場遺跡II所収）の西延長部にあたる。切り合い関係より、SD43・46より先行し、SX24より後出する。既述したように、SD46の改修前の前身溝と考える。検出面幅1.46m以上、残存深0.53m、断面逆台形ないし碗底状を呈する。西端は、調査区外へ延長する。流路底面の標高は、19次調査区を含め、21.6m前後で一定しており、その高低差より流下方向を特定することはできなかった。

埋土は、2～5層に細分され、3層に大別し、遺物の取り上げをおこなった。上層（図198-5層）の灰色シルト層は、後述する中層を切り込むように堆積しており、SD46改修以前に改修がなされた可能性が考えられる。中層（同図6～8層）は、流路肩部に斜面堆積した土壌で、埋土中に壁面の崩落に起因すると考えられるブロック土の堆積が認められ、溝機能停止後一定期間オープンな状態で放棄されていた可能性が考えられる。下層（同図9層）の灰色シルト～細砂は、溝機能時の流下水堆積層と考えられ、溝開削時の遺物を含む可能性がある。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器の小片のほか、サヌカイト剥片等が、下層を中心にコンテナ半箱



図200 SD57

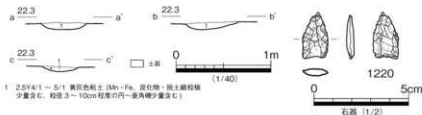


図201 SD58

程度出土したのみで、SD46による改修のためか、遺構の規模に比較すると遺物は乏しい。また、出土した遺物の大半は、混入の可能性が考えられる弥生土器片であり、本遺構に直接帰属する可能性の高い古代以降の遺物は、器種不詳の須恵器と土師器の小片が少量出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり、開削時期については古代に遡る可能性は認めるものの、既述したSD46との関係より、SD46と大きくは隔たらない時期に機能していた可能性が考えられる。(蔵本)

SD57・58 (図200・201)

1区南端部SD60北側で検出した、SD60とはほぼ並走する溝である。SD60の枝溝であるSD43と調査区中央部で合流し、同時期に併存していたと考えられる。SD57は、西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内で途切れ、延長7.63mを確認した。SD58は、西端は調査区内で途切れ、東端は19・23次調査で延長部分は確認されていない。両溝間は、掘り方上面間で約0.96m隔たっており、両溝を側溝として、基幹水路SD60の北側に設置された通路の可能性も考えられるが、調査では確認は得られていない。

SD57は、検出面幅0.19～0.33m、残存深0.02～0.04m、断面形は浅い皿状を呈する。流路底面の標高は、西端部で22.09m、東端部で22.18mを測り、高低差より西へ流下していた可能性がある。SD58は、検出面幅0.38～0.57m、残存深0.06～0.08m、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。流路底面の標高は、22.16m前後で一定しており、高低差より流下方向を特定することはできなかった。

埋土はいずれも単層で、SD43と共通し、明瞭な流水堆積は認められなかった。

遺物は乏しく、大半は混入の可能性が考えられる弥生土器片やサマカイト製石鏃(図201-1220)や割片である。本遺構に直接帰属する可能性の高い古代以降の遺物は、器種不詳の須恵器と土師器の小片が少量出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、SD60と同時併存していたと考えられることから、12世紀末～13世紀前葉の時期を想定する。(蔵本)

SD60 (図202～204)

1区南端部で検出した東西に走行する直線溝で、23次調査SDx08(「旧練平場遺跡Ⅰ」所収)、19次調査SD17(「旧練兵場遺跡Ⅱ」所収)の西延長部にあたる。さらに東の14次調査区でも、延長位置で3条の溝(SD97～99)が検出されている。3条の溝について、切り合い関係に関する記述や挿図が報告されておらず、どの溝が本溝の延長に相当するかは、19次調査区と隣接していないこともあり、判断できなかった。いずれにしろ調査区内で延長約140mが確認された基幹水路の一つであり、既存の復原案(金田1988)では、四条八里十一坪と十四坪を分割する条里型地割りの坪界溝に相当する。切り合い関係より、波板状遺構SD59より後出する。また、西部底面にSK18が穿たれており、掘削深度や位置より、SD60の湧水機能を意図した出水状遺構と考えられる。なお、SK18の南、SD60の南肩部分は幅約1.10mが階段状に掘り込まれており、溝底への昇降口として機能していたことが想像される。検出面幅2.45～2.63m、残存深0.58～0.61m、断面形は逆台形ないし腕底状を呈する。流路底面の標高は、19次調査区を含め21.6～21.7mと一定し、その高低差から流下方向を特定することはできなかった。

埋土は、3層に分層し、遺物の取り上げをおこなった。上層(図202-1層)は、下位2層とはやや異なり、断面形状からも改修溝の可能性もある。中・下層(同図2・3層)は、溝機能停止後の低湿状況下での自然堆積層と考えられ、多量の石礫の投棄を伴いながら、徐々に埋没したと考えられる。溝底には溝機能時の流下水堆積と考えられる、灰色細砂の薄い堆積が認められたが、溝の規模に比して痕跡的なものでしかない。なお既述したSD43の埋土は、本溝下層埋土との連続が確認され、本溝開削の比較的初期の段階で、SD43は開削されていたことが伺える。

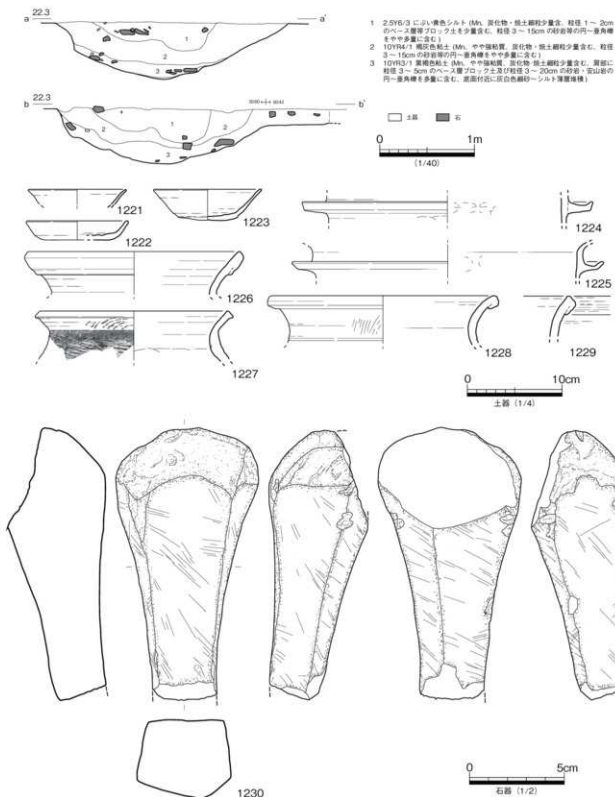


図 202 SD60

遺物は、中層を中心にコンテナ 3箱程度出土した。出土した遺物では弥生土器片がやはり一定量を占めるが、本調査区他の遺構 (SD46・53・51・55) と比較して、9世紀代を中心とする古代の土器や須恵器片がやや多数出土しており、既述した本溝の前身溝である SD55 を大きく削棄して本遺構が開

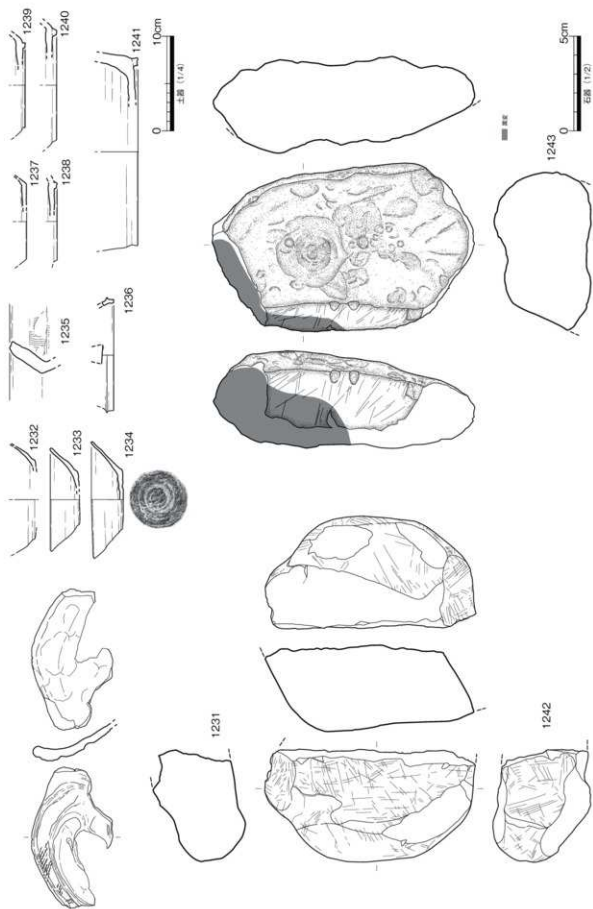


圖 203 SD60 遺物 (中層)

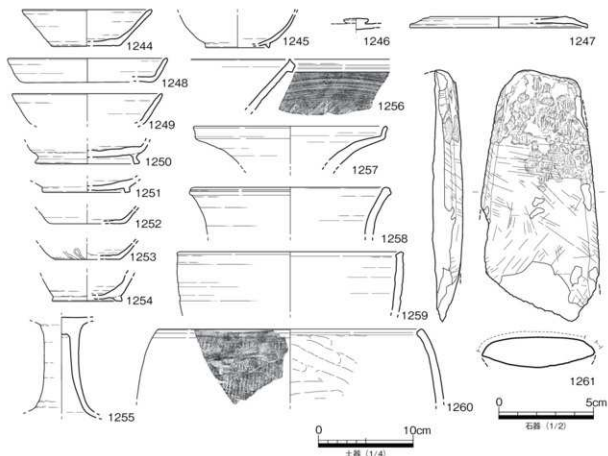


図204 SD60 遺物(下層)

削されたことを示しているものとみられる。

図202～204に本遺構出土遺物を、層位毎に掲載した。掲載した遺物でも時期幅は広く、22次調査J区等で確認されている縄文時代後期の旧河道からの混入資料と考えられる浅鉢(図203-1231)は別としても、須恵器高杯(同図-1236)は5世紀代に遡り、外反する口縁に端部を拡張する甕(図202-1226、図204-1256等)や単口縁の鉢類(図204-1259、1260)は6世紀後半～7世紀中葉に、杯・皿類にも8世紀(図203-1239、図204-1250)と9世紀前半(図203-1237～1240、図204-1247、1251～1253)のものがみられる。土師器碗(図202-1223、図203-1233)、羽釜(図202-1224、1225)、十瓶山周辺産須恵器甕(図202-1227)、黒色土器碗(図204-1245)は11世紀後半～12世紀前半頃になるが、既述したSD42とSD46との重複関係からすれば、これらはいずれも混入資料と判断される。そのほか、縦に半截された結晶片岩製の両刃石斧(図204-1261)や、帰属時期不明の流紋岩(図202-1230、1242)や砂岩製(図203-1243)の砥石が出土している。

出土遺物のなかで、土師質土器皿(1222)、杯(1234、1244)、鍋(1235)等の13世紀前～中葉に下る遺物が、量的に限られるが、本遺構の機能時を示す資料と考える。19次調査SD17、14次調査SD99でも同時期の遺物が出土している点も矛盾しない。複数回の改修の痕跡が認められるものの、機能時の遺物量が乏しいことは、本溝が当該期の居住域とはやや離れて位置していることと関係があると考えられる。

一方で、問題となるのが、19次調査SD17・33と本調査区SD43・46・60との関係である。19次調査では、SD33は「SD17から途中で分岐していることから、SD17とは同時期のもの」と報告されているが、既述したように本調査区ではSD60は、SD43とSD46との切り合い関係より、SD46より後出し、19次調

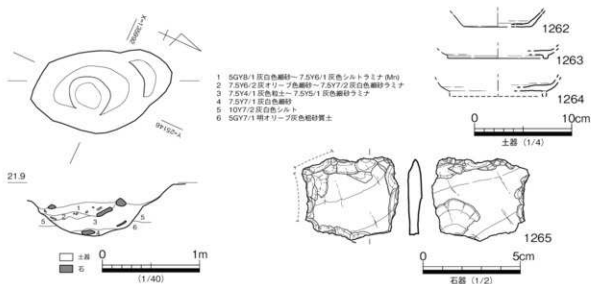


図 205 SK18

査の成果と矛盾することが判明した。今回までの調査によって、この矛盾を実証的に解消できるだけの資料は必ずしも得られておらず、限られた資料から早急に結論を提示するよりも、延長部の今後の調査成果を待って判断することが賢明であろう。今回の調査により、时期的な矛盾が生じる可能性がある点を指摘するにとどめたい。(蔵本)

SK18 (図 205)

SD60 流路底面で検出した土坑で、既述したように位置や掘削深度等より、SD60に伴う出水状遺構として報告する。東西幅 0.85 m、南北長 1.47 m、平面形は長楕円形を呈する。主軸方向は N 35.1° W を指し、SD60 に概ね直交する。残存深 0.38 m、断面形は碗底状を呈し、坑底部 0.15 m は透水層とみられる粗砂質土を掘り込む。

埋土は 4 層に細分され、3 層に大別して遺物を取り上げた。上層 (図 205-1・2 層) は、土坑上面で後述する中層を一部削り込んで堆積した砂及びシルトのラミナ堆積層で、SD60 の溝機能時の堆積層と考えられる。つまり、本土坑が出水としての機能を停止した後も、SD60 は灌漑水路として維持されていたようだ。中層 (同図 3 層) は滞水下での堆積が想定され、下層 (同図 4 層) とともに、出水機能時の堆積層であろう。湧水により水没した状況であったことが想像される。

遺物は、弥生土器のほか、須恵器や土師器の小片が中層を中心に少量出土したのみである。出土遺物の大半は弥生土器片であり、図示した須恵器杯 (図 205-1262 ~ 1264) も、本土坑の性格を既述のように考えるなら混入資料とすべきであり、出土遺物より開削時期を特定することは困難である。SD60 に伴うことから、12 世紀末 ~ 13 世紀前葉に開削・埋没したものと考える。(蔵本)

SD65 (図 206)

2 区の北部、第 2 面で検出された溝である。西から東 (N63° E) に向かう。東端は調査区外に延びる。東接する調査区は「旧練兵場遺跡 I」で報告された X 区で、SD65 は X 区南部で検出された SDx11 に連続する。西端は攪乱によって削平され、調査区外に延びる。SD65 の西部は SD66・SD67・SX47 と重複する。これらの遺構よりも SD65 のほうが新しい。SD65 は幅 0.8 ~ 1.0 m、深さ 0.15 m で、埋土は灰白色シルトである。少量の土器片・須恵器片が出土した。1266・1267 は土師器杯、1268 は須恵器杯、1269 は須恵器高杯の脚部である。古代の土器が大部分を占めるが、埋土の色調・土質から SD65 は中

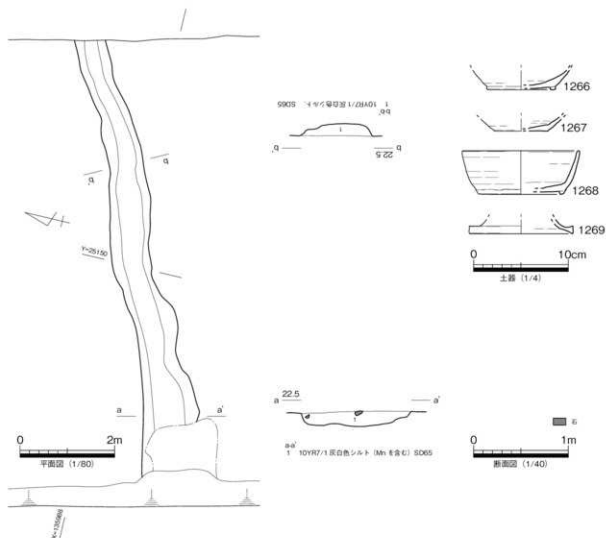


図 206 SD65

世のものと考えられる。

SD61 (図 207)

1区南端部で検出した東西直線溝である。流路方向N 63.89° Eと、周辺地域の条里型地割りに合致し、重複関係よりSD60より後出する。検出面幅0.62～0.66m、残存深0.07～0.11m、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。N Z R 8区北部の削平面、つまり棚田状に造成された旧田面の南端地境ラインに合致し、耕作地への給・排水路として機能したと考えられる。底面の標高は、東端部で22.21m、西端部で22.16mを測り、高低差より西へ流下していた可能性が考えられる。

埋土は、灰黄色シルトの単層で、明瞭な流水堆積は認めない。

遺物は、弥生土器や土師器、須恵器、竜泉窯系青磁、平瓦の小片のほか、サヌカイト剥片等が少量出土したのみである。出土した土器類の大半は、器種不明の小片であり、図化した遺物はない。平瓦片は炭素を吸着させたもので近世以降に下る可能性があり、埋土や遺構の切り合い関係から、近世に開削・埋没したものと考えられる。(蔵本)

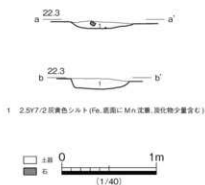


図 207 SD61

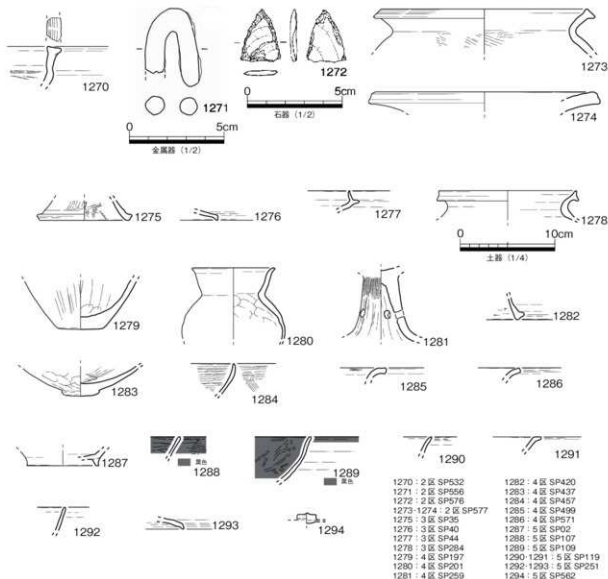


図 208 柱穴・小穴出土遺物

柱穴・小穴出土遺物 (図 208)

1270～1294は柱穴・小穴から出土した遺物である。1270～1274は2区の柱穴・小穴、1275～1278は3区の柱穴・小穴、1279～1286は4区の柱穴・小穴、1287～1294は5区の柱穴・小穴から出土した。1270・1284は弥生土器鉢、1278・1279は弥生土器甕、1274・1285・1286は弥生土器壺の口縁部、1283は弥生土器の底部、1275・1282は弥生土器高杯、1281は弥生土器または土師器高杯、1280は土師器壺、1276・1293・1294は須恵器蓋、1277・1290・1291・1292は須恵器杯、1287は土師質土器碗、1288・1289は黒色土器碗で、1271は鉄釘、1272はサヌカイト製石鏃である。これらは弥生時代中期後半から中世に属するものである。

遺構に伴わない遺物 (図 209～212)

図 209・1295～1297は、1区北半部SD46南東部を中心に広がる、東に傾斜するベース層の緩やかな斜面部に堆積した黒褐色シルト層より出土した遺物である。おそらくはSR01と一連の堆積層の一部と考えられるが、SD46等のためSR01の層位上の対応関係が捉えられず、また東側調査区で延長

が確認されていないこともあり、性格を特定するまでには至っていない。本来ならSR01に含めて報告すべきであろうが、上述した理由より、包含層出土資料として扱う。遺物量は弥生土器小片を中心にコンテナ半箱程度出土している。1297は、弥生土器壺等の体部片外面に、同心円状の弧線と直線等で複雑な文様を描く。

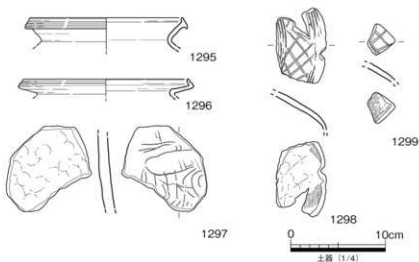


図 209 遺構に伴わない遺物 (1)

1295・1296は弥生中期後半新段階(古)に位置付けられると思われるが、線刻土器を同時期に位置付けるかどうかは、遺構の性格上断定はできない。

1298・1299は、1区北端SR01上面より穿たれた建物基礎の攪乱より出土した遺物である。おそらく同一個体の破片と思われるが、接合はしない。(蔵本)

1300～1308は3区から出土した遺物である。1300は土師器杯、1301・1304は須恵器杯、1302は須恵器蓋、1303は須恵器壺である。1305・1307はサヌカイト製の石鏃、1306はサヌカイト製の石包丁、1308は結晶片岩製の柱状片刃石斧である。

1309～1350は4区から出土した遺物である。1309～1313は古墳時代前期に属し、1309・1310は甕、1311は壺、1312・1313は鉢である。1314～1316は弥生土器鉢、1317は高杯、1318は支脚または高杯の脚部である。1319～1322は土師器杯、1323は土玉、1324は分銅形土製品である。1325～1330は須恵器杯、1331は須恵器蓋、1332は須恵器鉢、1333は須恵器皿、1334は黒色土器碗である。1335～1343はサヌカイト製の打製石器で、1335～1340は石鏃、1341は石匙、1342は楔状石核、1343は石包丁である。1348は安山岩製の砥石である。1344は銅製品であるが、種類は不明である。1344の内部は空洞で、上部に突出部があり、下端は内湾する。1345は鉄釘である。1346は端部が剥離する。石材は結晶片岩である。種類は不明である。1347は砂岩製の叩き石である。1349は滑石製の石臼、1350は碧玉製の管玉である。

1351～1362は5区から出土した遺物である。1351・1352は土師器碗、1353は土師器皿の底部、1354は土師器甕、1355～1357は黒色土器碗、1358は瓦器碗、1359・1360は緑釉陶器碗と古代から中世に属するものである。

1363～1371はSD15～SD18・SD20の上部に堆積する土層(図188 h h' 断面図7層)から出土した遺物である。1363～1365は土師器杯で10世紀に属する。1366は土師器碗で12世紀前半、1367・1368は土師器甕で、1367は9世紀、1368は10世紀に属する。1369は黒色土器碗で、内外面ともに黒色である。12世紀前半に属する。1372～1374は緑釉陶器である。1375は砂岩製の砥石である。これらの遺物の中には12世紀に属するものも含まれるが、9世紀から10世紀に属するものが大部分である。

1376～1378は出土位置不明の遺物である。1376は弥生土器鉢、1377は土鉢、1378はサヌカイト製の石鏃である。

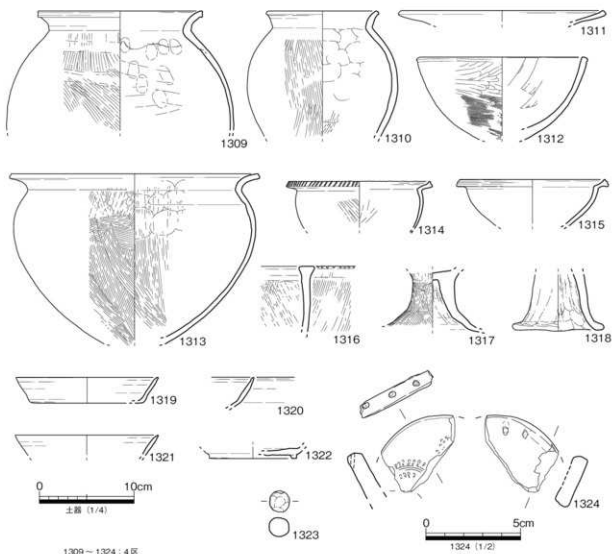
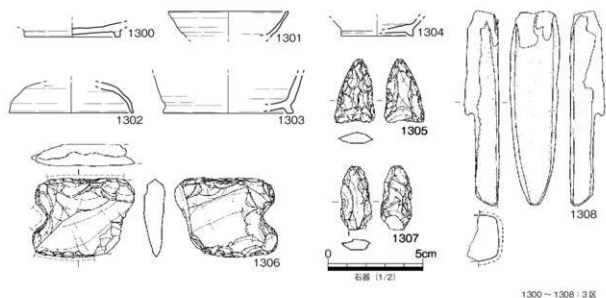


図 210 遺構に伴わない遺物 (2)

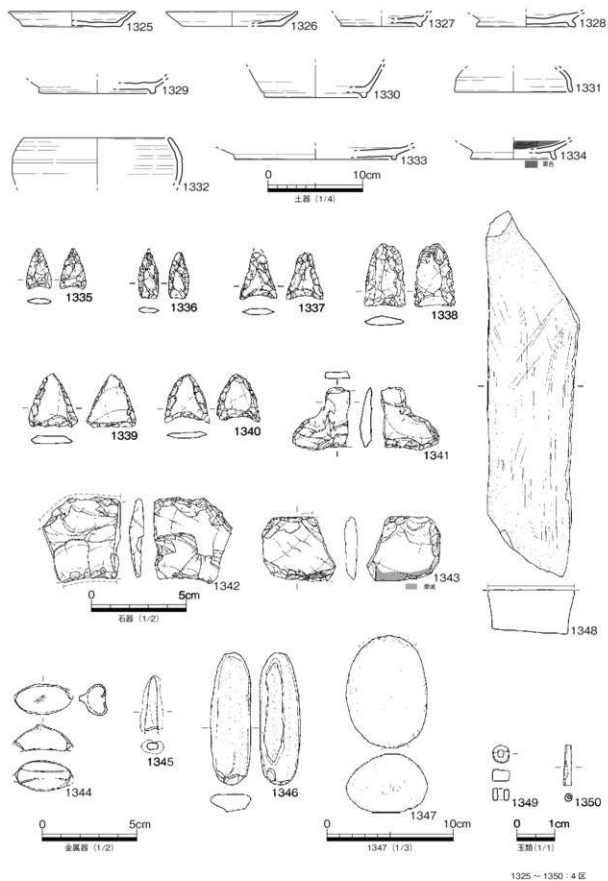


図 211 遺構に伴わない遺物 (3)

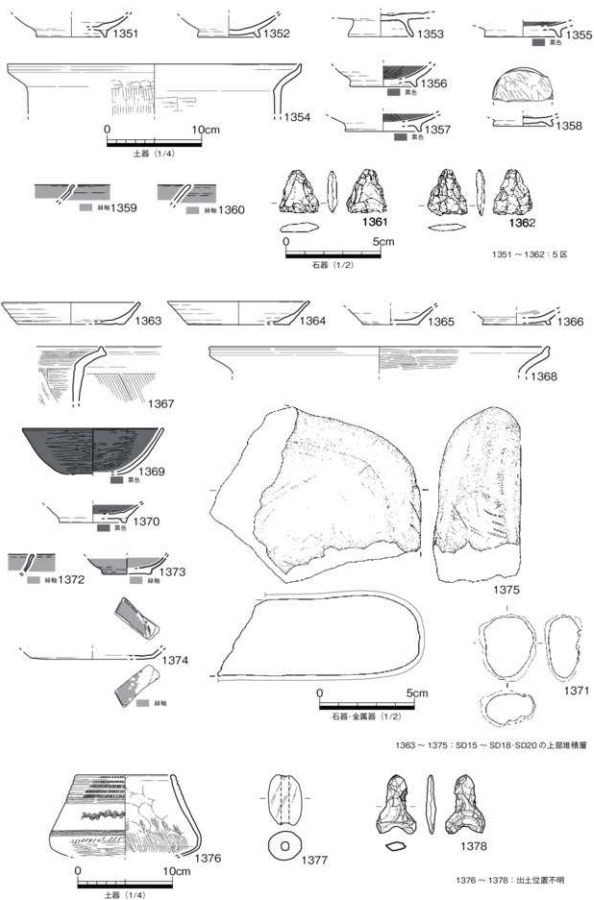


図 212 遺構に伴わない遺物 (4)

第5章 第30次調査

1. 1A区

竪穴建物

SH1001 (図213)

第27次調査の6-1区に西接する1A区の北東隅で検出された竪穴建物である。SH1001の南部は近代の溝によって削平されており、建物の北西壁付近が残存するだけである。東側の6-1区では古墳時代の溝SD04や攪乱坑があり、SH1001の東部は未検出である。残存部分は僅かであるが、SH1001の平面形は方形と推定される。床面までの深さは0.2mで、壁沿いには幅0.1m、深さ0.1mの壁溝が巡る。主柱穴は6-1区SP96〔旧練兵場遺跡Ⅳ〕で報告のほか数個で構成される。弥生土器・土師器・須恵器片が少量出土した。1379～1381はいずれも土師器である。須恵器片は図化していないが、糞体部である。これらの遺物からSH1001は古墳時代後期のものと考えられる。

柱穴

SP1002 (図217)

1A区の北東部で検出された柱穴である。SP1002の上部には古墳時代後期の竪穴建物SH1001があり、この建物の貼床を除去後に検出された。東部は第27次調査の6-1区であるが、この付近には弥生時代後期から古墳時代の遺構が密集しており、SP1002の東部は未検出である。土器小片が3点出土した。埋土の色調・土質から、SP1002は弥生時代中期後半のものと考えられる。

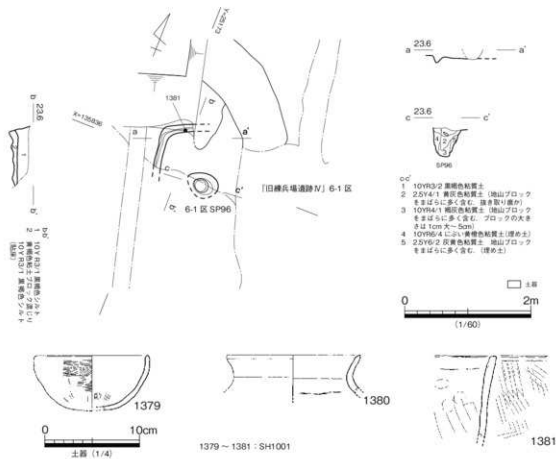


図213 SH1001

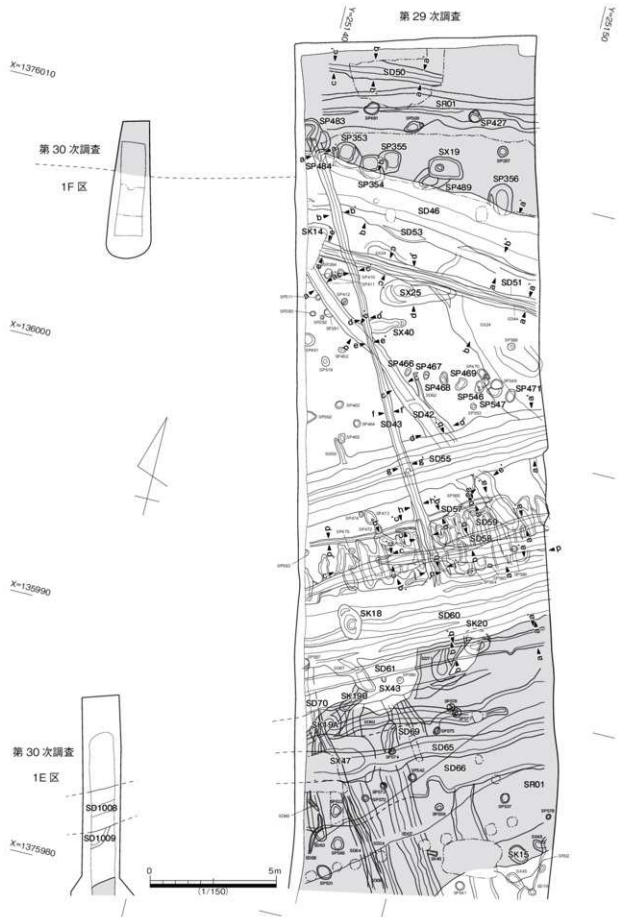


図 214 第30次調査・第29次調査1・2区平面図

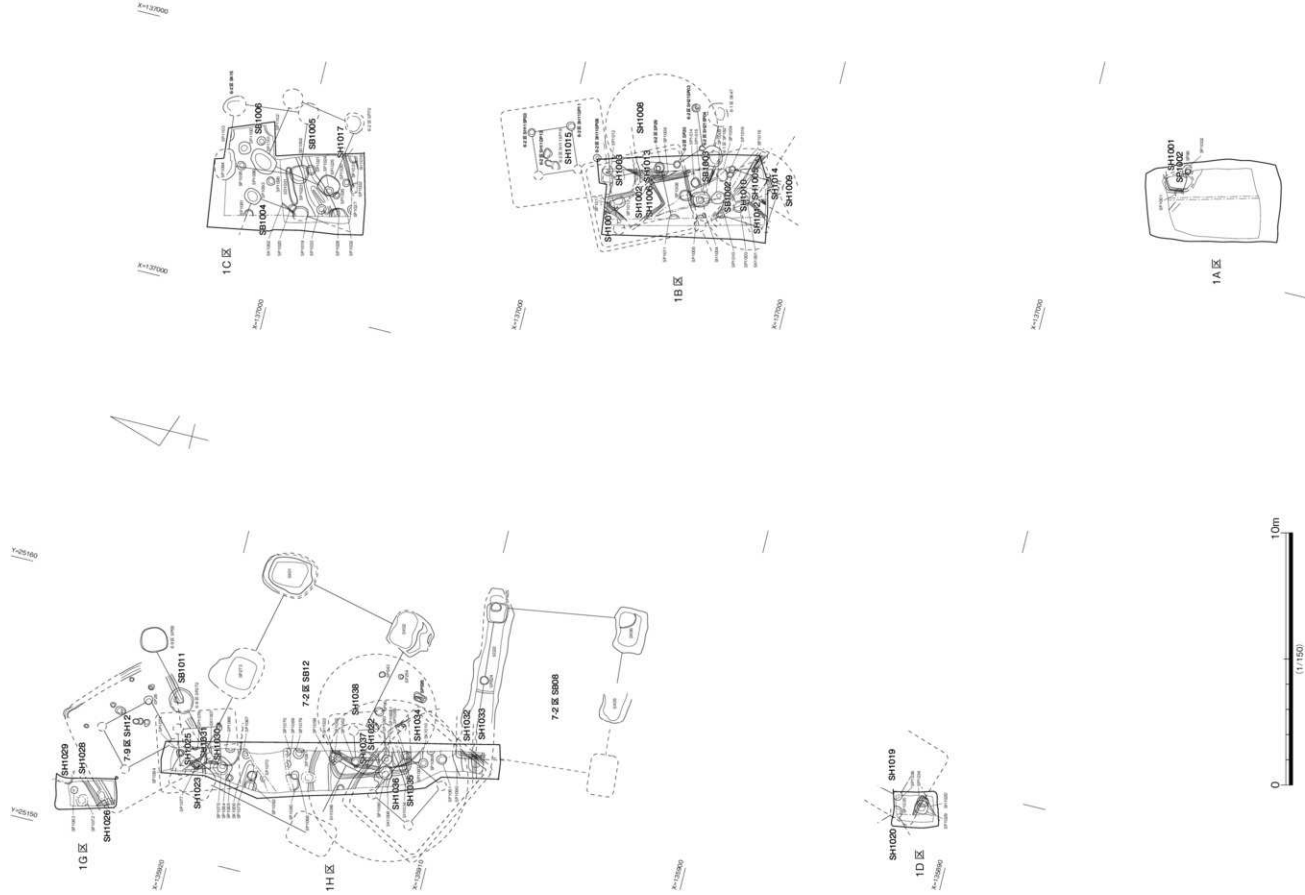


図 215 第 30 次調査平面図

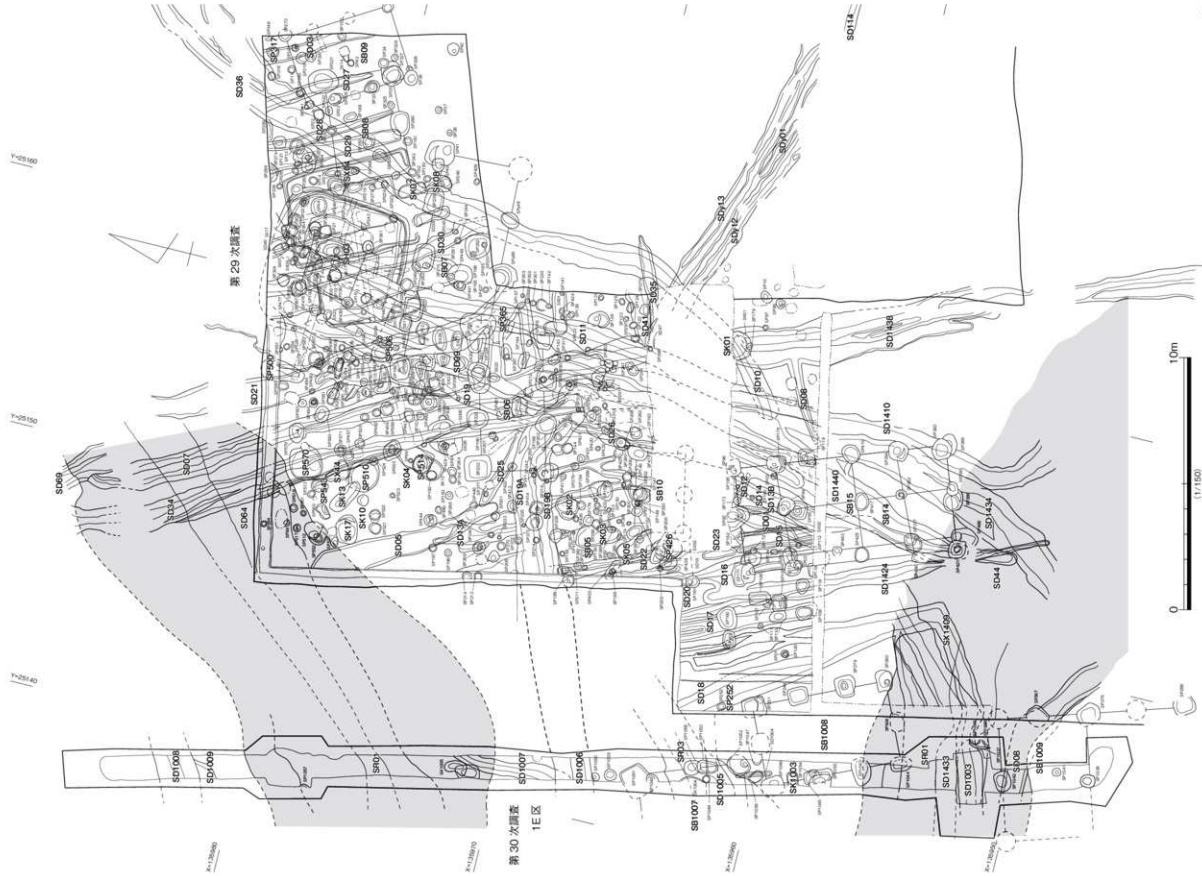


図 216 第 30 次調査・第 29 次調査南部平面図

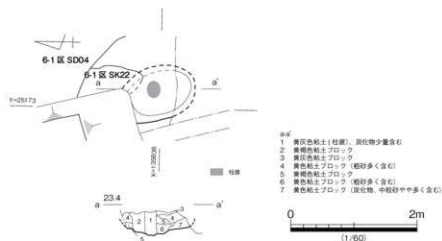


図 217 SP1002

2. 1B区

竪穴建物

SH1002 (図 218)

1B区の北部で検出された竪穴建物の一部である。北部は古墳時代の竪穴建物 SH1007・SH1003・SH1006と重複し、西部・中央部は現代の建物基礎による擾乱で削平される。東部は第27次調査6-2区に連続するが、未検出である。建物の南壁の一部が検出されただけである。壁沿いには幅0.2m、深さ0.1mの壁溝が巡る。主柱穴はSP1011と6-2区で検出されたSP29の2個が検出された。これらの柱穴の平面形は円形で、径0.3m、深さ0.4mである。土器・須恵器・サスカイト片が少量出土した。弥生土器も含まれるが、須恵器杯(1383・1384)がみられる。これらは陶器編年TK209型式に属することから、SH1002は6世紀後半から7世紀初頭のもと考えられる。

SH1003 (図 219)

1B区の北端で検出された竪穴建物の一部である。北部は調査区外に連続し、東部は第27次調査6-2区に連続する。6-2区には『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告された竪穴建物SH11・SH12があり、これらの建物のどちらかに連続すると考えられる。壁沿いには幅0.2m、深さ0.05mの壁溝が巡る。主柱穴は1B区の北東隅の柱穴SP1012があるが、他は不明である。遺物は土器・須恵器片などが整理箱1/4程度出土した。なお重複する6-2区SH11・SH12からは滑石製の白玉4点が出土した(『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告)。SH11・SH12は弥生時代終末期に属すると考えられることから、白玉はこれらの竪穴建物ではなく、SH1003に伴うものと考えられる。弥生土器のほか、須恵器・土師器が出土した。1389は須恵器杯で、陶器編年TK217型式に属することから、SH1003は7世紀前半から中葉のもと考えられる。

SH1005 (図 219)

1B区の南端で検出された竪穴建物の一部である。西部・南部は調査区外に連続し、東部は第27次調査6-1区に連続すると推定されるが、未検出である。また、南部は竪穴建物SH1009が重複しており、削平される。このように建物の北部付近が検出されただけであるが、北壁が直線的に伸びることから平面形は方形と推定される。平面規模は不明である。底面までの深さは0.1～0.2mである。壁沿いには幅0.2～0.3m、深さ0.2mの壁溝が巡る。壁溝は東部では2条に分岐する。建て替えによるものであろう。弥生土器片が整理箱1/4程度出土した。弥生時代中期の土器も含まれるが、床面から出土した1393、壁溝から出土した1398は弥生時代後期後半から終末期に属することから、SH1005は弥生時代後期後

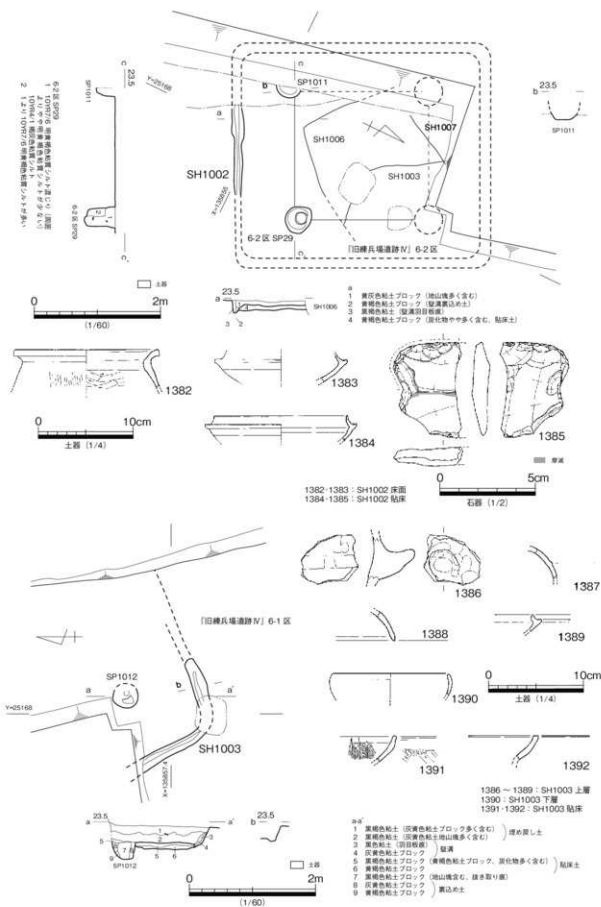
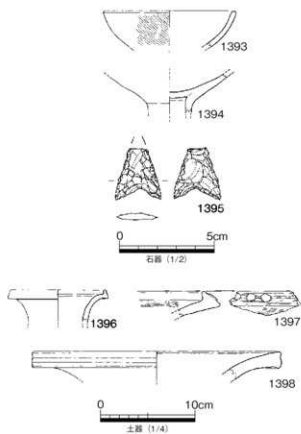
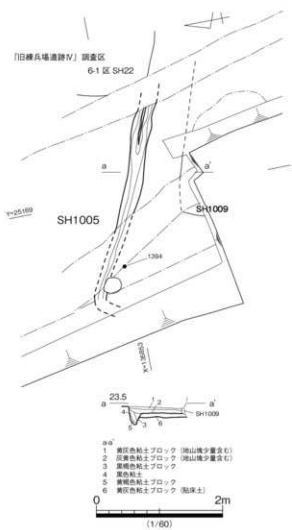


図 218 SH1002・SH1003



1393 ~ 1395 : SH1005 床面
1396 ~ 1398 : SH1005 壁溝

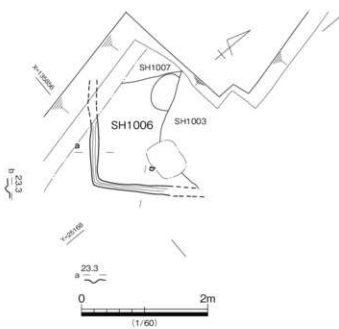


図 219 SH1005・SH1006

半から終末期のものと考えられる。

SH1006 (図 219)

1B 区の北端で検出された堅穴建物である。西部は調査区外に連続し、北部は SH1003・SH1007 と重複し、削平される。また、SH1002 と重複し、SH1002 を削平する。SH1006 は壁溝の形態から平面形は方形と推定される。壁溝は幅 0.1～0.2 m、深さ 0.05 m である。土器細片が少量出土した。須恵器はみられなかった。出土遺物から時期は特定できないが、SH1006 は 7 世紀前半から 7 世紀中葉の SH1003 よりも古く、6 世紀後半から 7 世紀初頭の SH1002 よりも新しいことから、SH1006 は 6 世紀後半から 7 世紀初頭のものと考えられる。

SH1007 (図 220)

1B 区の北西端で検出された堅穴建物である。大半は調査区外に連続するため、平面形・規模は不明である。この付近は攪乱によって削平されており、調査区の西壁も配管によって攪乱される。南部から連続する堅穴建物 SH1002 の埋土上面で検出されていることから、SH1002 よりも新しいことがわかる。残存する建物の深さは 0.2 m で、壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。床面からは少量の焼土塊が出土した。また、埋土からは土器・須恵器片が少量出土した。1399 は埋土下層から出土した須恵器蓋である。陶邑福年 TK47 型式で、6 世紀前葉のものと考えられる。出土遺物は少量であるが、SH1007 は SH1002 よりも新しいことから、6 世紀中葉から 7 世紀中葉のものと考えられる。

SH1008 (図 221)

1B 区の東端で検出された堅穴建物である。東部は第 27 次調査 6-1 区・6-2 区に連続するが、未検出であり、建物の西壁付近が検出されたにすぎない。壁は円弧状であることから、建物の平面形は円形と考えられる。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。また、6-2 区では柱穴が数個検出されており、主柱穴の可能性が高い。弥生土器片が少量出土した。これらの遺物から SH1008 は弥生時代後期中葉のものと考えられる。

SH1009 (図 221)

1B 区の南端で検出された堅穴建物の一部である。建物の北端の一部が検出されたにすぎず、大半は調査区外である。SH1009 は弥生時代終末期の堅穴建物 SH1005 と重複し、



図 220 SH1007

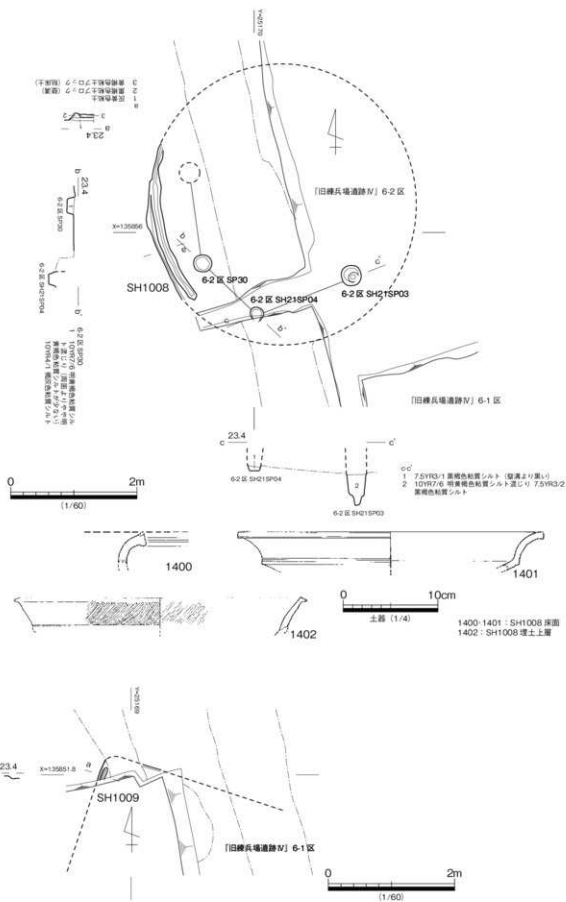


図 221 SH1008・SH1009

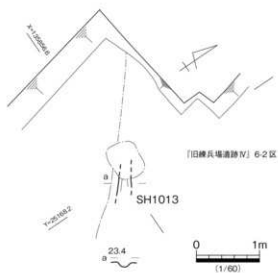
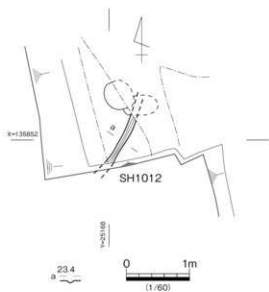
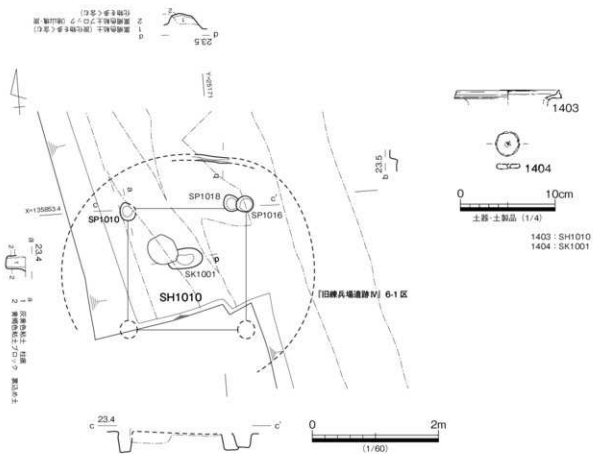


図 222 SH1010・SH1012・SH1013

SH1005の埋土上面で検出されたことから、SH1009のほうが新しいことがうかがわれる。検出された一部の壁の形状から平面形は方形と考えられる。壁沿いには幅0.1mの壁溝が巡る。土器細片が数点出土した。弥生時代終末期の竪穴建物SH1005よりは新しいが、SH1005と建物の方向がほぼ同じであることから、SH1009も弥生時代後期後半から終末期のものと考えられる。

SH1010 (図222)

1B区の南部で検出された竪穴建物である。この付近は現代の配管工事による掘削によって大きく攪乱されており、壁溝の一部が検出されただけである。壁溝の外側にはさらにベッド状遺構が存在し、建物が大きく広がる可能性もある。主柱穴はSP1010と、SP1016・SP1018のどちらかであろう。SP1010の埋土は灰黄色粘土である。これらの柱穴の南側には炉と考えられる土坑SK1001がある。SK1001の埋土には炭化物が多くみられる。遺物は土器小片が少量出土した。形態のわかる土器はいずれも弥生時代中期後半のものであり、弥生時代後期の土器はみられないことから、SH1010は弥生時代中期後半の竪穴建物の可能性が高い。

SH1012 (図222)

1B区の南西端、SH1010の貼床除去後に検出された竪穴建物の壁溝である。壁溝が弧状を描くことから、平面形は円形と推定される。壁溝の北西部が建物の内部に当たる。壁溝は幅0.1m、深さ0.1mである。遺物は出土しなかったが、SH1010よりも古いことから、弥生時代中期の建物の可能性が高い。

SH1013 (図222)

1B区の北東端で検出された竪穴建物の壁溝の一部である。北部にある竪穴建物SH1003と重複し、削平される。SH1006の壁溝と重複するが、



図223 SH1014

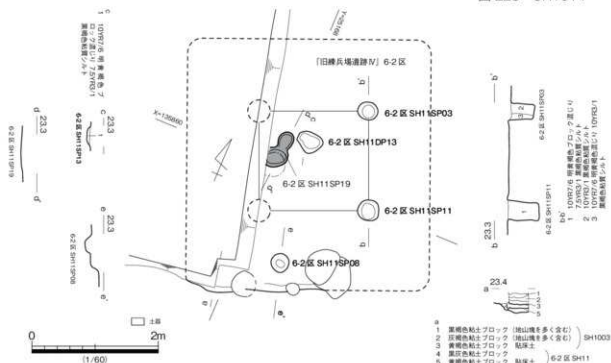


図224 SH1015

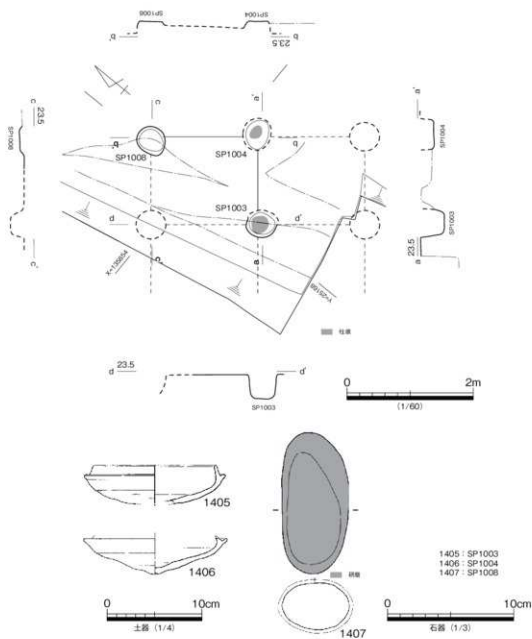


図 225 SB1002

SH1006 よりも新しい。SH1013 からは土器細片が 2 点出土した。詳細な時期は不明である。重複する SH1006 よりも古いと考えられる SH1002 から陶器編年 TK209 型式の須恵器が出土し、SH1013 よりも新しい SH1003 から TK217 型式の須恵器が出土していることから、SH1013 は 6 世紀後半から 7 世紀中葉のものと考えられる。

SH1014 (図 223)

1B 区の南東端で検出された堅穴建物の壁溝の一部である。SH1009 の床面掘り下げ後に検出された。SH1009 よりも古い。遺物は土器細片が 1 点出土しただけである。詳細な時期は不明であるが、SH1014 は弥生時代のものと考えられる。

SH1015 (図 224)

1B 区の北東隅で検出された堅穴建物の一部である。1B 区では建物北西隅が検出されたにすぎず、

大半は第28次調査6-2区になる。SH1015は第30次調査で検出されたSH1003の床面で検出された。SH1015のほうが古い。SH1015は連続する6-2区ではSH11・SH12と報告されており、6-2区SH11・SH12で出土した遺物は弥生時代終末期と古墳時代後期に属する。このうち、古墳時代後期の遺物はSH1015よりも新しいSH1003に伴う可能性が高く、弥生時代終末期の遺物がSH1015に伴う遺物と考えられる。これらのことから、SH1015は弥生時代終末期のものと考えられる。

掘立柱建物

SB1002 (図225)

1B区の南部で検出された掘立柱建物である。弥生時代終末期の竪穴建物SH1005の埋土上面で検出された。各柱穴の平面形は円形で、径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mである。埋土からは弥生土器小片・須恵器片などが出土した。1405はSP1003から出土した須恵器杯、1406はSP1003から出土した須恵器杯である。これらは陶邑須恵器編年TK43型式からTK209型式に属することから、SB1002は6世紀後半から7世紀初頭のものと考えられる。

SB1003 (図226)

1B区からはほぼ中央から第27次調査6-1区にかけて検出された掘立柱建物である。桁行2間と考えられるが、梁間是不明である。第29次調査で検出されたSP1015と第27次調査6-1区で検出された

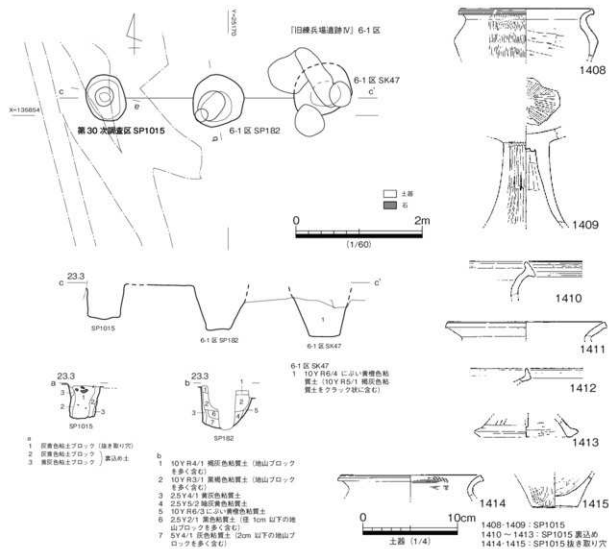


図226 SB1003

SP182・SK47で構成される。桁行は2間（3.5m）で、方向はW-Eである。柱穴の平面形は円形または楕円形で、径0.8～0.9m、深さ0.5～0.7mである。裏込め土から出土した土器の中には弥生時代中期後半のものもみられるが、埋土から出土した土器は弥生時代後期前半に属することから、SB1003は弥生時代後期前半のものと考えられる。

1B区柱穴・小穴及び遺構に伴わない遺物（図227）

1416は柱穴SP1007から出土した弥生土器鉢である。1417～1419は遺構外から出土した。1417は弥生土器壺、1418は弥生土器高杯、1419は土玉である。

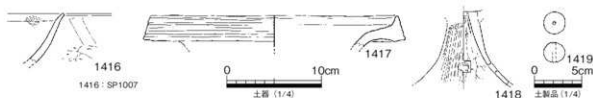


図227 1B区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物

3. 1C区

竪穴建物

SH1017（図228）

第27次調査6-2区・第28次調査7-1区に西接する調査区1C区の南端で検出された竪穴建物である。壁構の一部が検出された。6-2区に連続すると考えられるが、未検出である。埋土からは須恵器小片が1点出土したことから、SH1017は古墳時代後期のものと考えられる。

掘立柱建物

SB1004（図229）

1C区の西部で検出された掘立柱建物である。2個の柱穴が検出されたに過ぎないが、柱穴がほぼ同規模であり、柱穴間の距離が約2mであることから、掘立柱建物を構成する柱穴と考えた。SP1093・SP1019は平面形円形で、径0.6m、深さ0.2mである。各柱穴からは弥生土器小片が数片出土した。埋土の色調・土質から、SB1004は弥生時代中期のものと考えられる。

SB1005（図230）

1C区から第27次調査6-2区にかけて検出された掘立柱建物である。現在検出されている柱穴は3個



図228 SH1017

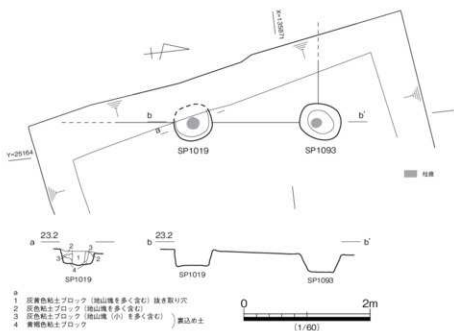


図 229 SB1004

で、桁行1間、梁間1間であるが、調査区外に連続し、桁行2間以上の可能性もある。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.8～1.0m、深さ0.6～0.7mである。各柱穴からは弥生土器が少量出土した。各柱穴から出土した土器はいずれも弥生時代中期後半に属することから、SB1005は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SB1006 (図 231)

1C区から第27次調査6-2区にかけて検出された掘立柱建物である。検出された柱穴は3個で、桁行1間、梁間1間であるが、調査区外に連続し、桁行2間以上となる可能性もある。柱穴はいずれも円形で、径0.7～1.2m、深さ0.2～0.7mである。柱穴からは弥生土器片が少量出土した。1423はSP1023から出土した弥生土器鉢である。出土遺物や埋土の色調・土質から、SB1006は弥生時代中期後半のものと考えられる。

4. 1D区

竪穴建物

SH1019 (図 232)

第27次調査7-1区の西部に位置する1D区で検出された竪穴建物である。1D区は2×1.5mの狭い調査区で、建物の南西部が検出されただけである。建物の南西壁は直線的であることから、平面形は方形と考えられる。平面規模は不明であるが、床面までの深さは0.2mである。柱穴はSP1036が検出された。土器・須恵器片が少量出土した。1424は貼床、1425は床面から出土した。1424は須恵器杯で、陶色編年TK217型式に属する。1425は製塩土器の口縁部で1424とほぼ同時期と考えられる。これらの遺物からSH1019は7世紀中葉のものと考えられる。

SH1020 (図 232)

1D区で検出された竪穴建物である。SH1019と重複する。SH1019の貼床の下で検出された。SH1019のほうが新しい。SH1020は建物の南東部と柱穴が検出されただけである。壁が直線的にのびることから、

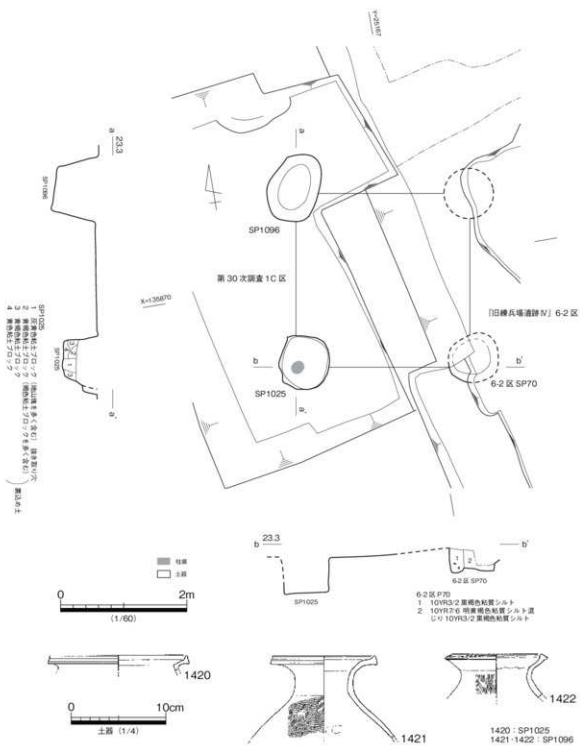


図 230 SB1005

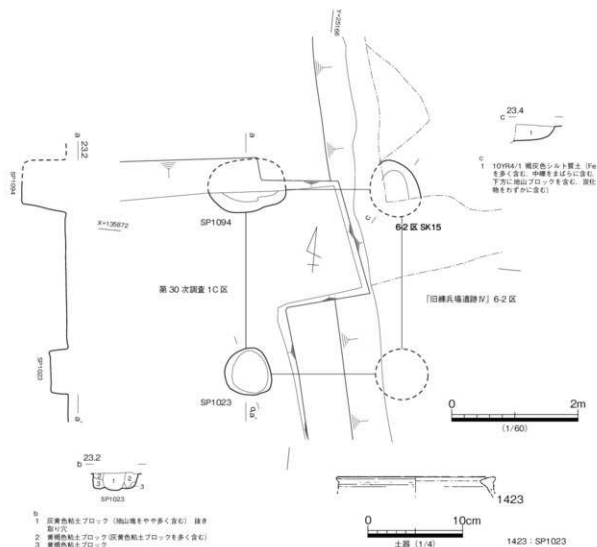


図 231 SB1006

平面形は方形と考えられる。土器片・須恵器片が少量出土した。1426は須恵器杯で、陶質須恵器扁年TK217型式に属することから、SH1020は7世紀中葉のものと考えられる。

5. 1E区

掘立柱建物

SB1007 (図 235)

1E区は第28次調査7-13・7-14区、第29次調査2・4・5区の西側に位置し、南北の長さは40mである。SB1007は1E区南部で検出された掘立柱建物の一部である。柱穴の平面形は方形または円形で、径0.6～1.0m、深さ0.3～0.5mである。各柱穴からは土器細片が数点出土しただけである。詳細な時期は不明であるが、埋土の色調・土質から弥生時代中期後半のものと考えられる。

SB1008 (図 236)

第30次調査1E区の南部から第28次調査7-14区・第29次調査5区の西端にかけて検出された掘立柱建物である。第29次調査5区ではSD18、第28次調査ではSX09の底面で柱穴が検出された。SB1008は桁行3間(5.4m)、梁間2間(3.3m)で、桁行の方向はN25°Wである。各柱穴の平面形は

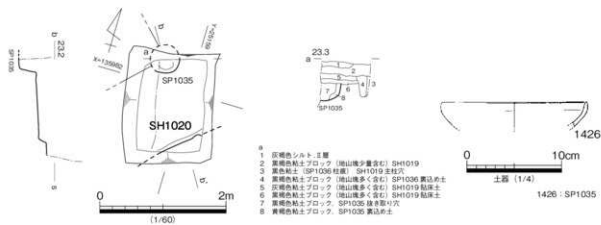
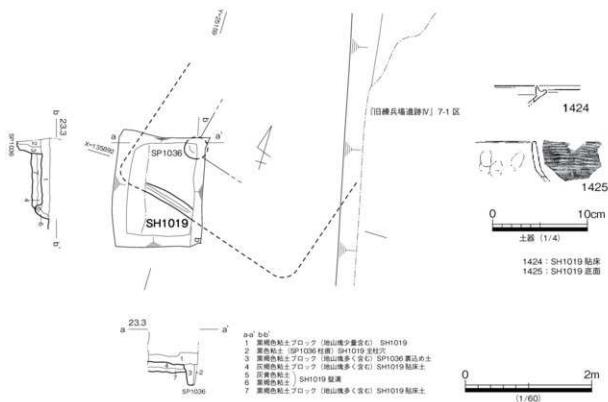


図 232 SH1019・SH1020

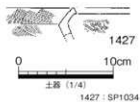
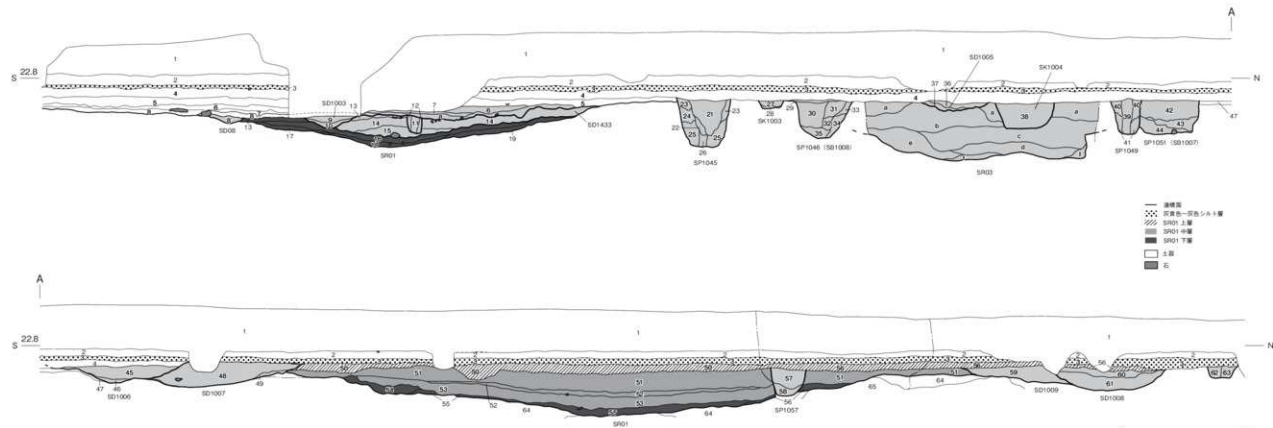


図 233 1D区柱穴・小穴出土遺物



1E区調査区西壁断面

- 1 盛土
- 2 灰色シルト (沼澤貯水、主要)
- 3 灰褐色シルト (中層貯水、主要)
- 4 黄褐色粘土
- 5 灰褐色粘土
- 6 灰色シルト
- 7 灰褐色シルト (クミナ層)
- 8 灰褐色砂 (沼澤多く盛土、主要層) 灰褐色粘土ブロック多く含む
- 9 灰褐色シルト (沼澤) 沼澤下層(沼澤、クミナ層)
- 10 灰褐色粘土
- 11 黄褐色粘土
- 12 黄褐色粘土ブロック
- 13 黄褐色粘土
- 14 褐色粘土 (下層沼澤)
- 15 褐色粘土 (下層沼澤)
- 16 黄褐色粘土 (黄褐色粘土で厚く)
- 17 灰褐色粘土 (沼澤粘土、流入土、遺物少ない)
- 18 灰褐色粘土 (小~中層貯水含む)
- 19 灰褐色粘土 (沼澤粘土含む、流入土、遺物少ない)
- 20 灰褐色粘土ブロック
- 21 灰褐色粘土ブロック
- 22 灰褐色粘土ブロック (沼澤貯水)

- 23 黄褐色粘土ブロック
- 24 黄褐色粘土ブロック
- 25 灰褐色粘土ブロック (沼澤粘土含む)
- 26 灰褐色粘土 (柱)
- 27 黄褐色粘土 (灰化物や砂多く含む)
- 28 黄褐色粘土ブロック (沼澤貯水多く含む)
- 29 灰褐色粘土
- 30 黄褐色粘土ブロック (沼澤貯水)
- 31 灰褐色粘土ブロック (沼澤粘土含む)
- 32 灰褐色粘土ブロック
- 33 黄褐色粘土ブロック
- 34 灰褐色粘土ブロック (沼澤粘土含む)
- 35 灰褐色シルト
- 36 灰褐色粘土ブロック (沼澤粘土含む)
- 37 灰褐色シルト
- 38 黄褐色粘土ブロック
- 39 灰褐色粘土ブロック
- 40 黄褐色粘土ブロック (沼澤粘土含む)
- 41 黄褐色粘土ブロック
- 42 黄褐色粘土ブロック (灰褐色粘土含む)
- 43 灰褐色シルト (黄褐色粘土ブロック多く含む)
- 44 灰褐色シルト (灰褐色粘土ブロック多く含む)

- 45 灰褐色シルト
- 46 灰褐色シルト (黄褐色粘土ブロック多く含む)
- 47 黄褐色粘土ブロック
- 48 黄褐色粘土ブロック (小層土層貯水含む)
- 49 灰褐色粘土
- 50 黄褐色粘土ブロック (土層貯水層貯水含む)
- 51 黄褐色粘土 (土層貯水層貯水含む)
- 52 黄褐色粘土 (沼澤貯水層貯水含む) 土層貯水層貯水
- 53 黄褐色粘土 (中層貯水層貯水、土層貯水層貯水)
- 54 黄褐色粘土 (黄褐色粘土ブロックや砂多く含む) 遺物少ない、流入土
- 55 黄褐色粘土 (黄褐色粘土ブロックや砂多く含む) 遺物少ない、流入土
- 56 黄褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック多く含む)
- 57 黄褐色粘土
- 58 黄褐色粘土ブロック
- 59 黄褐色粘土
- 60 黄褐色粘土ブロック
- 61 灰褐色シルト
- 62 黄褐色粘土ブロック (沼澤粘土含む)
- 63 黄褐色粘土ブロック (沼澤粘土含む)
- 64 黄褐色粘土 (沼澤粘土含む)
- 65 灰褐色砂 (沼澤層、主要)

SR03

- 39 黄褐色粘土
- 6 灰褐色砂 (クミナ層)
- 6 灰褐色砂 (中層貯水層貯水、クミナ層)
- 5 灰褐色砂 (小~中層貯水層貯水) 縄文土層出土
- 4 灰褐色砂 (クミナ層)
- 3 黄褐色砂 (F土層、クミナ層)

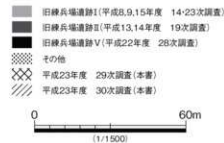
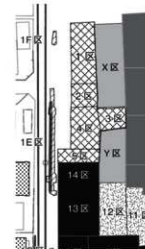
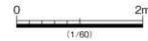


図 234 1E区西壁土層堆積図

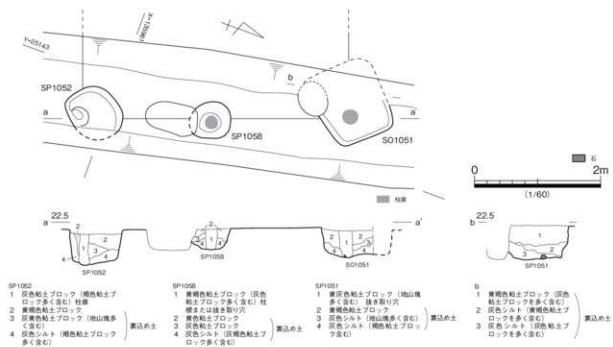


図 235 SB1007

隅丸方形またはややいびつな隅丸方形で、長軸 0.8～0.9 m、深さ 0.4～0.5 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。1430 は SP1046 から出土した須恵器杯で、1431 は SP1043 から出土した土師器甕である。これらの遺物から SB1008 は 10 世紀のものと考えられる。

SB1009 (図 237)

第 30 次調査 1E 区から第 28 次調査 7-13 区にかけて検出された掘立柱建物である。掘立柱建物を構成する柱穴は 5 個検出されているだけであるが、桁行 4 間 (7.5 m)、梁間 2 間 (5.0 m)、桁行の方向は N15° W と推定される。各柱穴の平面形はややいびつな円形またはややいびつな方形で、長軸 0.5～0.8 m、深さ 0.3～0.5 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。1432 は SP1038 から出土した須恵器甕で、古墳時代後期のものであるが、SB1009 は条里地割にほぼ平行し、この周辺では条里地割に平行する掘立柱建物はいずれも 9 世紀以降であることから、SB1009 は 9 世紀から 10 世紀のものと考えられる。

土坑

SK1003 (図 238)

1E 区の南部で検出された土坑である。西部は調査区外に連続するが、平面形隅丸長方形で、長軸 0.3 m 以上、短軸 0.4 m、深さ 0.1 m である。底面は平坦で、埋土には多量の炭化物が含まれており、炬と考えられる。竪穴建物のほぼ中央に位置する土坑と考えられるが、周辺では建物の壁や壁溝は未検出である。SK1003 からは少量の土器片が出土した。これらは弥生時代終末から古墳時代前期に属することから、SK1003 も同時期のものと考えられる。

溝

SD1003 (図 239)

1E 区の南部で検出された溝である。東部は第 28 次調査 7-14 区で検出された SX1409、さらに第 29 次調査 SD18 に連続し、西部は調査区外に連続する。幅 1.0 m、検出面からの深さは 0.1 m である。遺

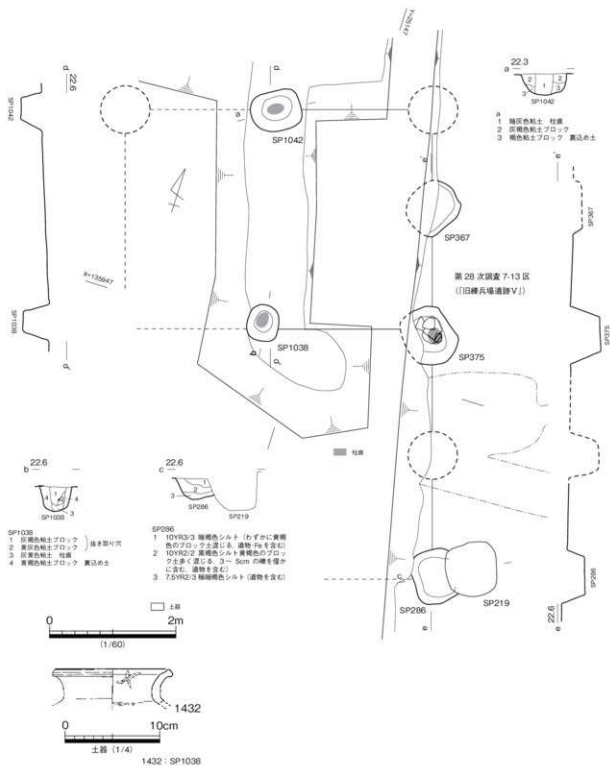


図 237 SB1009

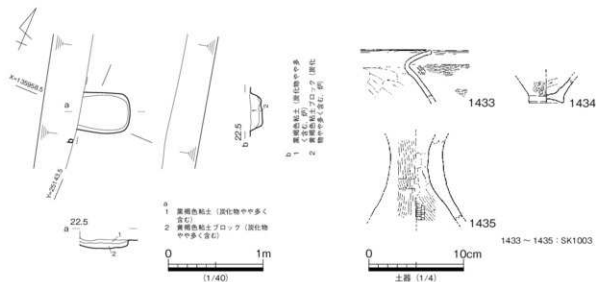


図 238 SK1003

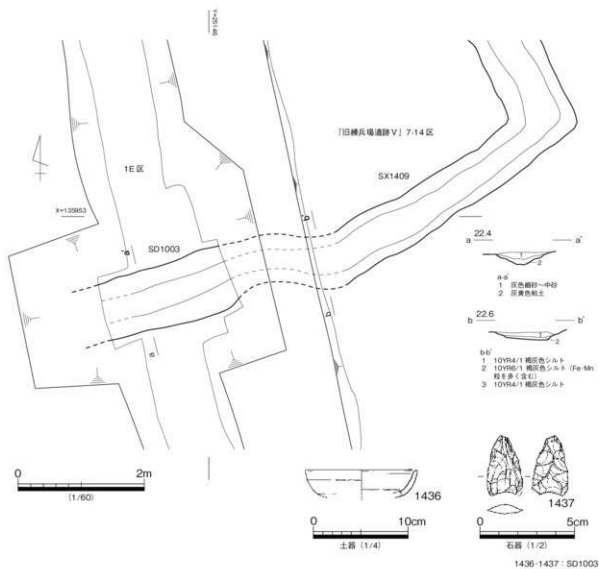


図 239 SD1003

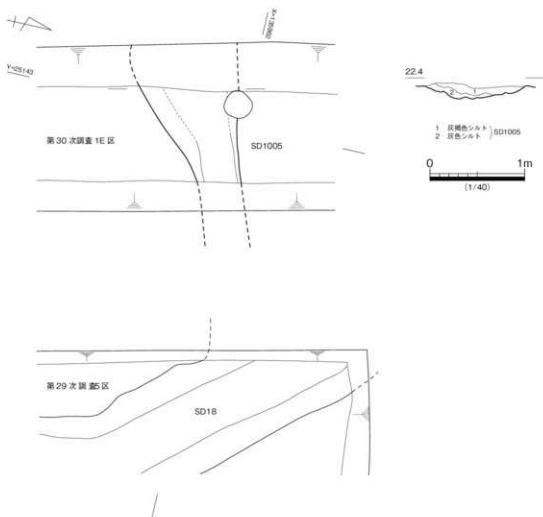


図 240 SD1005

物は土器片・須恵器片などが少量出土した。1436は須恵器杯で、8世紀に属するが、連続する第28次調査・第29次調査の状況からSD1003は10世紀頃のものと考えられる。

SD1005 (図 240)

1E区の南部で検出された溝である。東西方向に走る。西部は調査区外に連続するが、東部は第29次調査5区SD18に連続する可能性が高い。SD1005の幅は0.5～1.0m、深さ0.2mである。遺物は須恵器片・土器片が少量出土した。SD18に連続することから、10世紀頃のものと考えられる。

SD1006 (図 241)

1E区のはほぼ中央部で検出された溝である。東西方向に走る。東部は第29次調査SD19A・SD19Bに連続する可能性が高い。SD1006は幅0.7m、深さ0.3mである。土器・須恵器などが整理箱1/4程度出土した。土器小片が多く、弥生土器を多く含み、羽釜の脚部などの中世の土器はみられない。SD19A・SD19Bは7世紀から8世紀後半と考えられることから、SD1006も同時期のものと考えられる。

SD1007 (図 241)

1E区のはほぼ中央部で検出された溝である。南部は古代の溝SD1006と重複し、削平される。SD1006のほうが新しい。SD1007はやや湾曲しながら南北に走る。幅0.6～0.8m、深さ0.4mである。土器片などが整理箱1箱程度出土した。形態のわかるものは少ない。1438は弥生時代後期中葉に属すること

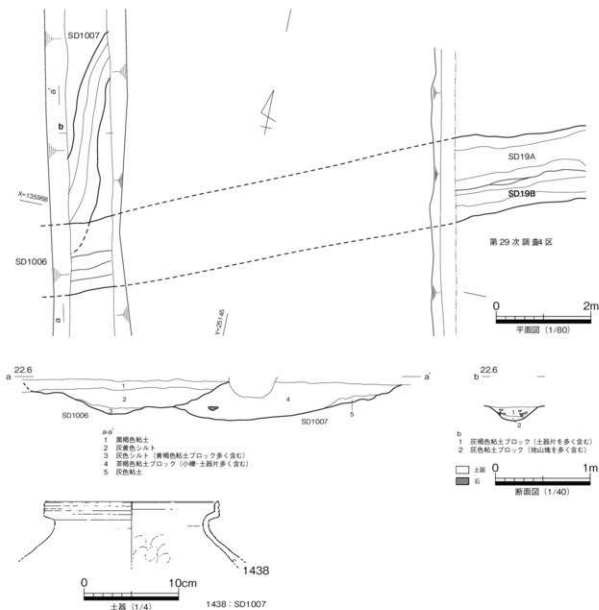


図 241 SD1006・SD1007

から、SD1007は同時期のものと考えられる。

SD1008 (図 242)

1E区の北部で検出された溝である。東西に走る。東部は第29次調査SD65に連続する可能性が高い。SD1008は幅0.7m、深さ0.4mで、土器・須恵器片が少量出土した。土器片は小片で、詳細な時期は不明である。埋土の土質・色調から中世のものと考えられる。

SD1009 (図 242)

SD1008と重複する遺構である。SD1009のほうが新しい。須恵器片が1点出土したが、埋土の土質・色調から中世のものと考えられる。

SD1433 (図 243)

1E区の南部から第28次調査7-14区で検出された溝である。1E区では幅3.2m、深さ0.2mである。7-14区SD1433(図175)と同様底面には径10cm大の礫が多くみられた。土器・須恵器片が少量出土した。

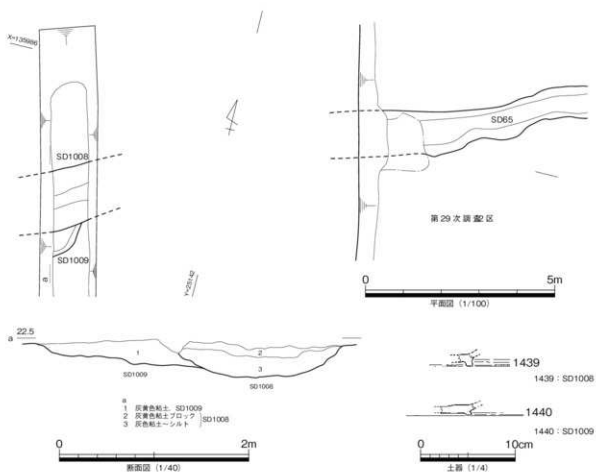


図242 SD1008・SD1009

7-14区では7世紀前半から中葉の遺物が出土していることから、同時期のものと考えられる。

SD08 (図243)

1E区の南部で検出された溝である。第28次調査7-14区SD08から連続する溝である。幅0.8～0.9m、深さ0.2mである。7-14区では7世紀前半から中葉の遺物が出土していることから、同時期のものと考えられる。

1E区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物 (図244)

1441～1443はSP1045から、1444・1445はSP1054から出土した。1446は遺構に伴わない遺物で、土器器杯である。口径23.6cmと大型である。口縁部内面には段があり、内外面に赤色顔料が塗布される。7-11区SK01から出土した307と類似することから、7-11区SK01のようなこの付近の土器焼成土坑で焼成された可能性が高い。

河川

SR01 (図245～248)

『旧練兵場遺跡Ⅲ』・『旧練兵場遺跡Ⅳ』・『旧練兵場世紀Ⅱ』で報告された調査区から第28次調査7-13・14区を通り、1E区に連続する河川である。SR01は1E区の南部を東から西に向かって走り、平成11年度に善通寺市教育委員会が調査した第17次調査区の北東隅を通り、蛇行して1E区の北部に入る。SR01の南部は7世紀の溝SD08・SD1433の下部で検出された。SR01の南部は幅6.0m、深さ0.5mである。北部は幅9.4m、深さ0.6mである。1447は南部のSR01中層下位から出土した。1464～1473は北部

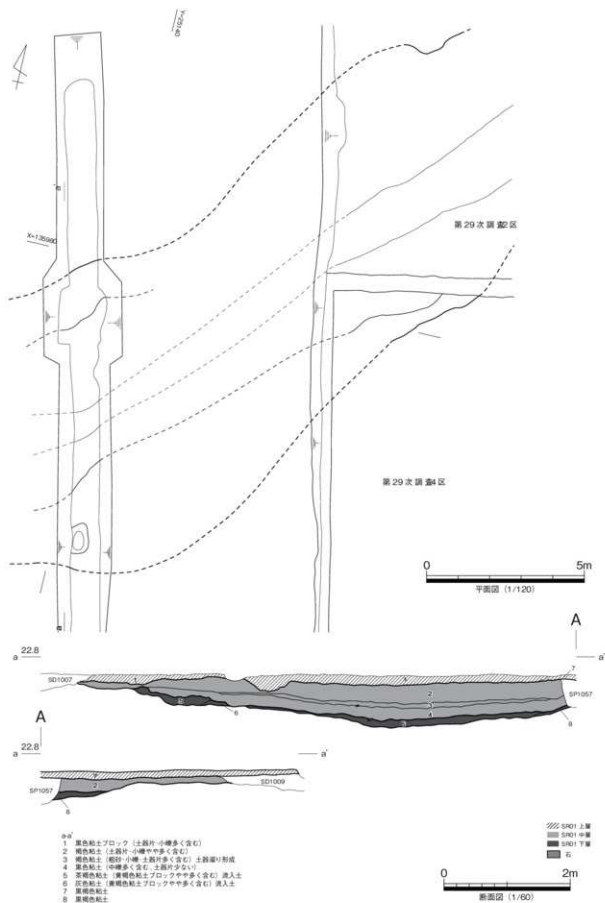


図 246 SR01 1E 区北部

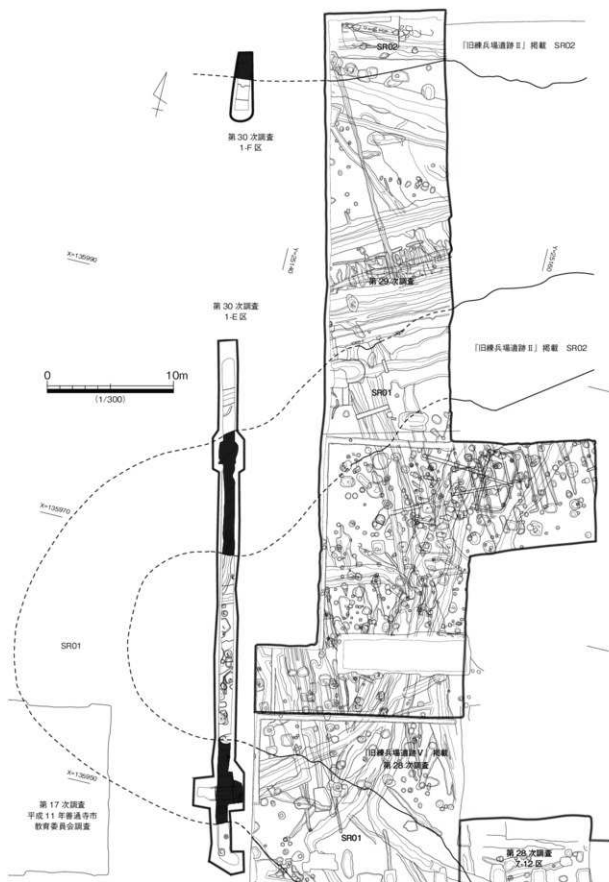


図 247 SR01 (1)

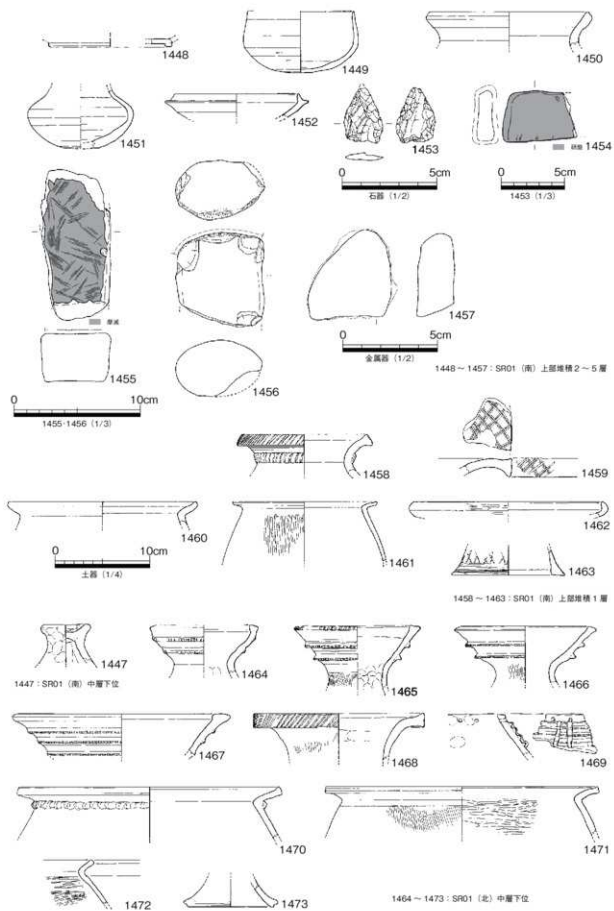


図 248 SR01 (2)

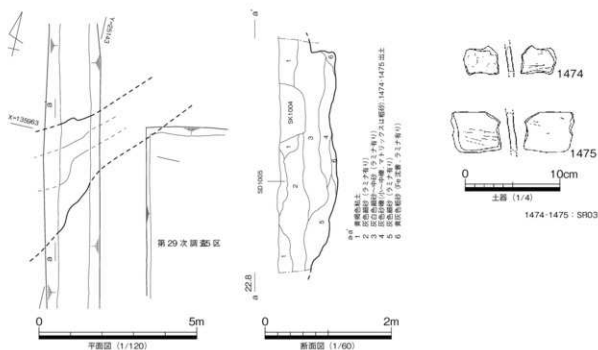


図 249 SR03

の中層下位から出土した遺物である。いずれも弥生時代中期後半に属する。

SR01 上部堆積土層出土遺物 (図 248)

1448～1457はSR01の上部に堆積する1～5層(図249)から出土した遺物である。7-14区北西隅ではSX1409を境に北西部は一段下がる。これは古代の耕作に伴うもので、SR01の上部に堆積する1～5層は7-14区から連続する古代の耕作土層である。これらの層からは弥生時代土器や須恵器、石器が出土した。1448は8世紀、1449～1452は7世紀の須恵器である。1456は大型蛤刃石斧の基部、1457は鉄製品で、用途不明である。1458～1462は1層から出土した。いずれも弥生時代中期後半の土器である。

SR03 (図 249)

1E区のはほぼ中央で検出された河川である。弥生時代の遺構の基盤層となるIV層(黄灰色粘土)の中で検出された。埋土中位の灰色砂礫からは縄文土器(1474・1475)が出土した。いずれも小片である。詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期から晩期のものと考えられる。

6. 1F区 (図 247)

普通寺病院統合事業に伴う調査区の中で最北西部に位置する調査区である。調査区中央は配管による擾乱があり、その北部では河川SR01の南岸が検出された。SR01は第29次調査1区から西に向かって延びてきたものである。

7. 1G区

竪穴建物

SH1026 (図 250)

第28次調査7-9区の西側に位置する1G区の南西端で検出された竪穴建物の一部である。建物の大部

分は調査区の南西側に連続する。壁溝の一部が検出されただけで、土器細片が2点出土した。建物の時期は不明である。

SH1028 (図 250)

1G区で検出された竪穴建物の一部である。建物の南部は6～7世紀の竪穴建物79区SH12と重複し、削平される。壁溝の一部を検出したが、壁溝が直線状であることから、平面形は方形と推定される。土器細片が1点出土しただけである。建物の詳細な時期は不明である。

SH1029 (図 250)

1G区で検出された竪穴建物の一部である。建物の大部分は調査区の北東側に連続する。なお、2m東に位置する79区では未検出である。SH1029からは遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

8. 1H区

竪穴建物

7-9区SH12 (図 252)

第28次調査7-2区・7-9区の西側の調査区1H区の北部、1G区南部、第28次調査7-9区西端にかけて検出された竪穴建物である。1G区ではSH1024、1H区ではSH1027と遺構名を付けて調査を行った竪穴建物である。『旧練兵場遺跡V』では7-9区SH12と報告したことから、ここでは同名で報告する。平面形は隅丸方形で、1辺4.7～4.8m、床面までの深さは0.1mである。遺物は少量出土した。1476・1477は1G区の壁溝、1478は1H区の壁溝から出土した。1476は土師器鉢で古墳時代後期のものである。1477は弥生土器壺の口縁部で、弥生時代中期後半に属する。1478は刀子と考えられる。片方の端部は骨に覆われている。7-9区SH12は『旧練兵場遺跡V』で報告したとおり、6世紀から7世紀のものと考えられる。

SH1022 (図 253)

1H区の南部で検出された竪穴建物である。東部は東側に位置する第28次調査7-2区に連続すると考えられるが、7-2区では未検出である。平面形は隅丸方形で、南北長3.2m、床面までの深さは0.1mである。柱穴はSP1062・SP1083のほか2個を含めた合計4個で構成すると推定される。SP1062・SP1083は平面形円形で、径0.4m、深さ0.3mである。遺物は少量出土した。1479～1483は床面、1484・1485は壁溝、1486はSP1083から出土した。1479は須恵器蓋、1480～1482は須恵器杯、1483はスクレイパー、1484は弥生土器鉢、1485は弥生土器底部である。1486はふいごの羽口の一部で、外面は灰が溶着し、ガラス化している。弥生土器も含まれるが、須恵器はいずれも陶器須恵器編年TK217型式に属することから、SH1022は7世紀前半から中葉のものと考えられる。

SH1023 (図 253)

1H区の北部で検出された竪穴建物の一部である。壁溝の一部と竈が検出された。東部は第28次調査7-9区に連続すると考えられるが、7-9区では未検出である。竈は北壁に設置されている。竈内からは1487が出土した。1487は弥生土器の底部である。建物の時期を示す遺物は見当たらないが、竈があることから、6世紀から7世紀のものと考えられる。

SH1025 (図 254)

1H区の北東端で検出された竪穴建物の一部である。東部は第28次調査7-9区に連続すると考えられるが、7-9区では未検出である。遺物は出土しておらず、SH1025の時期は不明である。

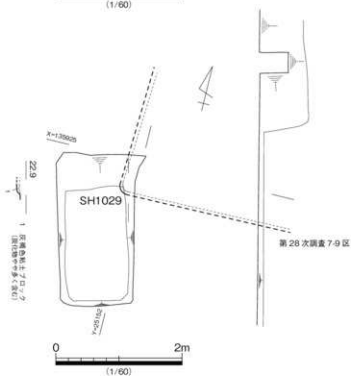
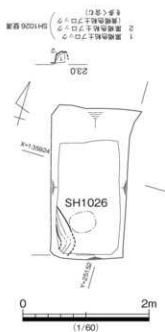
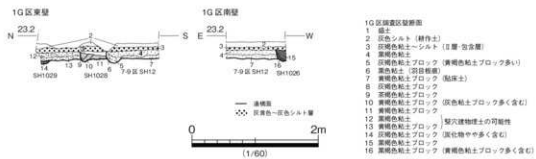
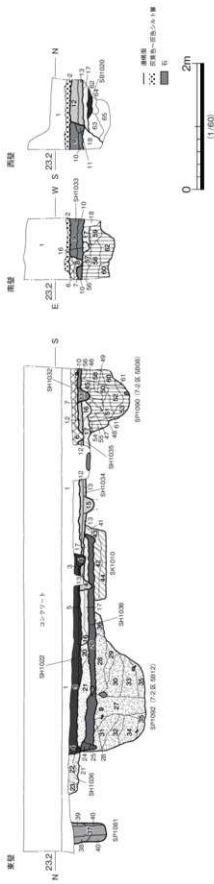


図250 1G区土層堆積図・SH1026・SH1028・SH1029



- 14 調査区境界線
- 1 黄土
 - 2 黒色シルト 黄土層下部のシルト、黄土層上部の砂質シルト、黄土層上部の砂質シルト
 - 3 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 4 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 5 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 6 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 7 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 8 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 9 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 10 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 11 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 12 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 13 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 14 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 15 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 16 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 17 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 18 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 19 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 20 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 21 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 22 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 23 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 24 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 25 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 26 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 27 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 28 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 29 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 30 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 31 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 32 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 33 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 34 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 35 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 36 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 37 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 38 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 39 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 40 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 41 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 42 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 43 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 44 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 45 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 46 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 47 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 48 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 49 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 50 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 51 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 52 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 53 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 54 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 55 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 56 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 57 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 58 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 59 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 60 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 61 黒色シルト SH-1022 砂質シルト
 - 62 黒色シルト SH-1022 砂質シルト

図 251 I H 区土層堆積図

SH1030 (図 254)

1H 区の北部で検出された堅穴建物の一部である。7-9 区 SH12・SH1023 と重複し、削平されるため、北部は不明である。建物の東部は第 28 次調査 7-9 区に連続すると考えられるが、7-9 区では未検出である。建物の西壁沿いには壁溝が検出された。幅 0.1 m、深さ 0.05 m である。貼床から弥生土器と考えられる土器細片が 2 点出土した。出土遺物は少ないが、弥生時代後期のものと考えられる。

SH1031 (図 254)

1H 区の北部で検出された堅穴建物である。建物の壁は検出されていないが、SK1007 の埋土に焼土や炭化物が含まれることから SK1007 を炉、周辺の柱穴を主柱穴と考え、建物を想定した。SK1007 の平面形はいびつな楕円形で、長軸 0.3 m 以上、短軸 0.3 m、深さ 0.1 m である。主柱穴である SP1075 の平面形は円形で、径 0.4 m、深さ 0.3 m である。SP1075 は弥生時代中期の柱穴 SP1064 と重複し、土層の堆積状況から SP1075 のほうが新しいことがうかがわれる。出土遺物は少量で、SK1075 からは土器細片が 5 点、SK1007 からは土器細片が 2 点出土しただけである。詳細な時期は不明であるが、弥生時代の堅穴建物の可能性が高い。

SH1032 (図 255)

1H 区の南部で検出された堅穴建物である。建物の北西壁が検出されただけである。建物の東部は第 28 次調査 7-2 区に連続すると考えられるが、7-2 区では未検出である。建物の平面形は方形で、床面までの深さは 0.1 m である。土器片・須恵器片が少量出土した。詳細な時期がわかるものはみられない。SH1032 は 6 世紀後半から 7 世紀中葉の堅穴建物 SH1033 と重複し、SH1033 よりも新しいことから、6 世紀後半から 7 世紀中葉の堅穴建物と考えられる。

SH1033 (図 255)

1H 区の南端で検出された堅穴建物である。北壁の一部が検出されただけである。SH1032 と重複し、削平される。SH1032 ほうが新しい。SH1033 東部は第 28 次調査 7-2 区に連続すると考えられるが、7-2 区では未検出である。土器・須恵器片が少量出土した。1489 は床面直上から出土した須恵器蓋で、陶器編年 TK43 型式に属するが、このほかに 6 世紀後半の須恵器が含まれていることから、SH1033 は 6 世紀後半から 7 世紀中葉のものと考えられる。

SH1034 (図 256・257)

1H 区の南部で検出された堅穴建物である。南部は 6 世紀後半から 7 世紀中葉の堅穴建物 SH1032・SH1033 と重複し、北部は 7 世紀前半から中葉の堅穴建物 SH1022 と重複し、削平される。SH1034 はこれらの建物より古い。SH1034 は北壁の一部が検出されただけで、大部分は調査区外に連続する。東部は第 28 次調査 7-2 区に連続する。この部分には「旧練兵場遺跡 V」で弥生時代の堅穴建物として報告した 7-2 区 SX04 がある。SX04 は調査区の端に位置し、平面形も不明確であった。本調査区整理時に SX04 の床面の高さを検討したところ、南部よりも北部が高く、北部の床面の標高は SH1034 と近似していた。SH1034 がこの付近に連続することを考慮すると、SX04 の北部は SH1034 に連続し、SX04 の南部は別遺構が重複していた可能性が高い。なお、遺物は須恵器・土器・サヌカイト片や焼土塊が少量出土した。1490～1492 は埋土下層、1493 は貼床から出土した。1490・1491 は陶器編年 TK10 型式から TK43 型式で、6 世紀後半のものであるが、1493 は 6 世紀後半から 7 世紀中葉までの間に属する。これらの遺物から SH1034 は 6 世紀後半から 7 世紀中葉のものと考えられる。

SH1035 (図 256・257)

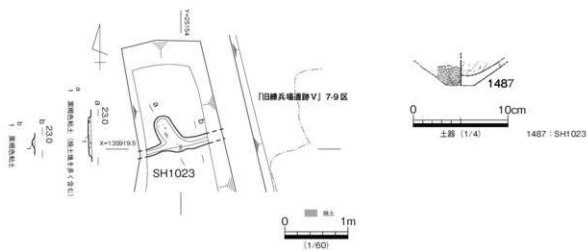
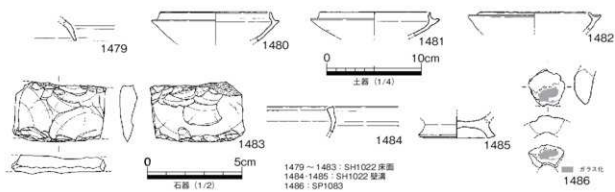
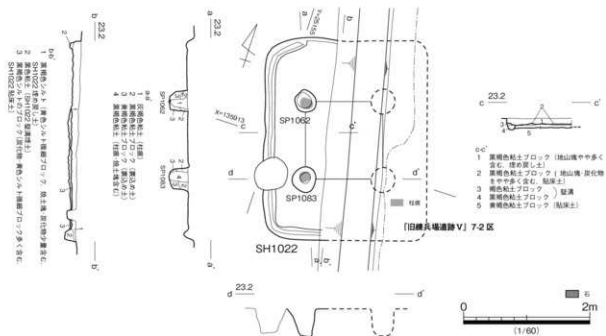


図 253 SH0122・SH1023

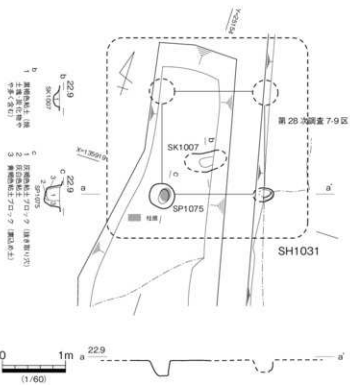
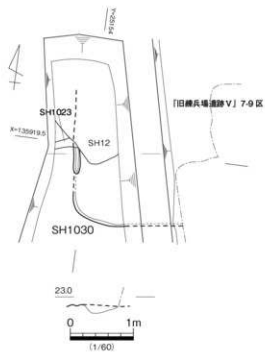
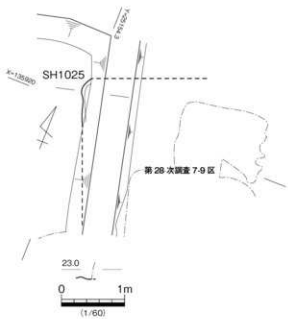


図 254 SH1025・SH1030・SH1031

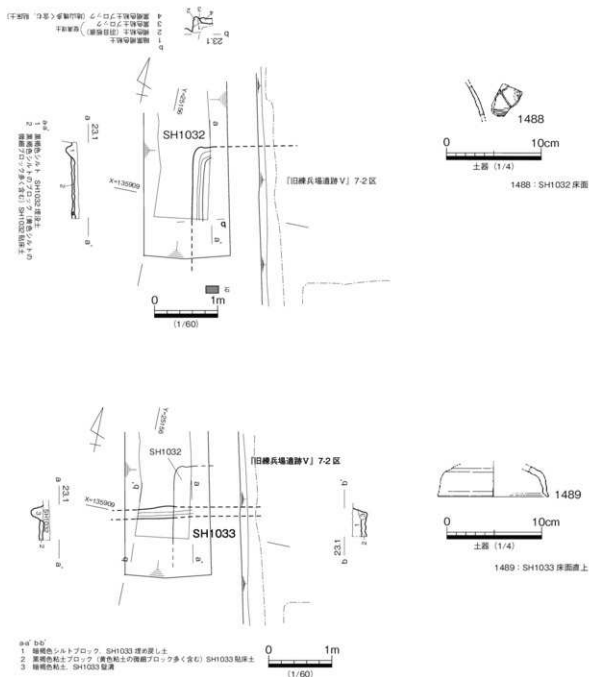


図 255 SH1032・SH1033

1H区南部で検出された竪穴建物である。6世紀後半から7世紀中葉の竪穴建物SH1022・SH1032・SH1033・SH1034と重複し、削平される。SH1035は北東壁の一部と南東壁の一部が検出された。東部は第28次調査7-2区に連続すると考えられるが、未検出である。残存部分から平面形は方形と推定される。壁沿いには幅0.2m、深さ0.15mの壁溝が巡る。遺物は土器・須恵器が少量出土した。1494・1495は埋土上層、1496～1498・1501は床面直上、1499・1500は貼床から出土した。これらの須恵器は陶邑福年TK10型式とTK217型式に属する。SH1035の上部には4種の竪穴建物が重複する。そのため、TK217型式の須恵器は上部に存在する竪穴建物の遺物が混在した可能性が高く、TK10型式の須恵器がSH1035に伴うものと考えられる。これらのことから、SH1035は6世紀中葉のものと考えられる。

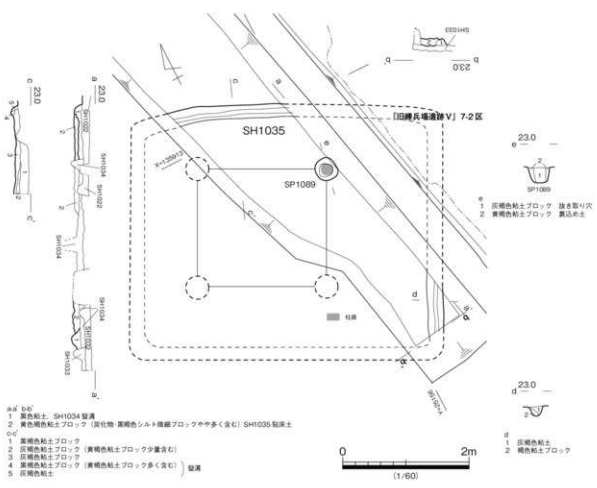
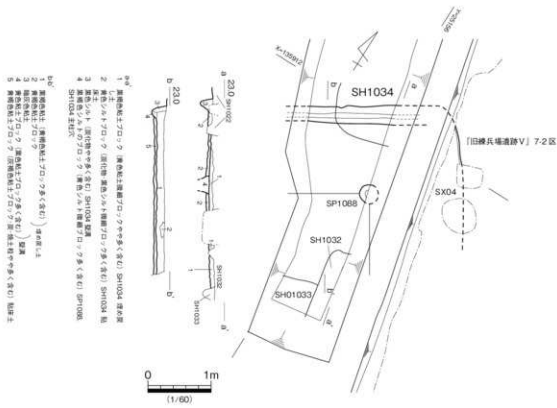


図 256 SH1034・SH1035 (1)

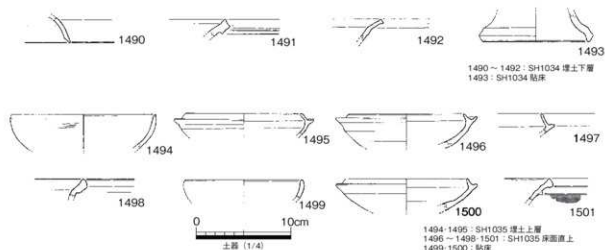


図 257 SH1034・SH1035 (2)

SH1036 (図 258)

1H 区南部で検出された竪穴建物である。6 世紀から 7 世紀の竪穴建物 SH1022・SH1032・SH1034・SH1035 が重複し、削平される。これらの竪穴建物のほうが新しい。SH1036 は北壁と柱穴の一部が検出されただけである。北壁は円弧状であることから、SH1036 の平面形は円形と考えられる。土器・サヌカイト片が少量出土した。1503 は貼床、1504 は SH1036 の炉 SK1008 から出土した。北壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.1 m の壁溝が巡る。出土遺物はいずれも弥生時代中期に属するが、弥生時代中期後半の掘立柱建物 7-2 区 SB12 の柱穴 SP1092 と重複しており、SP1092 の遺物が SH1036 に混入した可能性がある。SH1036 は SB12 よりも新しいことから、弥生時代後期の建物の可能性が高い。

SH1037 (図 259)

1H 区の南部で検出された竪穴建物である。6 世紀から 7 世紀の竪穴建物 SH1022、弥生時代後期の竪穴建物 SH1036 の下部、弥生時代の竪穴建物 SH1038 の埋土上面で検出された。壁溝の一部しか検出されていないが、壁溝の南端を南壁とする竪穴建物と考えられる。弥生時代の壁溝から土器細片が 7 点出土した。弥生時代の竪穴建物 SH1038 よりも新しいことから、弥生時代後期前半以後と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SH1038 (図 259)

1H 区の南部で検出された竪穴建物である。建物の東部は第 28 次調査 7-2 区に連続するが、7-2 区では未検出である。西壁は円弧状であることから、平面形は円形と考えられる。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.1 m の壁溝が巡る。遺物はベッド状遺構盛土や貼床中から土器片が少量出土した。いずれも弥生時代中期の土器である。図化していないが、床面から弥生時代後期前半の弥生土器裏底部が出土していることから、SH1038 は同時期のものと考えられる。

掘立柱建物

SB1011 (図 260)

1H 区北部から第 28 次調査 7-9 区で検出された掘立柱建物の一部である。桁行の 1 辺を検出しただけであるが、桁行 2 間の建物と考えられる。桁行は 1H 区で検出された SP1064 と 7-9 区 SP272・SP58 で構成される。いずれも平面形は円形で、径 0.8～1.0 m である。SP58 は深さ 0.1 m と浅いが、未完掘の可能性が高い。土器片や石器が少量出土した。1510・1511 は SP1064 から出土した。1510 は弥生時代

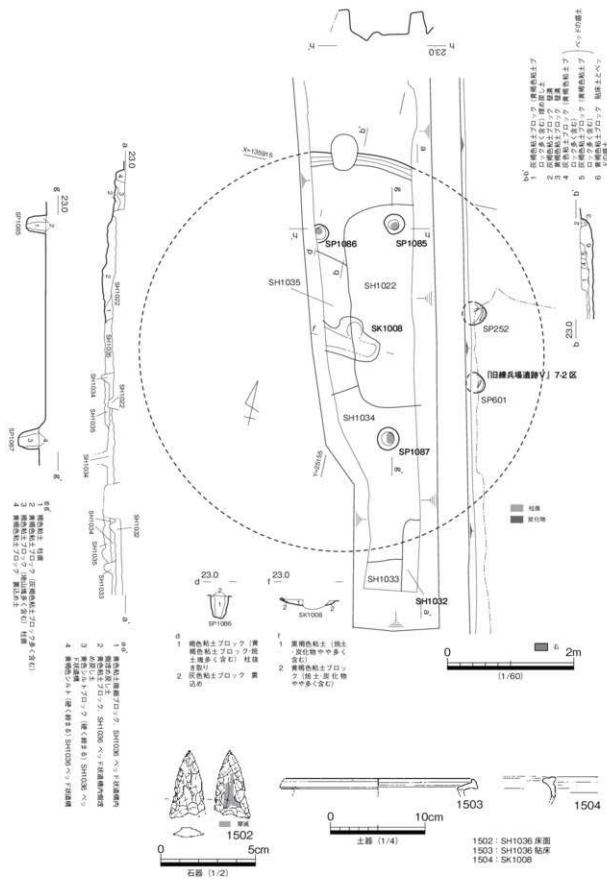
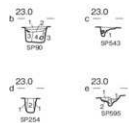
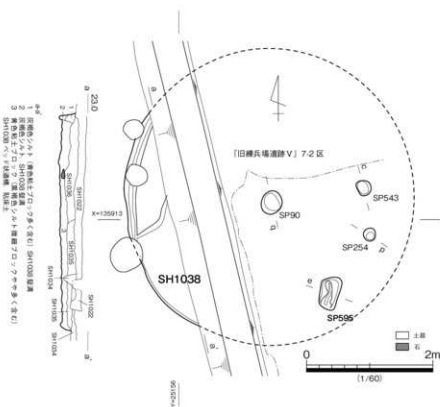
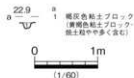
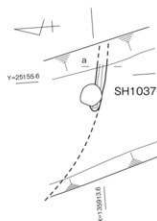
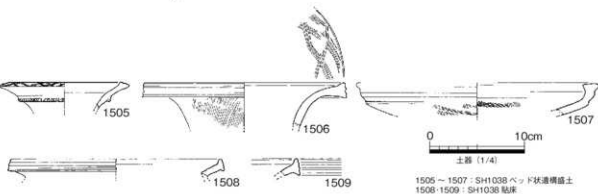


図 258 SH1036

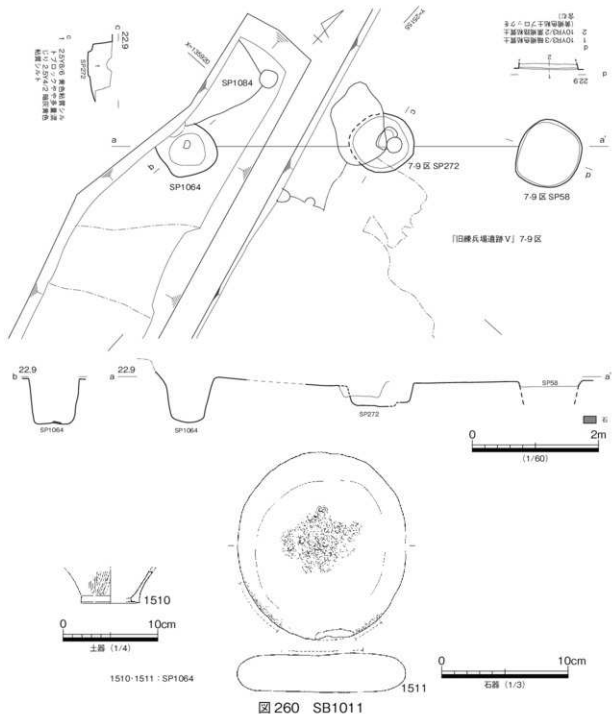


- b
- 10YR4/1 褐色粘土 (粘質土)
 - 10YR6/1 褐色粘土 (粘質土、炭化物ブロックを含む)
 - 10YR3/2 灰黄褐色粘土 (粘質土)
 - 10YR3/3 暗褐色粘土
- c
- 10YR6/2 灰黄褐色粘土
- d
- 10YR4/1 褐色粘質土
 - 10YR3/2 黄褐色粘質土
- e
- 10YR3/1 黄褐色粘質土 (炭化物を含む)
 - 10YR4/1 褐色粘質土
 - 10YR3/2 黄褐色粘質土



1505 - 1507: SH1038 ベッド状遺構土
1508 - 1509: SH1038 粘床

図 259 SH1037・SH1038



中期後半に属する。また、SP1064 は弥生時代中期後半の掘立柱建物の柱穴 SP1084 と重複し、SP1064 のほうが古いことから SB1011 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

7-2区 SB08 (図 261 ~ 263)

1H 区の南端から 7-2 区北西部にかけて検出された掘立柱建物跡である。西部は調査区外に連続し、不明であるが、桁行 2 間以上 (5.8 m 以上)、梁間 1 間 (5.2 m) である。桁行の方向は N84° E である。北側の桁行は布掘りで、柱穴 SP624・SP625 は溝 SD22 の上面で検出された。SD22 は幅 1.0 ~ 1.3 m、深さ 0.5 m である。北部の桁行の柱は溝 SD22 の底面に凹みを掘ったあとで柱を設置し、その後、溝を埋め戻したことがうかがわれる。柱の抜き取り跡の土層の幅は 0.25 ~ 0.3 m である。南側の桁行には

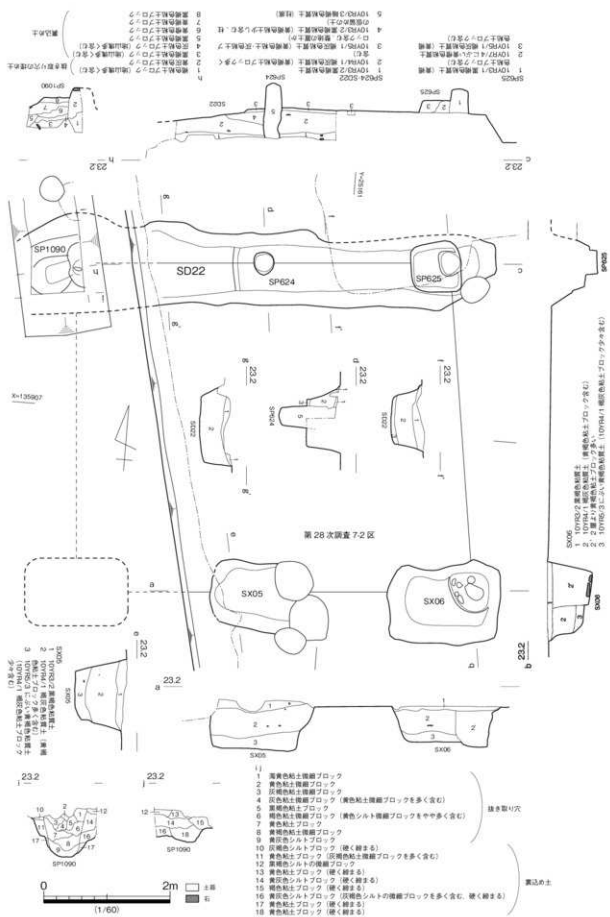


図 261 7-2 区 SB08 (1)

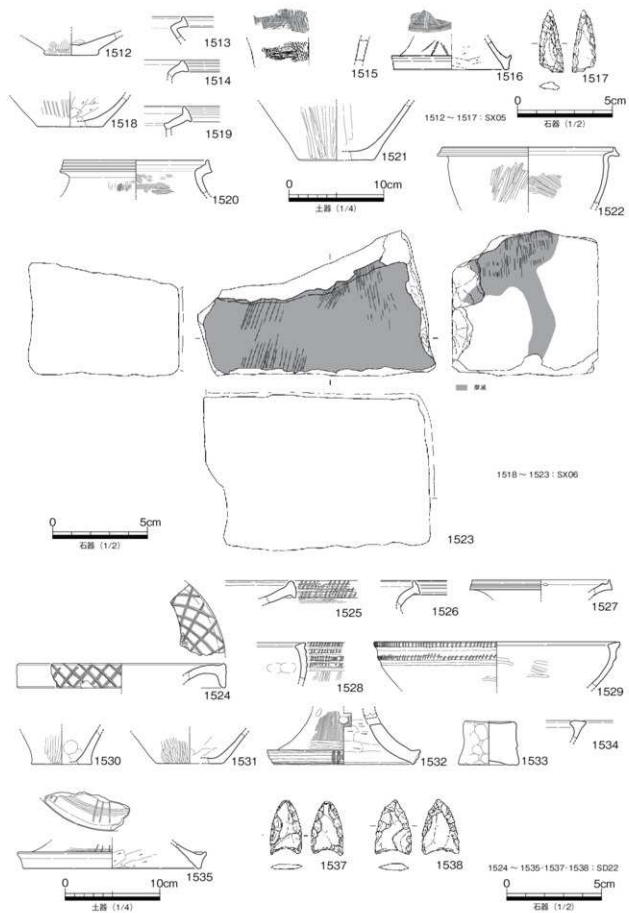


図 262 7-2区 SB08 (2)

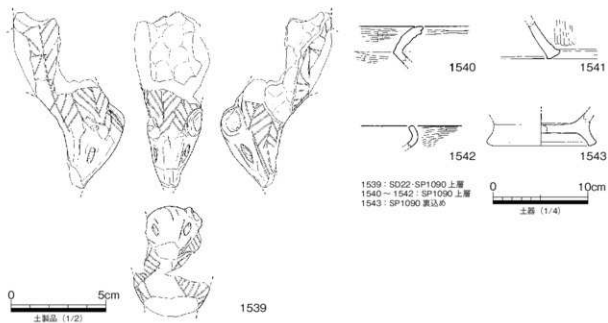


図 263 7-2 区 SB08 (3)

SD22 のような溝の掘り込みはみられず、柱穴の部分だけ壺掘りされている。SX05・SX06 はいびつな隅丸方形を呈し、長軸 1.6～1.8 m、短軸 1.2～1.3 m、深さ 0.6～0.7 m である。SX06 では柱痕の底面には 1 辺 0.2～0.3 m の平石が設置されていた。1512～1517 は第 28 次調査 SX05、1518～1523 は第 28 次調査 SX06、1524～1535・1537・1538 は第 28 次調査 SD22、1539～1543 は SP1090 から出土した。1540 は古墳時代の土器器裏の口縁部片である。SP1090 の上層から出土した。混入品であろう。1539 は土製品で、動物の頭部から腹部にかけての破片である。体部・鼻先は欠損する。後頭部から頭部にかけて綾杉文がヘラ描きされる。耳は後ろ向きに長く、中央部は凹む。目は細長く凹ませる。腹部の下部には脚部がはがれた痕跡がある。鼻が少し長いことから、イノシシであろうか。これらの遺物は弥生時代中期後半に属することから、SB08 は同時期のものと考えられる。

7-2 区 SB12 (図 264・265)

1H 区から第 28 次調査 7-2 区・7-9 区で検出された掘立柱建物跡である。建物中央部は攪乱によって削平される。建物西部は調査区外に連続する。現存の桁行は 2 間 (8.5 m)、梁間 1 間 (5.5 m) で、桁行の方向は N76° W である。1H 区で検出された SP1084・SP1092 はいずれも調査区外に連続するため、全体を検出していないが、各柱穴の平面形はいびつな隅丸方形で、長軸 1.8～2.0 m、短軸 1.5～1.8 m 前後、深さ 1.0～1.2 m である。なお、SP273・SX01・SX02 の埋土には径 0.05～0.2 m の礫が多く含まれていた。また、SP273 では礫による囲みがあり、その中に柱痕が確認された。囲みの内部は径 0.25 m である。SX01・SX02 では礫による囲みは検出されなかったが、本来は礫を積み上げて、その内部に柱を設置した可能性が高い。各柱穴からは弥生土器が整理箱 1/3 程度出土した。1544～1547 は 7-2 区 SX01 から、1548～1551 は 7-2 区 SX02 から、1552 は 7-9 区 SP273 から、1553～1557 は SP1084 から、1558・1559 は SP1092 から出土した。これらの遺物から、SB12 は弥生時代後期初頭のものと考えられる。

9. 2A 区・2B 区・2C 区・2E 区・2F 区

竪穴建物

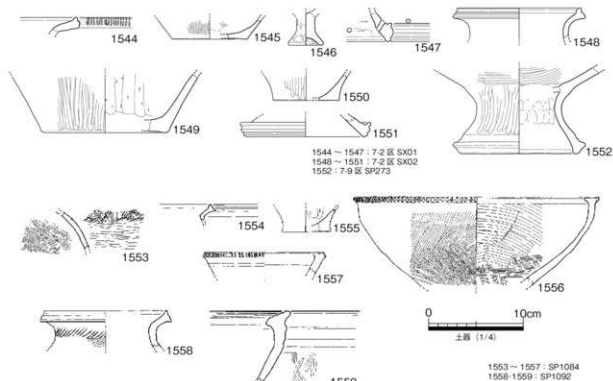


図 265 7・2区 SB12 (2)



図 266 1H区柱穴・小穴出土遺物

SH2001 (図 272)

2A区のはほぼ中央部から「旧練兵場遺跡I」で報告された調査区で検出された竪穴建物である。「旧練兵場遺跡I」ではその一部がSH11の遺構名で報告されている。2A区では建物の西部の壁が検出された。SH2001の平面形は方形で、長軸3.9m、短軸3.0m、最深0.3mである。西壁沿いには二重の壁溝が検出された。西側の壁溝は東側の壁溝を埋めたあとに掘られており、2面の床面があることが東西方向の土層断面からうかがわれる。建物の東部の床面は西部の上の床面よりも0.1m高い。埋土からは土器片が少量出土した。1562・1563は埋土下層から出土した。1562は古墳時代前期に属することから、SH2001は古墳時代前期のものと考えられる。

SH2002 (図 273)

2B区で検出された竪穴建物である。壁は検出されておらず、壁溝の一部が検出されただけである。壁溝は幅0.2～0.3m、深さ0.1mである。2か所で見つかった壁溝の平面形から建物の平面形は隅丸長方形で、長軸5.7m、短軸0.5m以上と推定される。土器小片7点、サヌカイト小片が出土した。これらの遺物は時期の特定ができにくい、埋土の土質が弥生時代中期の掘立柱建物の柱穴の埋土と類似することから、弥生時代中期の竪穴建物の可能性が高い。

SH2003 (図 274)

2A区の南端で検出された竪穴建物の一部である。2A区は幅0.5mと幅の狭い調査区であるが、北壁の一部と炉(SK2001)、柱穴1個が検出された。壁は長さ0.2mほどしか検出されていないが、丸みが

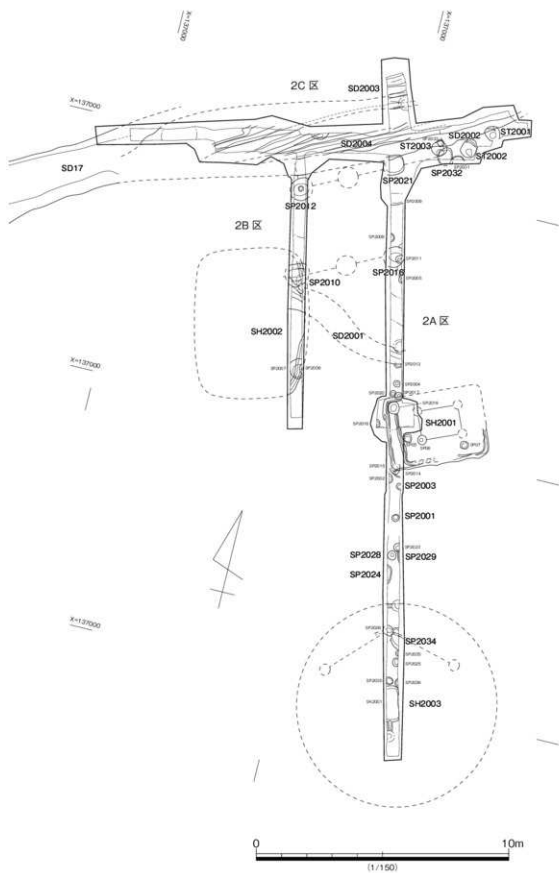


图 267 2A 区·2B 区·2C 区平面图

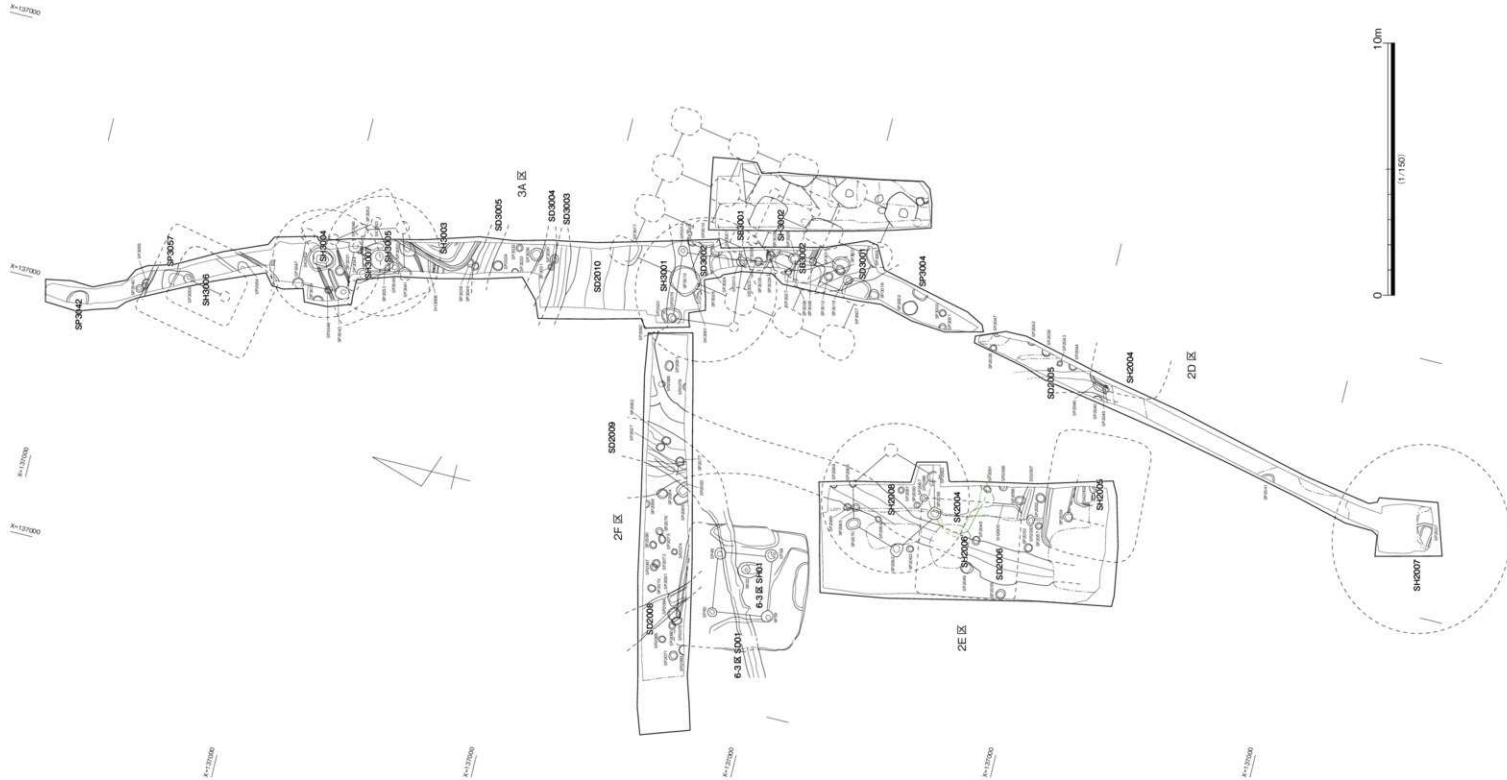


图 268 2D 区 · 2E 区 · 2F 区 · 3A 区 平面图

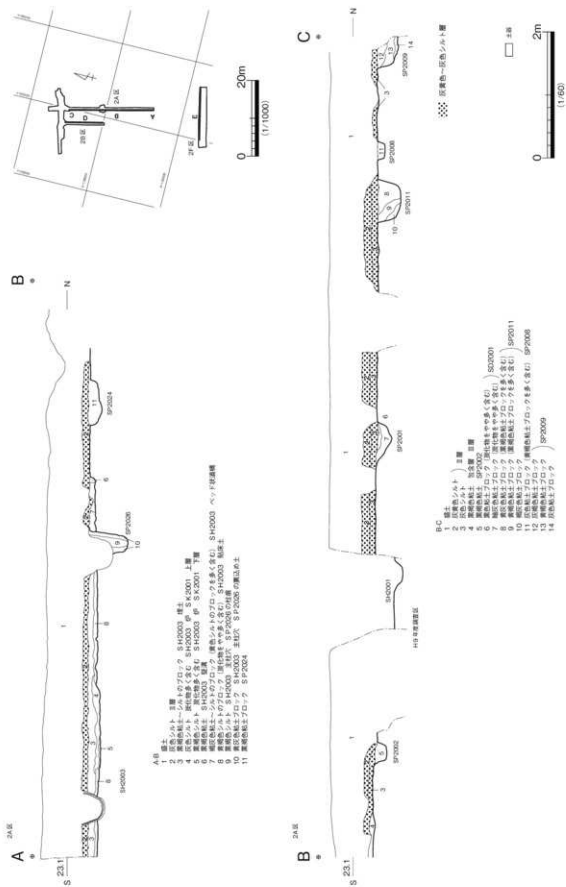


図 269 2A 区土層堆積図

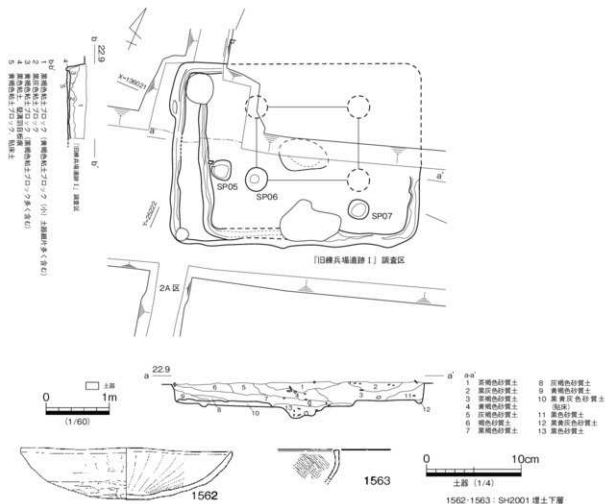


図 272 SH2001

あることから平面形は円形の可能性が高い。SK2001の西部は調査区外に連続するため未調査であるが、平面形は隅丸方形と推定され、長軸 1.3 m、短軸 0.5 m以上、深さ 0.05 mで、底面は平坦である。埋土には炭化物が多く含まれる。土器片も少量出土した。1564 ~ 1568 は床面から出土した。いずれも弥生時代後期中葉に属する。1569 は床面直上、1570 はSK2001埋土中位から出土した。1569 は青銅製品の一部で、銅鏝と考えられる。周囲はすべて欠損する。1570 は銅鏝で、基部と先端は欠損する。これらの遺物から、SH2003 は弥生時代後期中葉のものと考えられる。

SH2004 (図 275)

2D 区の北部で検出された建物である。建物の北西部が検出されただけである。南西部は掘乱によって削平され、東部は調査区外に連続するため不明である。壁の一部が検出されただけであるが、建物の平面形は隅丸方形と考えられる。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.1 m の壁溝が巡る。土器小片などが少量出土した。図化していないが、弥生時代終末から古墳時代前期に属する高杯脚部片が含まれる。隣接する 2E 区で検出された SH2005 と同方向であることや出土遺物から古墳時代前期のものと考えられる。

SH2005 (図 275)

2E 区の南東端で検出された堅穴建物である。建物の南部は掘乱によって削平され、東部は調査区外に連続するため、不明である。北壁の一部が残存しただけであるが、平面形は隅丸方形と考えられる。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.2 m の壁溝が巡る。壁の内側には板の痕跡と考えられる縦方向の細長い土

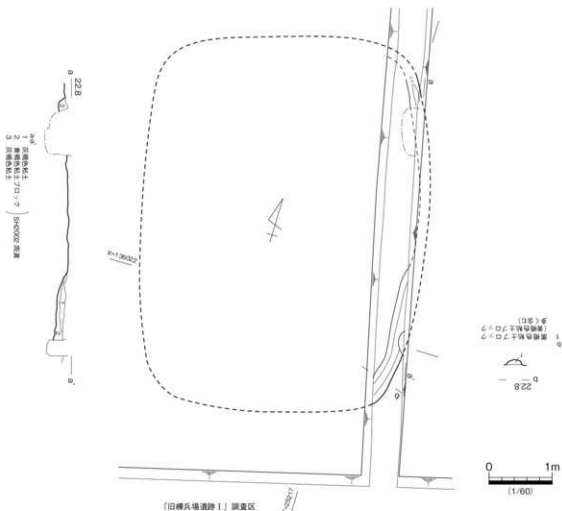


図 273 SH2002

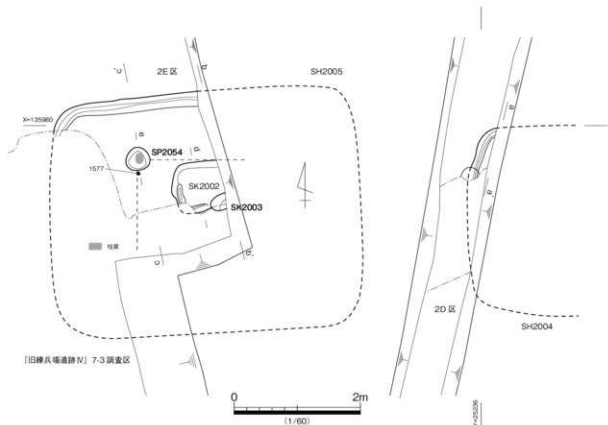
層の堆積があることから、壁に沿って板が縦方向に設置されていたと推定される。建物の中央には土坑 SK2002がある。SK2002は平面形隅丸方形で、長軸 0.8 m、短軸 0.8 m以上である。断面形は浅い皿状で、最深部の深さは 0.1 mである。埋土には焼土・炭化物を多く含むことから、炉と考えられる。1571～1574・1577は床面から出土した。1575は貼床、1576はSK2002から出土した。1577は滑石裂の白玉である。床面から出土したが、土器はいずれも古墳時代前期に属することから、混入品の可能性が高い。出土遺物から SH2005は古墳時代前期のものと考えられる。

SH2006 (図 276)

2E区のはほぼ中央部で検出された竪穴建物である。建物の南東壁の一部が検出されただけである。壁の形状から平面形は隅丸方形と考えられる。規模は不明である。土器小片が数点出土した。床面から「く」の字に屈曲する口縁部をもつ甕小片が出土していることから弥生時代終末から古墳時代前期のものと考えられる。

SH2007 (図 277)

2D区南端から第 28 次調査 7-3 区で検出された土坑 SP2037 を中心とする建物を想定し、SH2007とした。竪穴建物の壁は攪乱によって削平されているため検出されていない。SP2037も半分程度攪乱によって削平されているが、深さ 0.1 mである。埋土には炭化物がやや多く含まれていたことから、炉と考え



- a-a'
- 1 黒褐色粘土ブロック (SH2004)
 - 2 黒色粘土 (SH2004 壁床)
 - 3 黄灰色シルトのブロック (SH2004 粘床土)



- c-c'
- 1 2.5Y5-1 黄灰色粘砂質土 (Fe多く含む、小礫-中粒含む)
 - 2 10YR3-1 黒褐色粘質土 (5mm (測) 結晶ブロックわずかに含む) 壁床
 - 3 10YR3-1 黒褐色粘質土 (Fe含む、壁床と地山間の緩急部分か?)
 - 4 10YR2-1 黒褐色粘質土 (1cm以下の結晶ブロック (測) わずかに含む、1cm以下の礫まきまてわずかに含む、遺物片包含)



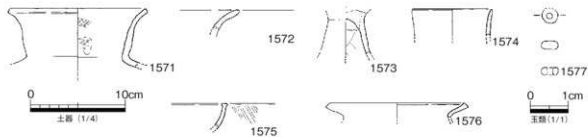
- b-b'
- 1 黒褐色シルトのブロック (壁め戻し土) SH2005
 - 2 黒褐色粘土 (壁面)
 - 3 黄灰色シルトのブロック (壁面埋め戻し土)
 - 4 黄灰色シルトのブロック /
 - 5 黄灰色シルト (炭化物多く含む)
 - 6 黄灰色シルト (炭化物 粘土粒多く含む) (伊織時代の埋土) SK2002
 - 7 黒褐色シルト (炭化物 粘土粒多く含む)
 - 8 黒褐色シルト (炭化物 粘土粒多く含む) SK2003
 - 9 黄褐色シルトのブロック
 - 10 黄灰色シルトのブロック (粘床土)



- d-d'
- 1 灰褐色シルト
 - 2 灰褐色シルト (粘土粒、炭化物を多く含む)
 - 3 灰褐色シルト (黒褐色シルトのブロックを多く含む)



- e-e'
- 1 灰褐色シルト (埋土)
 - 2 黄灰色シルトのブロック (黒粘土)



- 1571 - 1574-1577 : SH2005 床面
1575 : SH2005 粘床
1576 : SK2002

図 275 SH2004・SH2005

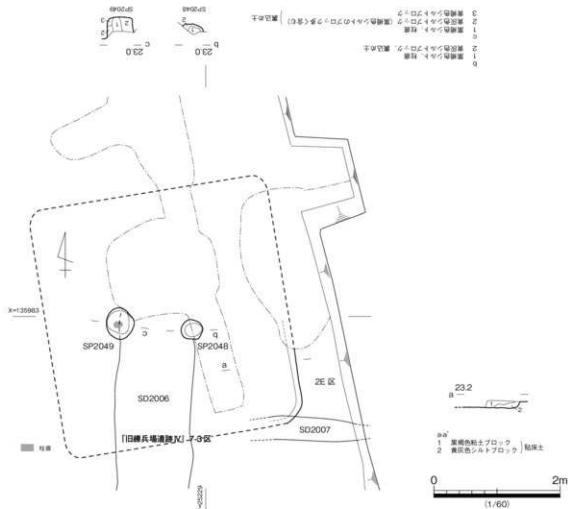


図 276 SH2006

られる。SP2037 から土器小片が数点出土した。1578 は弥生時代後期中葉に属することから、SH2007 は同時期のものと考えられる。

SH2008 (図 278)

2E 区北部で検出された。5 個の柱穴が環状にみられることから、これらの柱穴を竪穴建物の主柱穴と考え、建物を想定した。壁は未検出である。主柱穴の平面形は円形で、径 0.2 ~ 0.4 m、深さ 0.4 m である。各柱穴からは土器小片が出土した。1579 は SP2066 から出土した。弥生時代後期後半に属することから、SH2008 は同時期のものと考えられる。

6.3 区 SH01 (図 279)

2F 区西部から第 28 次調査 6.3 区にかけて検出された竪穴建物である。第 30 次調査では北壁付近が検出された。第 30 次調査では SH2009 と遺構名を付けたが、既刊の『旧練兵場遺跡Ⅳ』では 6.3 区 SH01 と報告していることから、ここでもこの遺構名を使用する。SH01 の平面形は隅丸方形で、長辺 5.1 m、短辺 4.8 m である。2F 区部分からは土器片が少量出土した。1580・1581 は貼床から出土した。いずれも弥生時代後期後半に属することから、SH01 も同時期のものと考えられる。

柱穴

SP2029 (図 280)

2A 区の南部で検出された柱穴である。調査区外に連続するため、全体は不明である。平面形は隅丸

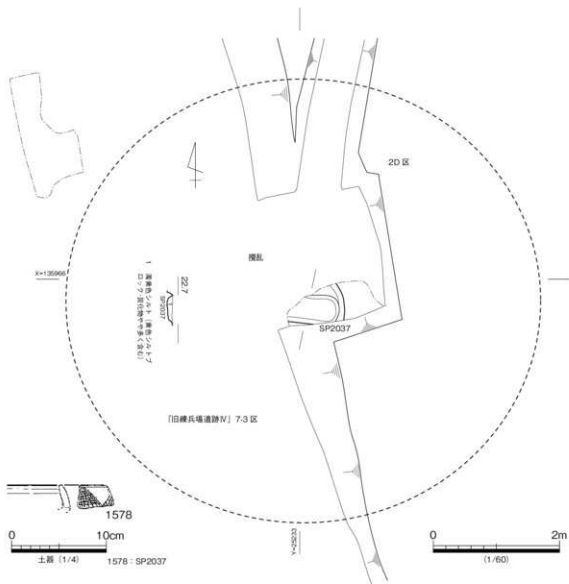


図 277 SH2007

方形または円形で、長軸 0.8 m、深さ 0.6 m 以上である。数点の土器細片が出土した。時期は不明である。SP2024 (図 280)

2A 区の南部で検出された柱穴である。調査区外に連続するため、全体は不明である。平面形は隅丸方形または円形で、長軸 0.7 m、深さ 0.2 m 以上である。土器細片・ササカイト細片が数点した。詳細な時期は不明である。

SP2034 (図 280)

2A 区の南部で検出された柱穴である。調査区外に連続するため、全体は不明である。平面形は隅丸方形または円形で、長軸 0.9 m、深さ 0.6 m である。土器細片が数点出土した。埋土の土質から弥生時代中期後半の柱穴と考えられる。

SP2003・SP2001・SP2028 (図 280)

2A 区の南部で検出された柱穴である。いずれも平面形は円形で、径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。SP2028 からは土器細片が数点したが、SP2003・SP2001 から遺物は出土しなかった。いずれの柱穴も時期は不明である。

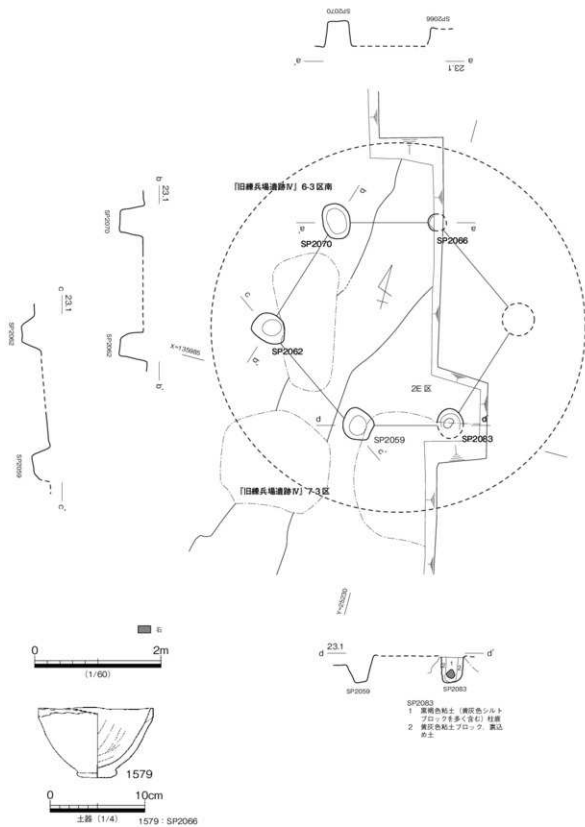


図 278 SH2008

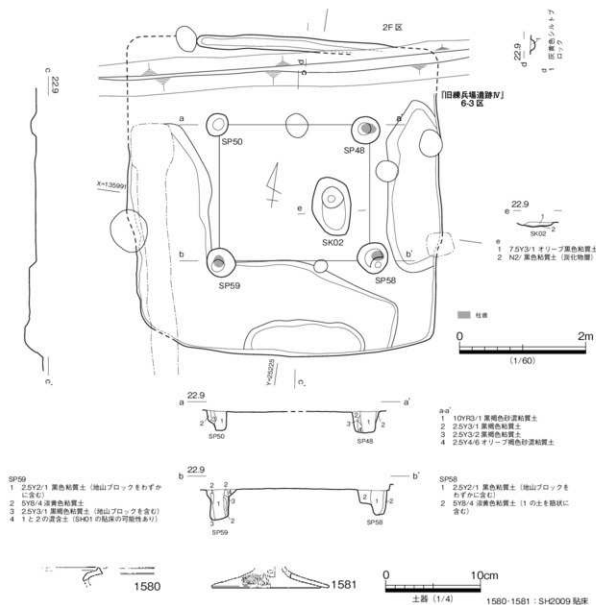


図 279 6-3区 SH01

SP2012・SP2021・SP2032 (図 281)

SP2012は2B区の北部、SP2021は2A区から2C区、SP2032は2C区で検出された柱穴である。SP2012の平面形は円形で径0.9m、深さ0.5m、SP2021の平面形は隅丸方形で長軸0.8m、深さ0.55m、SP2032の平面形は隅丸方形で長軸0.7m以上、深さ0.4mである。SP2012からは遺物は出土しなかった。SP2021・SP2032からは土器細片が1点ずつ出土しただけである。いずれの柱穴も埋土の土質から弥生時代中期後半の柱穴と考えられる。なお、SP2012とSP2021の間に1個の柱穴が存在すると、各柱穴間の距離は2.0mとなり、これらの柱穴で掘立柱建物の一辺を構成する可能性が高い。

SP2010・SP2016 (図 281)

SP2010は2B区のほぼ中央部、SP2016は2A区の北部で検出された柱穴である。SP2010の平面形はいびつな円形で、径0.95m、深さ0.5m、SP2016の平面形も円形で、径0.8m、深さ0.3mである。SP2010からは土器小片が7点、SP2016からは土器小片が4点出土したが、いずれも詳細な時期は不明である。いずれの埋土の色調・土質から弥生時代中期のものと考えられる。これらの柱穴は間に1個の

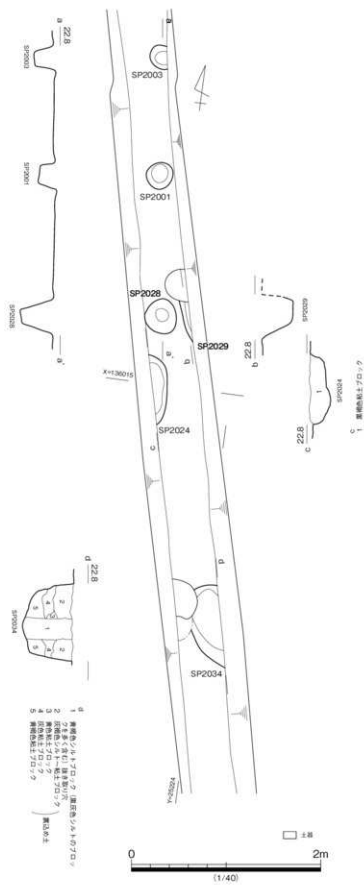


図 280 SP2001・SP2003・SP2024・SP2028・SP2029・SP2034

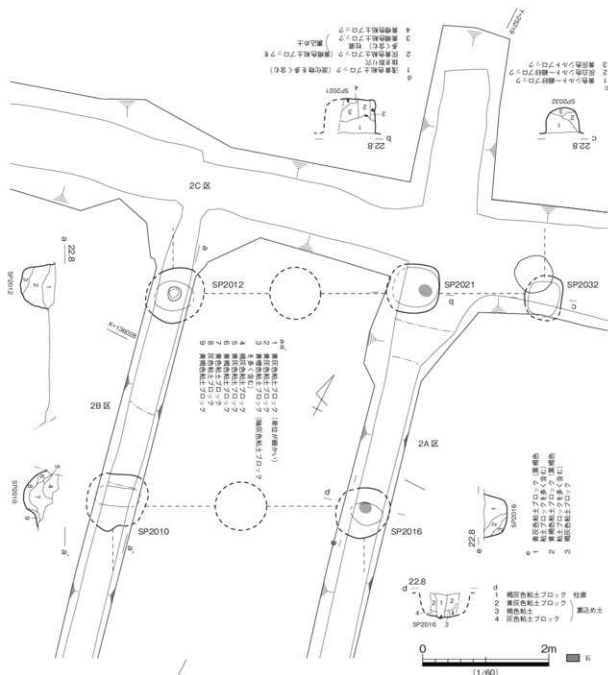


図 281 SP2010・SP2012・SP2016・SP2021・SP2032

柱穴があれば、柱穴間は 2.0 m となる。掘立柱建物を構成する可能性が高い。

土坑

SK2004 (図 282)

2E 区の東端で検出された土坑である。攪乱坑と攪乱坑の間で検出された。弥生時代以降の遺構の検出面より下のⅣ層中で検出された。平面形はいびつな円形で、長軸 2.5 m 以上、幅 1.5 m である。埋土は暗灰黄色中粒砂、暗黄色中粒砂から細砂からなる。遺物はサヌカイト小片 (長さ 1.0 cm、幅 0.3 cm) と土器片 5 点 (いずれも 1 辺 3 cm 以内) が出土した。いずれの土器片も形態等は不明で、詳細な時期は不明である。Ⅳ層中で検出されたことや周辺の既往調査の結果から縄文時代後期の土坑の可能性が高い。

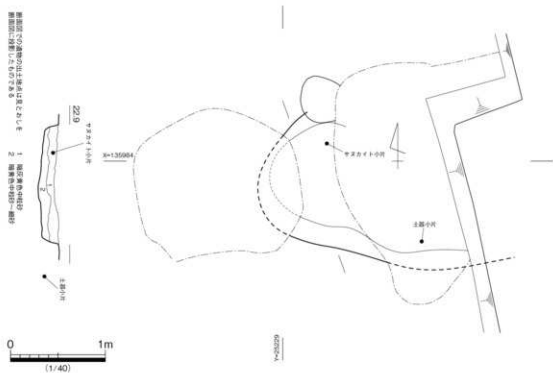


図 282 SK2004

墓

ST2001 (図 283・284)

2C 区の東部で検出された土器棺墓である。西部には ST2002・ST2003 の 2 基の土器棺墓がある。ST2001 はこれら 3 基のうち最東部にある。土器棺は弥生土器壺 (1582) で、横に寝かせた状態で出土した。口縁部片は出土しなかったことから、口縁部は埋葬以前に打ち割られていた可能性が高い。また、弥生土器鉢 (1583) の破片も出土しており、鉢で蓋をしていたと考えられる。1582・1583 は弥生時代後期中葉に属することから、ST2001 も同時期のものと考えられる。

ST2002 (図 283・285)

2C 区の東部で検出された土器棺墓である。ST2002 は 3 基のうちの中央の土器棺墓である。ST2001 と同様土器棺は弥生土器壺 (1585) で、横に寝かせた状態で出土した。やはり口縁部は出土しなかった。弥生土器鉢 (1584) の破片が出土しており、鉢で蓋をしていたと考えられる。1584・1585 は弥生時代後期中葉に属することから、ST2002 も同時期のものと考えられる。

ST2003 (図 283・286)

2C 区の東部で検出された土器棺墓である。ST2003 は 3 基のうちの最西部にある。土器棺は ST2001・ST2002 と同様弥生土器壺で、横に寝かせた状態で出土した。やはり口縁部は出土しなかった。ST2003 では弥生土器高杯の杯部の破片が出土しており、高杯の杯部で蓋をしていたと考えられる。1587・1588 は弥生時代後期中葉に属することから、ST2003 も同時期のものと考えられる。

溝

SD2001 (図 287)

2A 区の中央、2B 区の中央で検出された溝である。南東から北西と同一方向に向かうことから同一溝と考えた。幅 0.7～1.2 m、深さ 0.25～0.3 m である。弥生土器が少量出土した。1589・1590 は 2B 区

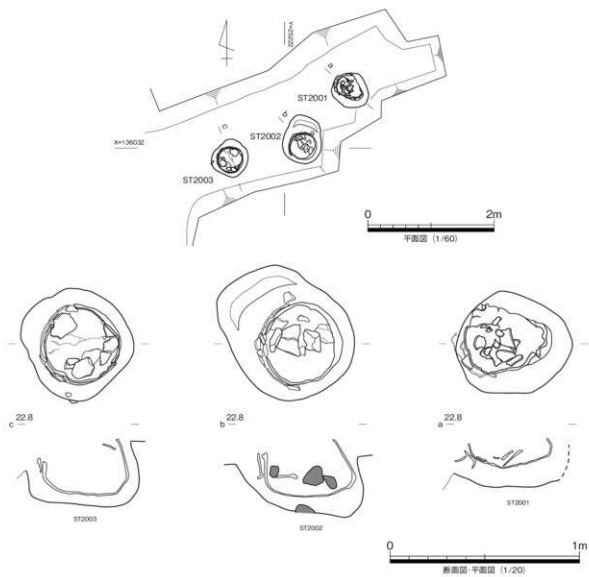


図 283 ST2001・ST2002・ST2003

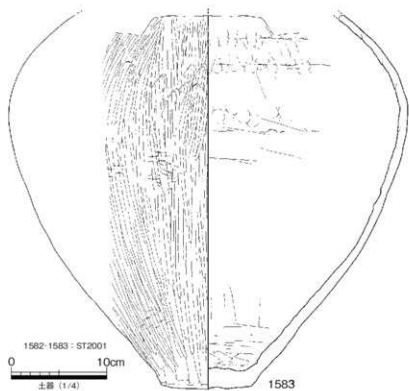
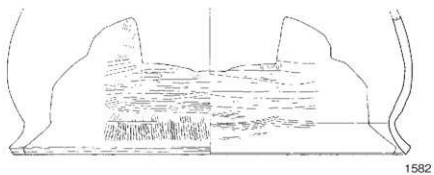
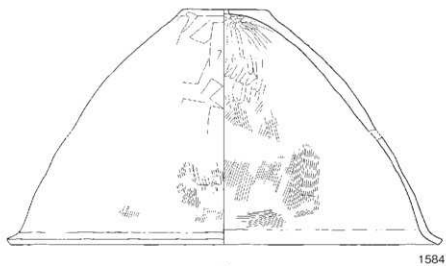
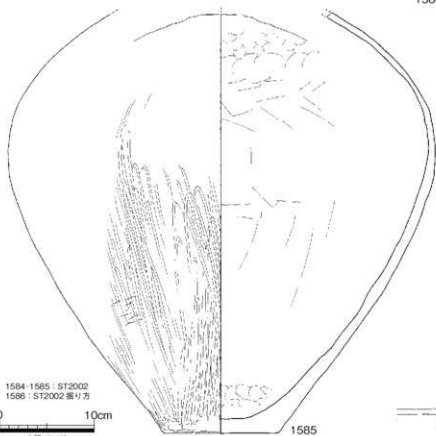


图 284 ST2001



1584



1585

1584・1585：ST2002
1586：ST2002掘り方

0 10cm

上層 (1/4)



1586

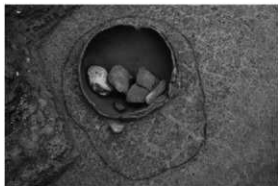


図 285 ST2002

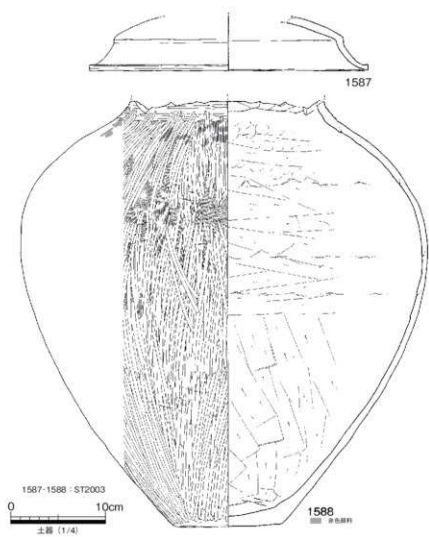


図 286 ST2003

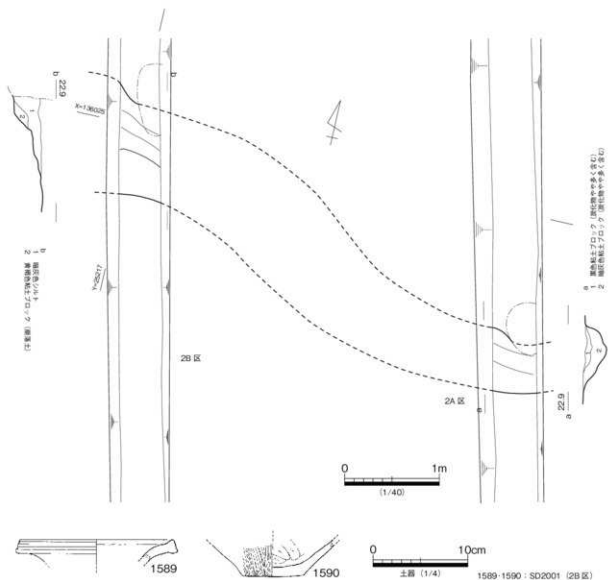
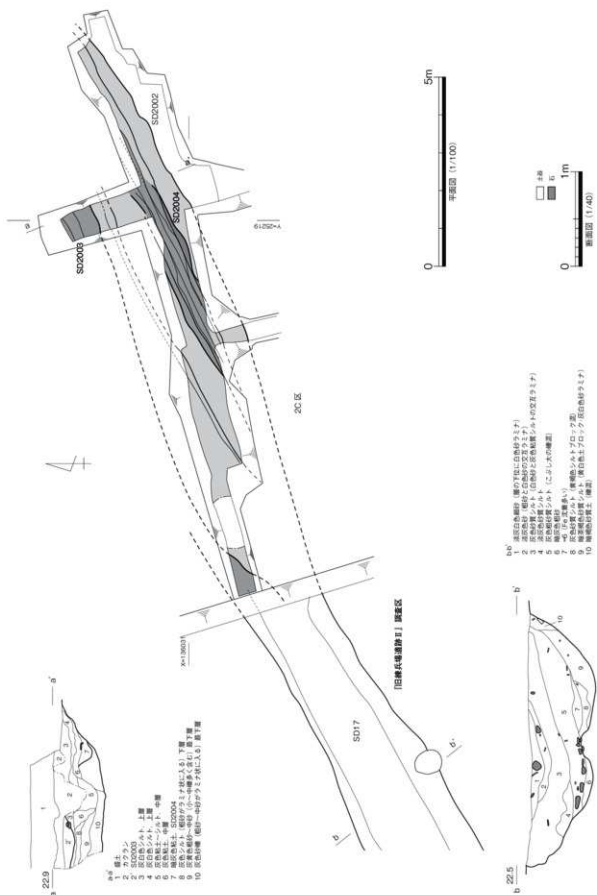


図 287 SD2001

から出土した。弥生時代後期前半に属することから、SD2001 は同時期のものと考えられる。

SD2002・SD2003・SD2004 (図 288・289)

2C区で検出された溝である。これらの溝は重複して南西から北東(N65°E)に向かい、周辺の条里地割の方向と同じである。これらの溝のうち最も古い溝はSD2003で、埋没途中にSD2004、SD2003をはじめとして数回同じ場所にも溝が掘られている。なお、これらの溝の西端は「旧練兵場遺跡II」でSD17と報告された溝に連続する。SD17の土層断面図をみると、数回溝が掘り直されていることがわかる。2C区では溝の北岸は検出できなかったが、これらの重複する溝の幅は3.5m、最深部の深さは0.5m程度と推定される。1591～1603はSD2002・SD2004から出土した遺物である。1591はSD2002の最下層、1592～1598はSD2002の下層、1599・1600は中層、1601・1602は上層、1603はSD2004の下層から出土した。1592～1595は弥生土器、1596は須恵器杯、1597は瓦器碗、1599は土師器、1600は須恵器杯、1601は瓦質土器の底部片、1603は土師器杯である。弥生時代や古代の遺物もみられるが、SD2002の下層から瓦器碗が出土していることからこれらの溝はいずれも中世のものと考えられる。



22.9

- 1 礎土
- 2 フラッシュ
- 3 SD05シフト 上層
- 4 SD05シフト 下層
- 5 灰瓦葺土 中層
- 6 灰瓦葺土 下層
- 7 灰瓦葺土 基礎
- 8 灰瓦葺土 基礎(小→中層まで含む) 層下層
- 9 灰瓦葺土 基礎(小→中層まで含む) 層下層
- 10 灰瓦葺土 基礎(中→下層まで含む) 層下層

22.5

- 1 10 灰瓦葺土 基礎(小→中層まで含む) 層下層
- 2 灰瓦葺土 基礎(中→下層まで含む) 層下層
- 3 灰瓦葺土 基礎(小→中層まで含む) 層下層
- 4 灰瓦葺土 基礎(中→下層まで含む) 層下層
- 5 灰瓦葺土 基礎(小→中層まで含む) 層下層
- 6 灰瓦葺土 基礎(中→下層まで含む) 層下層
- 7 灰瓦葺土 基礎(小→中層まで含む) 層下層
- 8 灰瓦葺土 基礎(中→下層まで含む) 層下層
- 9 灰瓦葺土 基礎(小→中層まで含む) 層下層
- 10 灰瓦葺土 基礎(中→下層まで含む) 層下層

0 5m
平面図 (1/100)

0 1m
断面図 (1/40)

図 288 SD2002・SD2003・SD2004 (1)

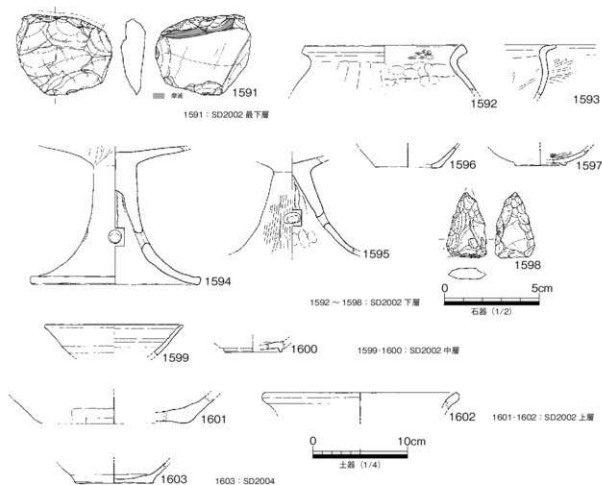


図 289 SD2002・SD2003・SD2004 (2)

SD2005 (図 290)

2D 区の北部で検出された溝である。幅 1 m の狭い調査区内を南東から北西 (N10° W) に走る。溝の北東岸は攪乱によって削平されるため不明である。溝の幅は 1.2 m 以上、深さ 0.3 m である。少量の土器・須恵器片と、平瓦片・磨石 (1606) が出土した。1606 は砂岩製である。1604 は 10 世紀後半から 11 世紀前半に属することから、SD2005 は古代の溝と考えられる。

SD2008 (図 291・293)

2F 区の西部で検出された溝である。南東から北西に向かう。溝幅は 0.6 ~ 0.8 m、深さ 0.05 ~ 0.2 m である。弥生土器が少量出土した。1608・1609 は SD2008 から出土した弥生土器片である。これらは弥生時代後期に属することから、SD2008 は同時期のものと考えられる。

SD2009 (図 291・292)

第 30 次調査 2F 区で検出された溝である。南西から北東に向かう。南端の延長線上には第 28 次調査 6-3 区 SD01 があり、両溝は連続すると考えられる。SD2009 は SD2010 と重複するが、SD2010 よりも新しい。SD2009 は幅 1.5 m、深さ 0.15 m である。SD01 は中世の溝であることから、SD2009 も中世のものと考えられる。

SD2006・SD2010 (図 291・292)

SD2006 は第 28 次調査 7-3 区・第 30 次調査 2E 区で、SD2010 は 2F 区・3A 区で検出された溝である。SD2006 は 7-3 区では SD02 と報告されている。SD2006 は南から北に向かう。2F 区の北 5 m には

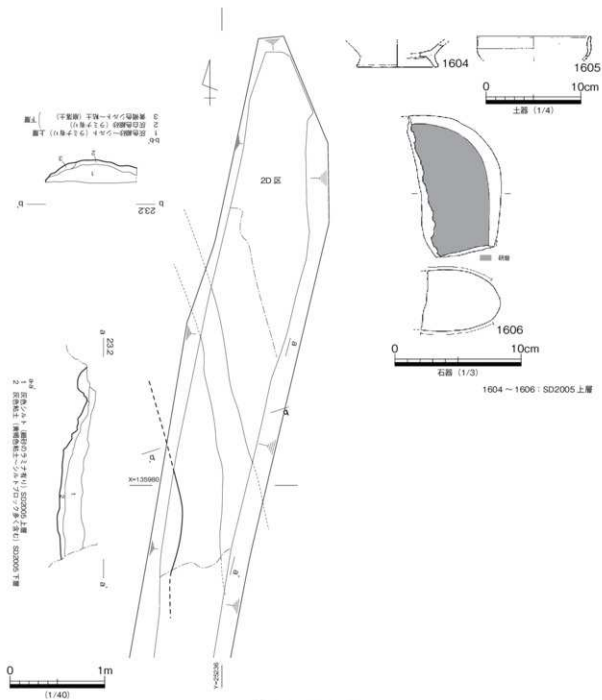


図 290 SD2005

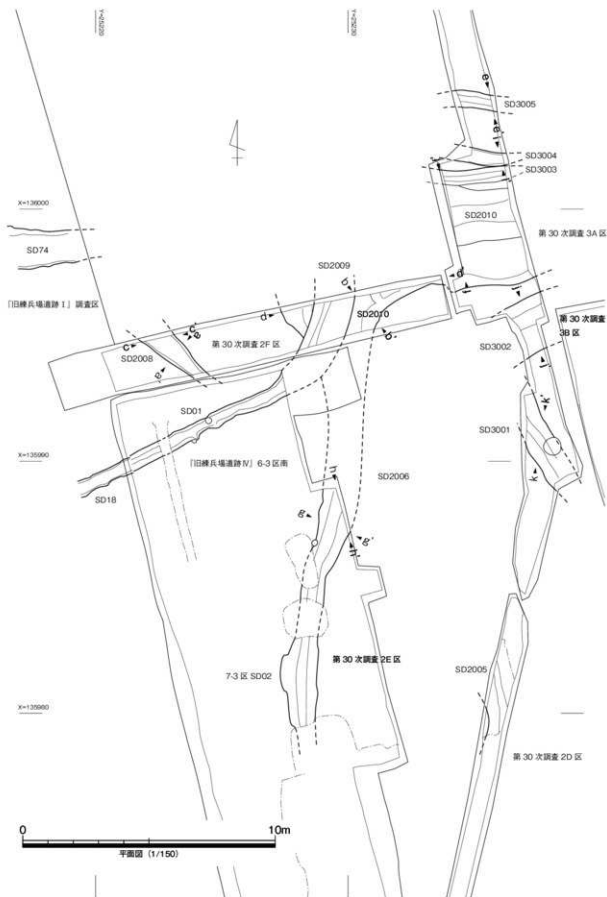


図 291 SD2005・SD2006・SD2008～SD2010・SD3001～SD3005 (1)

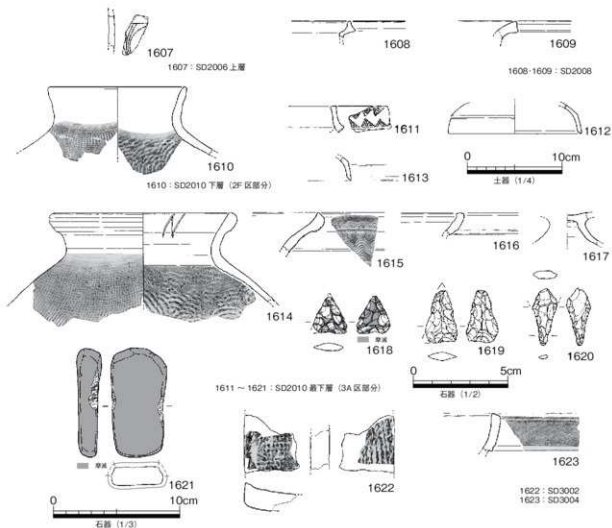


図 293 SD2006・SD2008・SD2010・SD3002・SD3004 (3)

2F 区があり、SD2006 の延長線上に SD2010 があることから、両溝は連続すると考えられる。2E 区では SD2010 は東に直角に曲がり、3A 区に入る。なお、3A 区の西側 15m は『旧練兵場遺跡 I』で報告された調査区であるが、SD2010 の延長線上に SD74 があり、SD74 と SD2010 は連続する可能性が高い。2E 区では SD2006 は幅 1.0 ～ 1.3 m、深さ 0.35 m、3A 区では幅 4.6 m、深さ 0.4 m である。2E 区では埋土は黄灰色シルト・黒褐色シルトで、3A 区では底面に小礫・土器細片を多く含むよく締まった灰色粗砂が堆積し、その上部に細砂・シルト・粘土が堆積する。底面によく締まった層があることや、流水によるラミナー状の堆積がみられないことから、SD2010 は道路の可能性が高い。SD2010 からは遺物は土器・須恵器片が整理箱 4 箱出土した。1607 は SD2006 から出土した弥生土器片である。ヘラ描きによる文様がみられる。1610 ～ 1621 は SD2010 から出土した。須恵器は 6 世紀から 7 世紀に属する。また、第 29 次調査の溝 SD09 に連続することから、SD2010 は 8 世紀に埋没した溝と考えられる。

10. 3A 区・3B 区

溝

SD3001 (図 291・292)

3A 区南部で検出された溝である。幅 1.0 m、深さ 0.2 m で、南東から北西 (N25° W) に向かう。遺

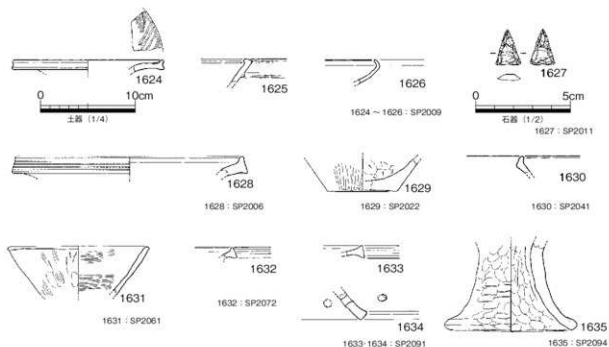


図 294 2A 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物

物は小片のため詳細な時期は不明である。SD3001 は周辺の条里地割と平行するが、この調査区付近で条里地割と平行するのは 9 世紀以降の遺構であることから、SD3001 は 9 世紀から 11 世紀のものと考えられる。

SD3002 (図 291 ~ 293)

3A 区南部で検出された溝である。幅 2.2 m、深さ 0.05 m で、南西から北東 (N65° E) に向かう。1622 は SD3002 から出土した平瓦である。凸面には縄目タタキ痕がみられる。詳細な時期のわかる遺物はみられないが、SD3002 は周辺の条里地割と平行し、この調査区周辺では条里地割と平行する遺構は 9 世紀以降のものであることから、SD3002 は 9 世紀から 11 世紀のものと考えられる。

SD3003 (図 291・292)

3A 区南部、SD2010 の北端で検出された溝である。東西に向かい、SD2010 に平行する。SD2010 は道路の可能性が高いが、SD2010 と同時併存したことが土層の堆積状況からうかがわれる。SD3003 は幅 0.6 m、深さ 0.3 m である。SD2010 と同時に併存していたことから、SD3003 は 7 世紀から 8 世紀のものと考えられる。

SD3004 (図 291 ~ 293)

3A 区南部、SD3003 の北に接して検出された溝である。3A 区はこの付近では幅 1.3 m と狭いが、調査区内では SD3004 は東西に向かい、SD3003 とほぼ平行する。SD3004 は幅 0.6 m、深さ 0.1 m である。遺物はいずれも小片で、詳細な時期はわからないが、SD2010 とほぼ平行することから、SD3004 も 7 世紀から 8 世紀のものと考えられる。

SD3005 (図 291・292)

3A 区南部、SD3004 の北 1.8 m の地点で検出された溝である。3A 区はこの付近では幅 1.3 m と狭いが、調査区内では SD3005 は東西に向かい、SD2010・SD3003・SD3004 とほぼ平行する。SD3005 は幅 0.7 m、深さ 0.2 m である。遺物は小片のため詳細な時期はわからないが、SD2001 などと平行することから、

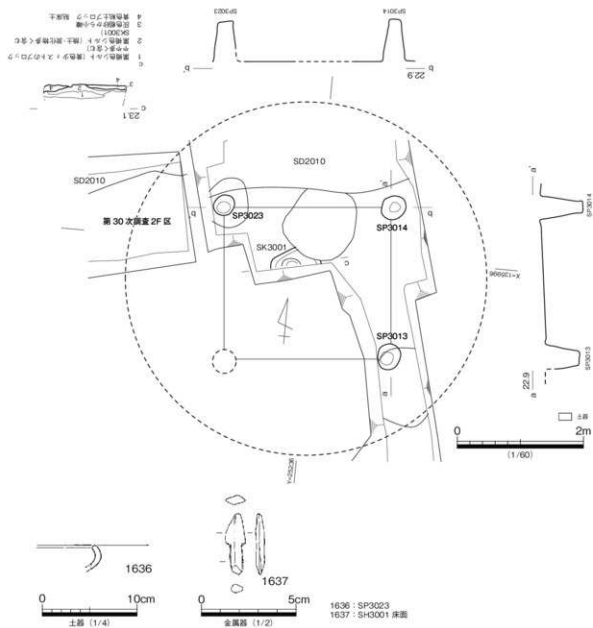


図 295 SH3001

SD3005 も 7～8 世紀のものと考えられる。

竪穴建物

SH3001 (図 295)

3A 区の南部で検出された竪穴建物である。調査区が狭く、周辺には古代の溝 SD2010 と掘立柱建物 SB3001 があり、削平されていたため、竪穴建物の壁は検出できなかったが、炉と主柱穴が検出された。土坑 SK3001 は遺構外に連続するため一部しか検出されておらず、北東部は古代の掘立柱建物 SB3001 の柱穴 SP3015 と重複し、削平され、長軸 0.7 m 以上、深さ 0.2 m である。埋土下部には焼土・炭化物を多く含むことから、炉と考えられる。主柱穴は 3 個検出された。南東角の SP3013 は SB3001 の柱穴 SP3009 と重複し、削平される。主柱穴はいずれも円形で、径 0.3～0.4 m、深さ 0.5～0.6 m である。土器小片が数点出土した。1637 は床面から出土した銅甕である。1636 は主柱穴 SP3023 から出土した。弥生時代中期後半に属する。遺物は少量で、建物の時期の特定は難しいが、周辺に弥生時代の竪穴建物

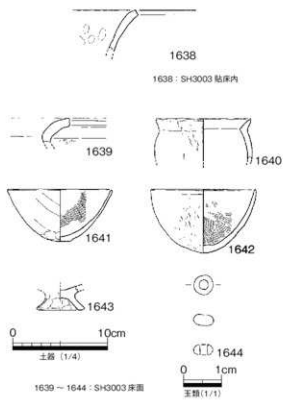
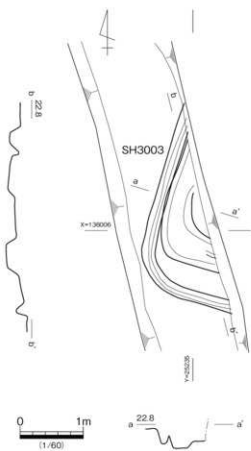
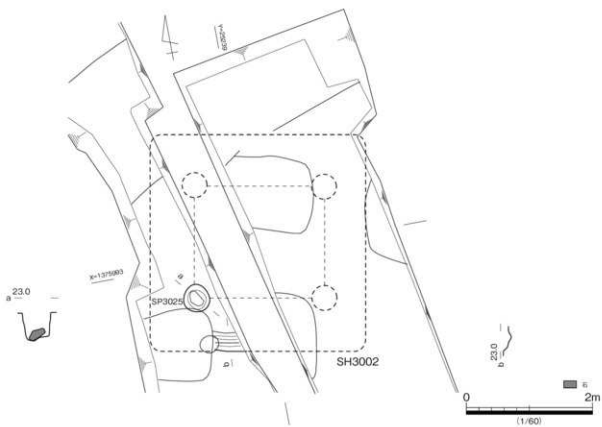


図 296 SH3002・SH3003

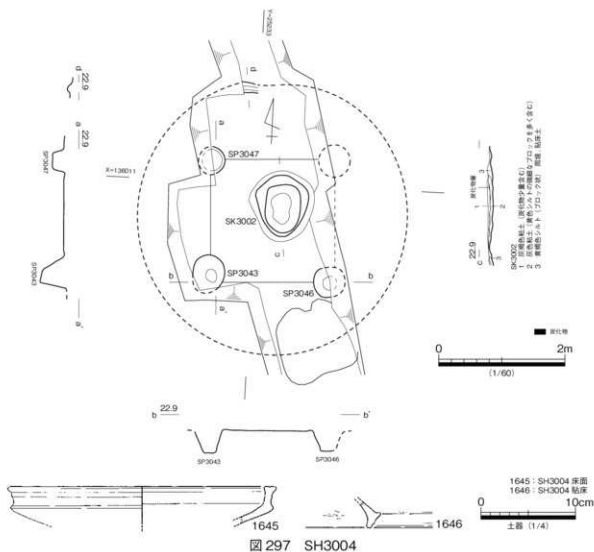


図 297 SH3004

がないことから、SH3001 は弥生時代後期のものと考えられる。

SH3002 (図 296)

3A 区の南部・3B 区で検出された堅穴建物である。調査区が狭く、周辺には古代の溝 SD3002 や掘立柱建物 SB3001 があり、削平されていたため建物の壁は検出できなかったが、南壁の一部と柱穴が検出されており、堅穴建物と考えた。南壁は直線状であることから、建物の平面形は隅丸方形と考えられる。南壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。支柱穴は SP3025 が 1 個検出されただけである。SP3025 の平面形は円形で、径 0.4 m、深さ 0.4 m である。土器小片が数点出土しただけである。詳細な時期は不明であるが、周辺の同方向の堅穴建物が弥生時代終末期のものであることから、SH3002 も同時期の可能性が高い。

SH3003 (図 296)

3A 区のはほぼ中央部で検出された堅穴建物である。この付近では調査区の幅は 1.3 m と狭く、建物の北西部が検出されただけで、大部分が調査区外に連続する。北西部の形状から平面形は隅丸方形と考えられる。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.15 m の壁溝が巡る。また、その内側にも幅 0.5 m、深さ 0.1 m の溝が巡り、二重の壁溝があることから、数回建て直したことがうかがわれる。弥生土器などが少量出土した。1638 は貼床、1639～1644 は床面から出土した。1644 はガラス製の小玉である。これらの土器

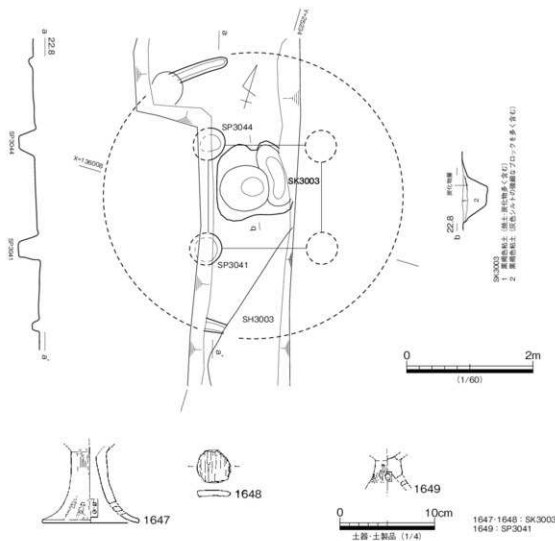


図 298 SH3005

はいずれも古墳時代前期に属することから、SH3003 は古墳時代前期のものと考えられる。

SH3004 (図 297)

3A 区の北部で検出された堅穴建物である。北壁の一部と炉、支柱穴が検出されただけである。残存する北壁は僅かであるが、円弧状であることから建物の平面形は円形と考えられる。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。建物の中央には炉と考えられる土坑 SK3002 がある。SK3002 の周囲に土手状の高まりがある。平面形はややいびつな円形で、土手の内側で、長軸 0.8 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 m である。土坑内には炭化物層が堆積していた。支柱穴は 3 個検出されたが、本来は 4 個で構成されることが考えられる。いずれも円形で、径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.25 ~ 0.4 m である。少量の土器片が出土した。1645 は床面、1646 は貼床から出土した。1645 は弥生土器高杯の杯部片で、弥生時代後期前半に属することから、SH3004 は同時期のものと考えられる。

SH3005 (図 298)

3A 区の北部で検出された堅穴建物である。南部は弥生時代終末期の堅穴建物 SH3003 と重複し、削平される。また、弥生時代後期の堅穴建物 SH3004 と重複する位置にあるが、新旧関係は不明である。壁溝の一部は 2 か所で確認された。壁溝は幅 0.2 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m である。壁溝の平面形は円弧状

であることから、建物の平面形は円形と考えられる。建物の中央には土坑 SK3003 がある。SK3003 は凹みが2か所あり、西側の凹みは平面形円形、西側は長楕円形である。埋土には炭化物が多く含まれていたことから、炉と考えられる。少量の弥生土器が出土した。1647・1648 は SK3003 から、1649 は SP3041 から出土した。これらは弥生時代後期後半に属することから、SH3005 は同時期のものと考えられる。

SH3006 (図 299)

3A 区の北部で検出された堅穴建物である。この付近は調査区が 0.6 ~ 0.8 m と狭く、北壁と東壁の一部、柱穴が検出されただけである。南部は弥生時代後期の堅穴建物 SH3004 と重複するが、重複すると推定される部分は調査区外であるため、土層の堆積状況から新旧関係は確認できなかった。残存する壁から平面形は隅丸方形または方形と考えられる。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.1 m の壁溝が巡る。壁沿いは一段高く、ベッド状遺構がある。柱穴は SP3056 が 1 個検出されただけである。その位置から、主柱穴はもう 1 個あり、2 個で構成されると考えられる。土器片が少量出土したが、小片ばかりで詳細な時期は不明である。須恵器が含まれていないことや、平面形が方形と推定されることから、弥生時代後期後半のものと考えられる。

SH3007 (図 299)

3A 区の北部で検出された堅穴建物である。北壁と南壁の一部、柱穴が検出されただけである。南部は古墳時代前期の堅穴建物 SH3003 と重複し、削平される。また、弥生時代後期の堅穴建物 SH3004 と重複するが、いずれも壁溝と柱穴だけの検出であるため、土層の堆積状況で新旧関係の確認はできなかった。壁溝の形状から、SH3007 の平面形は方形または隅丸方形と考えられる。壁溝は幅 0.2 m、深さ 0.05 m である。土器片が少量出土した。須恵器が含まれていないことや、平面形が方形と推定されること、古墳時代前期の堅穴建物 SH3007 よりも古いことから、弥生時代後期後半のものと考えられる。

掘立柱建物

SB3001 (図 300・301)

3A 区南部・3B 区で検出された掘立柱建物である。いずれも幅 0.7 ~ 2.0 m と幅の狭い調査区であるため、全体を検出できていないが、桁行 4 間 (9.0 m)、梁間 3 間 (5.7 m) の総柱の大型掘立柱建物である。桁行の方向は N10° W で、床面積は 51m² である。SB3001 の北西隅にあたる柱穴 SP3017 は 8 世紀に埋没する溝 SD2010 掘り下げ後に検出された。SD2010 よりも SP3017 のほうが古い。また、南部の柱穴 SP3008・SP3007 は 9 世紀から 11 世紀の溝 SD3001 の掘り下げ後に検出された。SD3001 よりも SP3008・SP3007 のほうが古い。柱穴の平面形はややいびつな円形または隅丸方形で、長軸 1.0 ~ 1.2 m、深さ 0.4 ~ 0.6 m である。西側の桁行の柱穴 SP3015 からは柱と考えられる木片が出土した。樹種同定を行った結果、第 6 章第 7 節のとおり、樹種はコウヤマキと推定された。各柱穴からの出土遺物はいずれも少量である。1650・1651 は SP3009 から、1652 は SP3015 から出土した。1650 は弥生土器、1651・1652 は 6 ~ 7 世紀の土師器甕の口縁部である。詳細な時期は不明であるが、7 世紀から 8 世紀の溝 SD2010 よりも古いことから、SB3001 は 7 世紀頃のものと考えられる。

SB3002 (図 302)

3A 区の南部で検出された掘立柱建物である。古代の掘立柱建物 SB3001 と重複する。調査区は幅 0.6 ~ 1.1 m と狭く、桁行の 1 辺が検出されただけである。桁行 1 間 (4.8 m) で、桁行の方向は N10° E である。柱穴は円形または隅丸方形で径または 1 辺 0.7 ~ 0.9 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m である。柱穴埋土の色調・

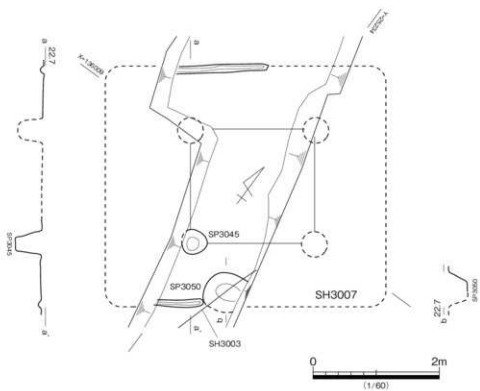
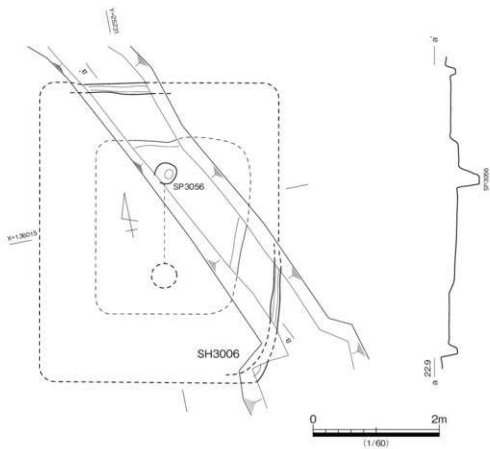


图 299 SH3006 · SH3007

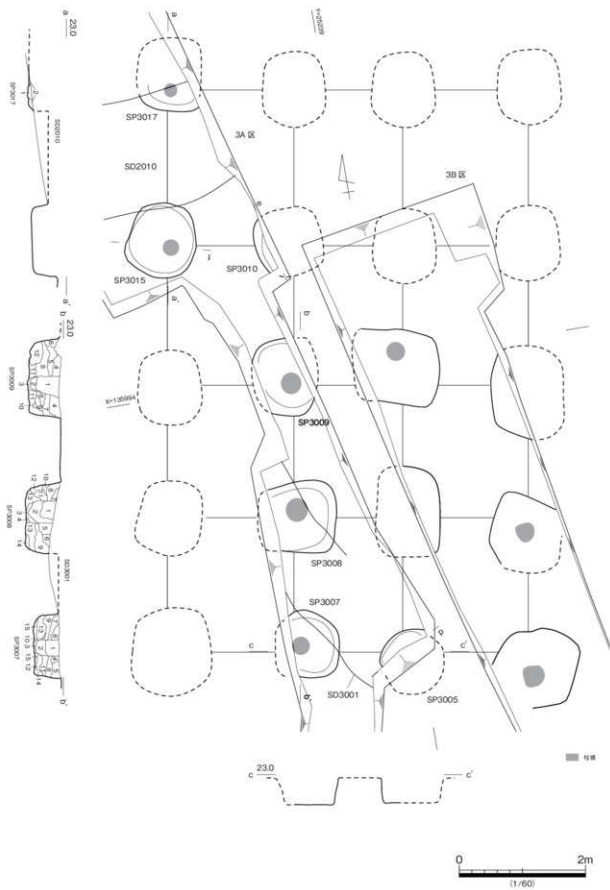


图 300 SB3001 (1)

SP3007

- 1 灰褐色シルト
- 2 灰色シルトと黄褐色シルトのブロックの互層
- 3 灰色シルト
- 4 灰褐色シルトのブロック
- 5 黄褐色粘土のブロック
- 6 黄褐色粘土ブロック
- 7 黄褐色粘土ブロック (細かいブロック)
- 8 黄褐色粘土ブロック (細かいブロック)
- 9 未定記
- 10 黄褐色粘土ブロック (細かいブロック)
- 11 灰褐色粘土ブロック (細かいブロック)
- 12 黄褐色粘土ブロック
- 13 黄褐色粘土ブロック (細かいブロック)
- 14 灰色粘土ブロック
- 15 黄褐色シルト (下に凹凸部)

柱状

裏込め土



SP3008

- 1 黄褐色シルト
- 2 黄褐色シルト (黄褐色シルトのブロックがラミネーションに入る)
- 3 黄褐色シルトのブロック
- 4 黄褐色シルト 柱状下の黄褐色土
- 5 灰褐色シルトのブロック (ブロック粗)
- 6 灰色シルトのブロック (ブロック粗)
- 7 黄褐色シルト (黄褐色シルトのブロック多く含む)
- 8 黄褐色シルトのブロック
- 9 黄褐色シルトのブロック (ブロックの単位粗、細まる)
- 10 黄褐色シルトのブロック
- 11 黄褐色シルトのブロック (ブロックの単位粗かい)
- 12 灰色シルトのブロック (ブロックの単位粗かい)
- 13 黄褐色粘土のブロック
- 14 黄褐色粘土のブロック (ブロックの単位粗かい)

柱状

裏込め土

SP3009

- 1 黄褐色シルト
- 2 黄褐色シルト (黄色シルトブロック (小) が葉理状に入る)
- 3 黄褐色シルトのブロック (葉理状)
- 4 灰褐色シルトのブロック (黄褐色シルトのブロック (小) 多く含む)
- 5 黄褐色シルトのブロック (黄褐色シルトのブロック (小) 多く含む)
- 6 灰褐色シルト
- 7 黄褐色シルトのブロック (黄褐色シルトのブロック 粘土粒も多く含む)
- 8 灰褐色シルトのブロック
- 9 黄褐色シルトのブロック
- 10 黄褐色粘土ブロック
- 11 黄褐色粘土ブロック (細く細まる)
- 12 黄褐色粘土ブロック (細く細まる)

SP3017

- 1 黄褐色シルト (粗細ブロック状) 柱状
- 2 黄褐色シルトのブロック 裏込め土



SP3005

- 1 黄褐色シルトのブロック (細く細まる)
- 2 黄褐色シルトのブロック (細く細まる)
- 3 黄褐色シルトのブロック (細く細まる)
- 4 黄褐色シルトのブロック (細く細まる)



SP3015

- 1 灰褐色シルト
- 2 黄褐色粘土
- 3 灰褐色シルトのブロック (粗粒小)
- 4 灰色シルトのブロック (ブロックが葉理状にみられる)
- 5 黄褐色粘土ブロック
- 6 灰色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック (大) 多く含む)
- 7 黄褐色シルトのブロック (細く細まる)
- 8 灰褐色シルトのブロック (下に凹凸)
- 9 黄褐色粘土ブロック
- 10 黄褐色粘土ブロック
- 11 灰褐色シルトのブロック (黄褐色シルトのブロック多く含む)
- 12 灰褐色シルトのブロック (黄褐色シルトのブロック多く含む) 細く細まる
- 13 黄褐色粘土 (粗粒状物含む)
- 14 黄褐色粘土ブロック (細く細まる)



SP3010

- 1 黄褐色シルトのブロック
- 2 黄褐色シルトのブロック (ブロックの単位粗かい)
- 3 黄褐色粘土のブロック (細く細まる)
- 4 黄褐色シルトのブロック (細く細まる)

裏込め土

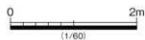


図 301 SB3001 (2)

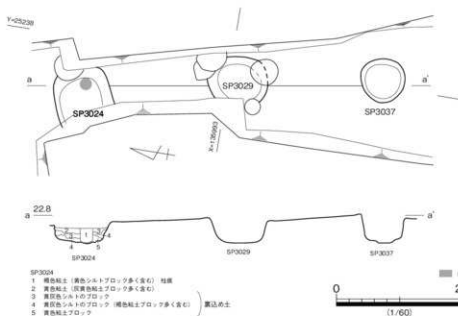


図 302 SB3002

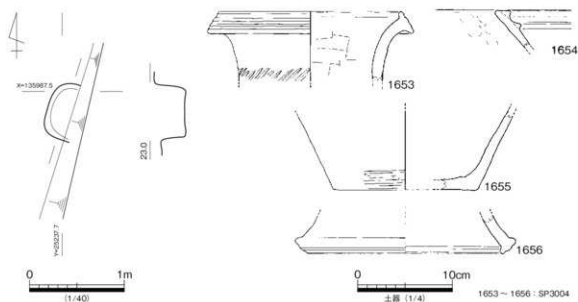


図 303 SP3004

土質から SB3002 は弥生時代中期のものと考えられる。

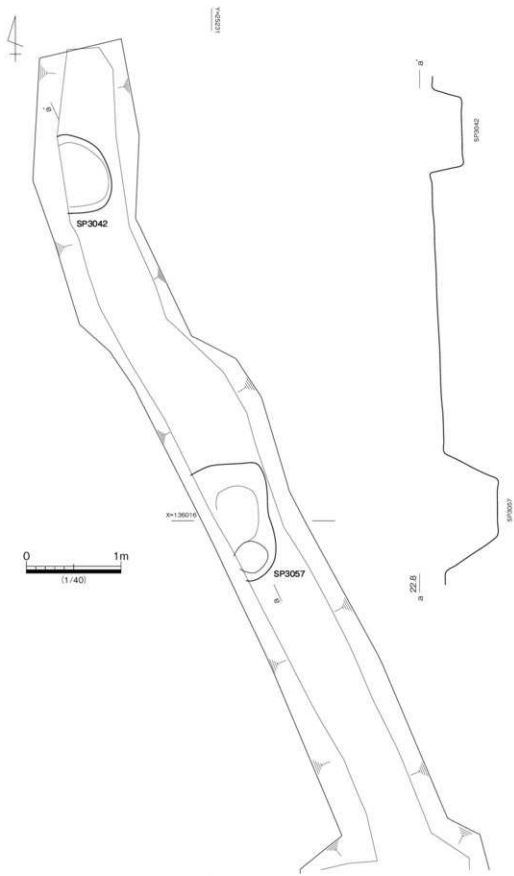
柱穴・小穴

SP3004 (図 303)

3A 区の南部で検出された柱穴である。東部は調査区外に連続するため不明である。平面形は隅丸方形で長軸 0.6 m、深さ 0.3 m である。遺物は弥生土器が少量出土した。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SP3004 は同時期のものと考えられる。

SP3042・SP3057 (図 304)

3A 区の北部で検出された遺構である。SP3042 の平面形は円形で、径 0.8 m、深さ 0.4 m である。SP3057 は弥生時代後期の竪穴建物 SH3006 の下で検出された。平面形はややいびつな隅丸方形で、長軸 1.2 m、深さ 0.5 m である。SH3006 よりも下で検出されたことや、埋土の色調・土質から弥生時代中



304 SP3042 · SP3057



図 305 3A 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物

期後半のものと考えられる。

第6章 第36次調査

第1節 層序

第36次調査は普通寺病院統合事業の調査区の中では最も南部に位置する。現地表の標高は24.2～24.5mで、現地表下0.6m程度まで攪乱が及び、遺構の上部は削平されていた(図307)。

第2節 遺構・遺物

土坑

SK01 (図308)

1区南部で検出された土坑である。南東部は調査区外に連続するため不明である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.0m、短軸0.4m、断面形は箱形で、深さ0.1mである。弥生土器が少量出土した。1660は弥生土器鉢で、弥生時代終末期に属することから、SK01も同時期のものと考えられる。

SK02 (図309)

2区のはほぼ中央で検出された土坑である。南部は調査区外に連続するため全体は不明である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.1m以上、短軸0.9m以上、深さ0.1～0.2mである。出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。

柱穴・小穴

SP01・SP02・SP03・SP04 (図310)

1区中央やや南寄りで検出された遺構である。平面形はいずれも円形で、径0.2m、深さ0.1～0.2mである。各柱穴からは土器細片が数点出土しただけで、これらの遺構の時期は不明である。

SP06・SP07・SP08 (図311)

2区で検出された遺構である。平面形はいずれも円形で、径0.2m、深さ0.1～0.2mである。各柱穴からは土器細片が数点出土しただけで、これらの遺構の時期は不明である。

SP09 (図312)

4区中央で検出された遺構である。平面形は隅丸長方形で、長軸0.6m、深さ0.1mである。遺物は土器細片が出土した。詳細な時期は不明である。

SP10 (図312)

4区中央で検出された遺構である。平面形は円形で、径0.5m、深さ0.3mである。埋土の色調・土質からSP10は弥生時代中期のものと考えられる。

SP11・SP12・SP13 (図313)

4区西寄りで検出された遺構である。いずれも平面形は円形で、SP11は径0.4m、深さ0.3m、SP12は径0.15m、深さ0.1m、SP13は径0.3m、深さ0.2mである。遺物は土器細片が数点出土した。いずれも時期は不明である。

溝

SD02 (図314)

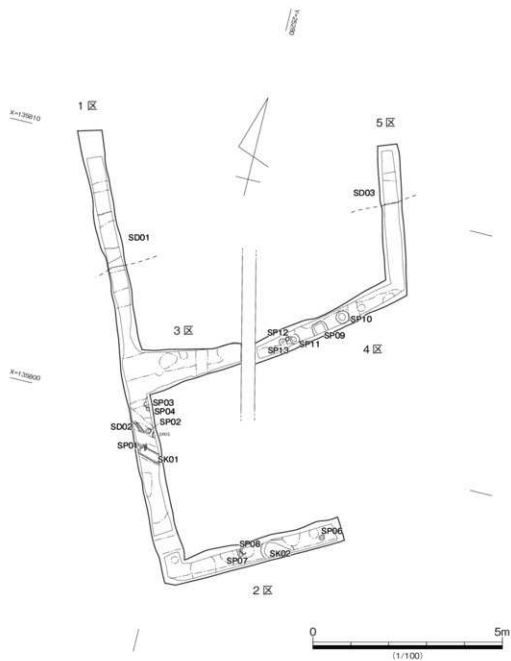
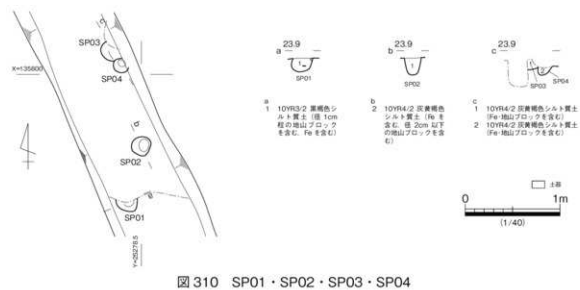
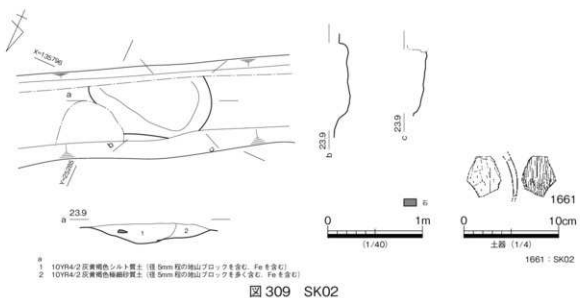
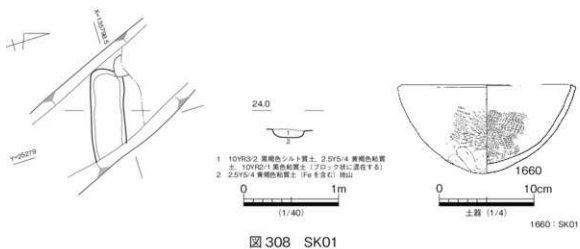


図 306 第 36 次調査平面図



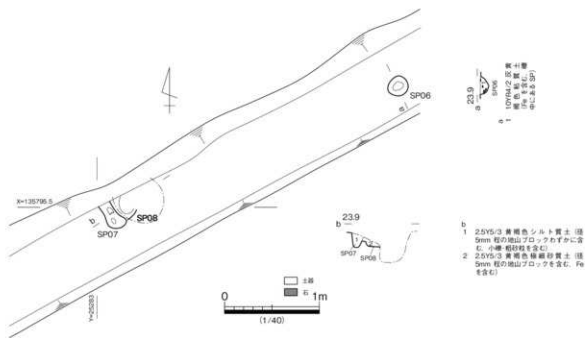


図 311 SP06・SP07・08

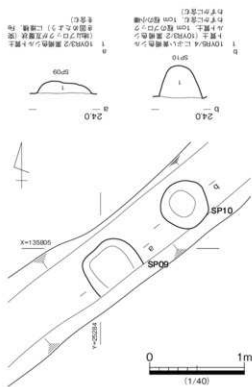


図 312 SP09・SP10

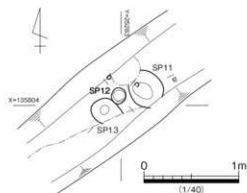


図 313 SP11・SP12・SP13

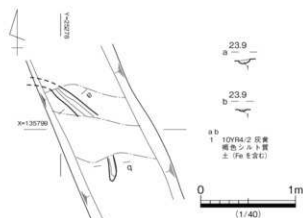


図 314 SD02

1区南部で検出された溝である。北部・中央部は攪乱によって削平される。SD02の南部は弥生時代終末期の土坑SK01と重複する。SK01のほうが新しい。SD02は幅0.1～0.2m、深さ0.05mである。円弧状であることから、堅穴建物の壁溝の可能性が高い。遺物は土器細片が数点出土した。詳細な時期は不明であるが、SD02は弥生時代後期の堅穴建物の一部と考えられる。

SD01・SD03 (図 315)

SD01は1区北部、SD03は5区北部で検出された。1区と5区は10m離れているが、両溝は同一溝と考えられる。両溝は東西方向(N65°E)に走る。いずれも北部は調査区外に連続するため不明である。SD01は幅3.0m以上、深さ0.4m、SD03は幅2.1m以上、深さ0.3mである。1662～1673はSD01、1674～1678はSD03から出土した。1662は黒色土器椀、1663～1665は須恵器、1666・1667は土師器椀、1668～1671は須恵器、1672は土師器杯である。1674は土師質土器小皿、1675は土師器甕、1676・1677は須恵器である。古代の遺物も混じるが、中世の遺物も含まれることから、SD01・SD03は中世の溝と考えられる。

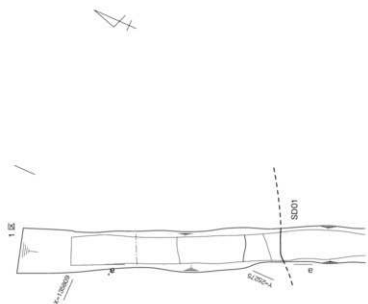
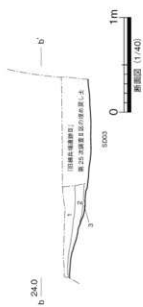
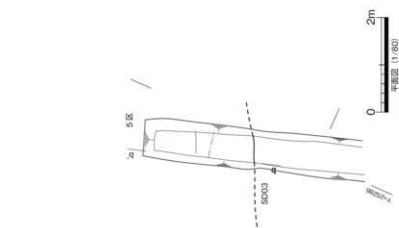


図 315 SD01・SD03

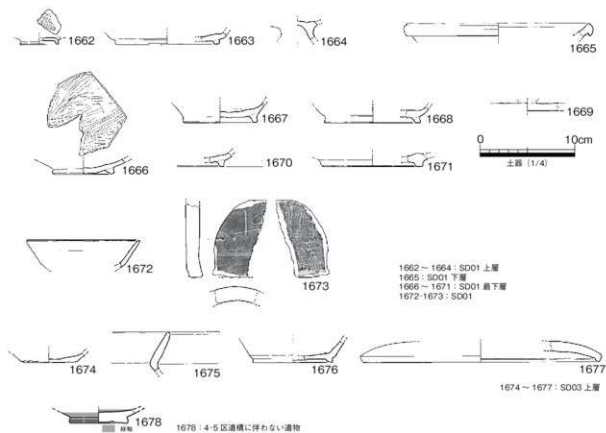


図 316 SD01 出土遺物・遺構に伴わない遺物